九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—11—

小郡市所在前伏遺跡の調査

1 9 8 7

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—11—

小郡市所在前伏遺跡の調査

序

福岡県教育委員会は、日本道路公団の委託を受けて、九州横断自動車道建設地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を昭和54年度以降実施し、本年度ですでに8年を経過しております。

今回の報告は昭和60年度に調査を行った小郡前伏遺跡についての調査結果を第11集としてとりまとめたものであり、本書が、文化財に対する認識と理解を深める上での一助となれば幸甚のいたりであります。

なお、発掘調査にあたっては、関係各位の御協力、御支援を得られたことに深謝する次第であります。

昭和62年6月30日

福岡県教育委員会

教育長　竹井　宏

例　言

1．本書は、昭和60年度に福岡県教育委員会が日本道路公団から委託されて発掘調査を実施した小郡前伏（オゴオリマエブシ）遺跡の報告書であり、九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第11冊目にあたる。

2．発掘で検出した遺構の実測・測量は宮小路、井上、佐々木、木村、高橋、小田、日高が行い、写真撮影は高橋、小田による。

3．遺物整理は岩瀬正信氏の指導により、九州歴史資料館と福岡県文化課甘木発掘調査事務所において行った。

4．遺物は実測を木村、高橋、小田、平田春美嬢が行い、写真は九州歴史資料館学芸一課の石丸洋氏、須原悦子嬢による。

5．遺構・遺物の製図・浄書は松嶋邦子、塩足里美、原田和枝嬢が行った。

6．本書の執筆分担は文末に記した。

7．本書で使用した方位はすべて真北である。

8．本書の編集は小田の援助のもとに高橋が行った。

本 文 目 次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 4

Ⅲ　遺構と遺物 …… 6

1．はじめに …… 6

2．竪穴式住居跡 …… 9

3．掘立柱建物 …… 48

4．方形竪穴 …… 50

5．土　壙 …… 56

6．井　戸 …… 68

7．溝 …… 70

8．その他の遺構 …… 70

9．石製品・鉄製品・フイゴ …… 72

Ⅳ　まとめ …… 74

1．竪穴式住居跡について …… 74

2．おわりに …… 76

図　版　目　次

本文対照頁

図版１　小郡前伏遺跡周辺航空写真（南西上空から）……1
図版２　(1)　小郡前伏遺跡全景（東から）……1
　　(2)　小郡前伏遺跡全景（西から）……1
図版３　(1)　住居跡群（東から）……9
　　(2)　住居跡群（西から）……9
図版４　(1)　１号住居跡（南から）……10
　　(2)　１号住居跡貼床下部（南から）……10
図版５　(1)　１号住居跡カマド……11
　　(2)　２号住居跡カマド……12
図版６　(1)　２号住居跡（南から）……12
　　(2)　２号住居跡貼床下部（南から）……12
図版７　(1)　３号住居跡、１号土壙遺物出土状況（北から）……14
　　(2)　３号住居跡貼床下部、１号土壙完掘後（南から）……15
図版８　(1)　４号住居跡（南から）……18
　　(2)　４号住居跡カマド……18
図版９　(1)　５号住居跡（南から）……19
　　(2)　５号住居跡カマド……20
図版10　(1)　４～８号住居跡（東から）……22
　　(2)　６号住居跡（手前は５号住居跡カマド）……22
図版11　(1)　７号住居跡（南から）……27
　　(2)　７号住居跡貼床下部……28
　　(3)　７号住居跡カマド……28
図版12　(1)　８号住居跡（南から）……28
　　(2)　８号住居跡遺物出土状況……28
図版13　(1)　９号住居跡（南から）……32
　　(2)　９号住居跡カマド……32
図版14　(1)　10号住居跡（南から）……34
　　(2)　10号住居跡貼床下部……34
　　(3)　10号住居跡カマド……34

図版15 (1) 9～14号住居跡（西から）……37
(2) 11・12号住居跡（南から）……37
図版16 (1) 11・12号住居跡貼床下部（東から）……37
(2) 11号住居跡カマド……37
図版17 (1) 13号住居跡（東から）……42
(2) 13号住居跡貼床下部……42
(3) 13号住居跡カマド……44
図版18 (1) 14号住居跡（南から）……45
(2) 14号住居跡貼床下部（南から）……45
図版19 (1) 14号住居跡カマド……45
(2) カマド土層断面……45
図版20 (1) 1号方形竪穴土層断面（南から）……50
(2) 1号方形竪穴（東から）……50
図版21 (1) 住居跡群及び1・2号方形竪穴……50
(2) 2号方形竪穴……50
図版22 (1) 2・3号土壙（東から）……62
(2) 3号土壙土層断面……63
(3) 4号土壙（東から）……63
図版23 (1) 1号井戸（北から）……68
(2) 1号井戸土層断面（北から）……68
図版24 (1) 1号住居跡出土土器……12
(2) 3号住居跡、屋内土壙出土土器……18
(3) 5号住居跡出土土器……22
(4) 6号住居跡出土土器……25
図版25 (1) 8号住居跡出土土器……30
(2) 11号住居跡出土土器……37
(3) 12号住居跡出土土器……42
図版26 (1) 13号住居跡出土土器……44
(2) 14号住居跡出土土器……45
(3) 2号方形竪穴出土土器……55
図版27 1号土壙出土土器①……58
図版28 (1) 1号土壙出土土器②……59
(2) 2号土壙出土土器……62

(3) 4号土壙出土土器……66
(4) 1号井戸出土土器……69
(5) 2号溝出土土器……70
図版29 住居跡他出土石製品……72
図版30 (1) 住居跡他出土鉄製品……73
(2) フイゴ羽口……73

挿 図 目 次

第1図 小郡前伏遺跡と周辺遺跡分布図(1/25000) ……折込み
第2図 小郡前伏遺跡周辺地形図(1/2000)…… 6
第3図 竪穴式住居跡模式図(例－7号住居跡)…… 7
第4図 カマド模式図…… 8
第5図 1号住居跡実測図(1/60)…… 9
第6図 1号住居跡カマド実測図(1/30)……10
第7図 1号住居跡出土土器実測図(1/3) ……11
第8図 2号住居跡実測図(1/60)……13
第9図 2号住居跡カマド実測図(1/30)……14
第10図 2号住居跡出土土器実測図(1/3) ……15
第11図 3号住居跡実測図(1/60)……16
第12図 3号住居跡カマド実測図(1/30)……17
第13図 3号住居跡出土土器実測図(1/3) ……17
第14図 3号住居跡屋内土壙出土土器実測図(1/3) ……18
第15図 4号住居跡実測図(1/60)……19
第16図 4号住居跡カマド実測図(1/30)……20
第17図 5号住居跡実測図(1/60)……21
第18図 5号住居跡カマド実測図(1/30)……22
第19図 5号住居跡出土土器実測図(1/3) ……23
第20図 6号住居跡実測図(1/60)……24
第21図 6号住居跡出土土器実測図(1/3) ……25
第22図 7号住居跡カマド実測図(1/30)……25
第23図 7号住居跡実測図(1/60)……26

第24図　7号住居跡出土土器実測図(1/3)……27
第25図　8号住居跡実測図(1/60)……29
第26図　8号住居跡出土土器実測図①(1/3)……30
第27図　8号住居跡出土土器実測図②(1/3)……31
第28図　9号住居跡カマド実測図(1/30)……32
第29図　9号住居跡実測図(1/60)……33
第30図　9号住居跡出土土器実測図(1/3)……34
第31図　10号住居跡実測図(1/60)……35
第32図　10号住居跡カマド実測図(1/30)……36
第33図　10号住居跡出土土器実測図(1/3)……36
第34図　11号住居跡カマド実測図(1/30)……37
第35図　11・12号住居跡実測図(1/60)……38
第36図　11号住居跡出土土器実測図(1/3)……39
第37図　12号住居跡出土土器実測図①(1/3)……41
第38図　12号住居跡出土土器実測図②(1/3)……42
第39図　13号住居跡実測図(1/60)……43
第40図　13号住居跡カマド実測図(1/30)……44
第41図　13号住居跡出土土器実測図(1/3)……44
第42図　14号住居跡実測図(1/60)……46
第43図　14号住居跡カマド実測図(1/30)……47
第44図　14号住居跡出土土器実測図(1/3)……47
第45図　1号掘立柱建物実測図(1/60)……48
第46図　1・2号方形竪穴実測図(1/60)……49
第47図　1号方形竪穴出土土器実測図(1/3)……50
第48図　2号方形竪穴出土土器実測図①(1/3)……51
第49図　2号方形竪穴出土土器実測図②(1/3)……52
第50図　2号方形竪穴出土土器実測図③(1/3)……53
第51図　2号方形竪穴出土土器実測図④(1/4)……54
第52図　1・2号土壙実測図(1/60)……57
第53図　1号土壙出土土器実測図①(1/3)……58
第54図　1号土壙出土土器実測図②(1/3)……60
第55図　1号土壙出土土器実測図③(1/4)……61
第56図　2号土壙出土土器実測図(1/3)……62

第57図　3号土壙実測図(1/40)……63
第58図　4号土壙実測図(1/60)……63
第59図　4号土壙出土土器実測図①(1/3)……64
第60図　4号土壙出土土器実測図②(1/3)……65
第61図　1・2号井戸実測図(1/40)……67
第62図　1号井戸出土土器実測図(1/3)……68
第63図　2号井戸出土土器実測図(1/3)……69
第64図　2号溝出土土器実測図(1/3)……69
第65図　石製品実測図(1/2、1/4)……71
第66図　鉄製品実測図(1/2)……72
第67図　フイゴ羽口実測図(1/3)……73
第68図　小郡前伏遺跡住居跡変遷模式図(1/600)……折込み

Ⅰ　調査に至る経過

第２地点は弥生・古墳時代の散布地として登録されていた。その対象地は、ＳＴＡ４＋80～13＋20間で、小郡市の市街地であった。幼稚園・工場・商店・個人住宅などが密集した地区であるため、用地買収は難航していた。

当初、道路公団は文化課に対し、昭和59年度に試掘調査を実施し、調査地区の確定をしてほしい旨、依頼してきた。しかし、用地の確保が遅れたため、年度内にはＳＴＡ４＋80～６＋20間の試掘を実施しただけであった。従って、本格的に試掘を実施できるようになったのは、用地の確保と建物の移転が進行した昭和60年４月中旬から５月中旬にかけてであった。その結果、ＳＴＡ11＋80～13＋15間の西鉄小郡駅西側、約5000m^{2}に文化財が存在することが判り、試掘後、直ちに本調査を実施するため、重機による表土剝ぎ作業を開始した。

発掘調査を開始したのは、５月22日からで、調査は梅雨期に入ったため、調査地区は何度となく水没するはめになったものの、７月19日には調査を終了することができた。調査の結果は、奈良時代の竪穴住居跡14軒、掘立柱建物１棟、方形竪穴２基、土壙４基、井戸２基、溝２条が検出された。遺構の分布状況からみて、集落の主体は路線の北側に拡がるようである。

以下、日誌から調査経過をふりかえっておきたい。

５月22日　器材搬入、テント設営、遺構検出作業に着手。

５月23日　ピット、住居跡を確認。

５月24日　住居跡８軒を確認。

５月27日　住居跡13軒を確認。測量杭を打つ。

５月30日　ベルトコンベアーを搬入して遺構検出作業を行う。

６月１日　土壙を確認。

６月４日　Ａ区東端部から遺構平面図（Ｓ＝1/20）実測に着手。同時に平板測量（Ｓ＝1/100）も行う。

６月５日　３号住居跡は１号土壙と切合い関係が認められ、１号土壙が３号住居跡を切っていることが判った。

６月８日　10号住居跡のカマドを掘り下げる。紡錘車出土。

６月11日　４号土壙は当初住居跡かと思われたが、住居跡ではなく土壙であった。

６月13日　側道部分の表土除去。

６月14日　１号住居跡の下層を掘り下げる。Ｂ地区の遺構検出に着手。各々の住居跡、カマド等の図面作成。

6月17日　側道部分の遺構検出。7号住居跡を確認。

6月18日　高所作業車にて全景写真撮影を行う。

6月19日　1号溝から紡錘車出土。

6月24日　実測図作成に追われる。

この間、雨天の連続で思うように作業および実測図作成等ができず、気持があせる。

7月10日　A地区とB地区の中間に1軒のみ用地買収が遅れていたが、やっと解決でき、本日バックフォーにて表土除去を行う。

7月12日　3・7～9・11～14号住居跡の下層を掘り下げる。

この間、図面・写真撮影および遺構細部の再確認調査等に一同全力を注ぐ。

7月19日　器材・テント等を撤収し、小郡前伏遺跡の調査を終了する。

調査にあたっては、道路公団甘木工事事務所、徳倉・大木組共同企業体、小郡市教育委員会をはじめ、地元の作業員の方々の御協力を得た。また、整理作業については九州歴史資料館、文化課甘木発掘調査事務所で実施したことを記して感謝の意を表したい。

なお、昭和60年度における調査関係者は次のとおりである。

日本道路公団福岡建設局

局　長	今村　浩二	
総務部長	菱刈　庄二（前任）	安元　富次
管理課長	森　宏之	
管理課長代理	佐伯　豊	

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

所　長	乗松　紀三	
副所長	西田　功	
副所長（技術担当）	中村　義治	
庶務課長	徳永　登	
用地課長	岩下　剛	
工務課長	後藤　二郎彦	
小郡工事区工事長	友田　義則	
甘木工事区工事長	猪狩　宗雄	
朝倉工事区工事長	平沢　正（前任）	小手川良和
杷木工事区工事長	山中　茂	

福岡県教育委員会

（総　括）

教育長	友野　隆
教育次長	安部　徹
管理部長	大鶴　英雄
文化課長	前田　栄一
文化課長補佐	平　　聖峰
文化課長技術補佐	宮小路賀宏
文化課参事補佐	栗原　和彦

（庶　務）

文化課庶務係長	平　　聖峰（兼任）
文化課事務主査	長谷川伸弘

（調　査）

文化課調査第２係長	宮小路賀宏（兼任）
同　技術主査	井上　裕弘
同　主任技師	高橋　章　（現京築教育事務所技術主査）
同　主任技師	中間　研志
同　主任技師	佐々木隆彦
同　技　師	小田　和利
同　文化財専門員	木村　幾多郎
臨時職員	日高　正幸

Ⅱ　遺跡の位置と環境

九州横断自動車道の路線は、九州縦貫自動車道と交差する鳥栖インターチェンジから東へ延び、小郡市街地の中心部を横断し、昭和62年２月に鳥栖・朝倉間までが一般供用されている。小郡前伏遺跡は、小郡市街地のちょうど中心部に位置し、周辺は住宅密集地である。

遺跡周辺の地形は、背振山、耳納山、朝倉山塊に囲まれ、そこに河川が開析して形成された沖積平野である。そこには東側に宝満川が南流し、西方には秋光川が同様に南流する。その河川流域には古代の住居、墳墓が多く発見されており、小郡市街地（本跡）はこの両河川に挟まれた扇状地にあって、低丘陵および段丘状をなしたところに立地する。

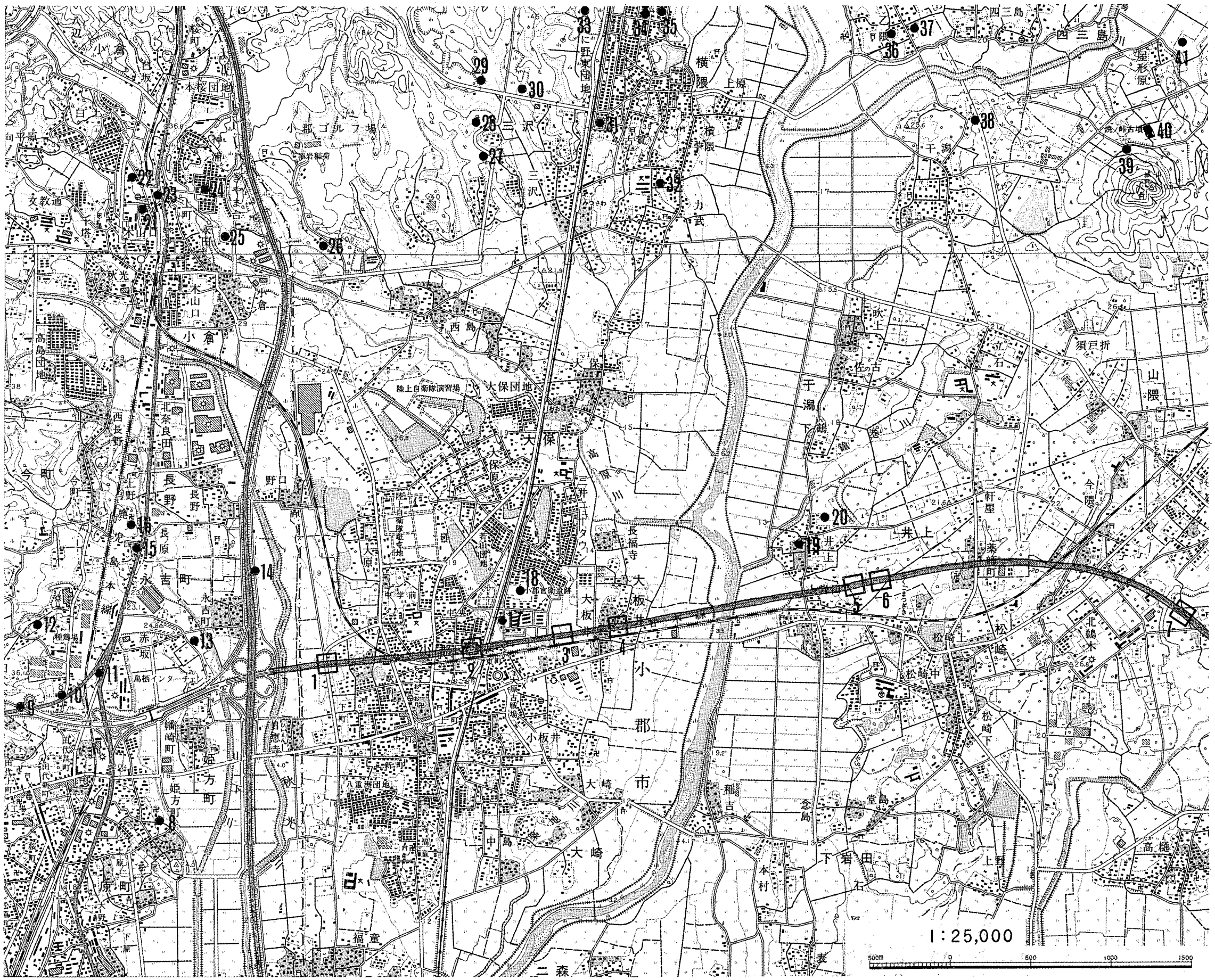
また遺跡の東方には、宝満川に沿って西鉄大牟田線が、西方約1.5kmには国鉄鹿児島本線、国道３号線が走っている。さらに遺跡の南側は甘木鉄道が走り、交通の要衝となっており、福岡市、久留米市の中間的要地として開発の一途をたどっている。

本跡付近の遺跡等に注目すると、まず縄文時代では横隈山遺跡(註1)、向築地遺跡(註2)、干潟遺跡(註3)等があるが、遺構の数は極めて少ないといえる。そのなかでも、横隈山遺跡はナイフ形石器が出土するなど、旧石器時代遺跡として知られている。

弥生時代では最近九州縦貫自動車道、同横断道建設や中九州ニュータウン建設の宅地造成等の先立つ発掘調査で数多くの遺跡が紹介されつつあり、資料の増加をたどっている。従来、大板井遺跡は甕棺墓地として知られ、銅戈７口が出土していることは注目に値する。他に小郡市干潟遺跡(註4)、井上北内原遺跡(註5)等からは弥生時代中～後期の甕棺墓群が発見されている。本跡の北域では北牟田遺跡(註6)が知られ、その12号木棺墓から銅剣切先等が出土し、他に鉄戈、鉄剣、青銅製品などが発見されたことは、ここの三国丘陵遺跡群を考える上で興味深い。

古墳時代に目を向けて、まず前方後円墳をみると、本跡北域に横隈山古墳がある。しかし、詳細については判っていない。干潟遺跡の東方約１kmには松尾古墳群が、約２kmには小隈古墳が位置する。松尾古墳群の丘陵上には焼ノ峠古墳(註7)があって、前方後方墳として名高く、全長40mで周溝内から二重口縁壺、広口壺等が出土している。その他円墳数基が発見されている。ちなみに小隈古墳は前方後円墳である。

最近の横断自動車道の発掘調査結果からみると、古墳時代から歴史時代にかけて多くの住居跡、掘立柱建物跡が検出されている。本跡付近は大宰府と筑後国府を結ぶ古代官道のルート上にあり、小郡官衙遺跡(註8)、井上廃寺(註9)、干潟遺跡など歴史時代の名高い遺跡を見る。また、横断道路線内の井上薬師堂遺跡(註10)で谷部を調査した結果、井上廃寺出土とされている奈良・山田寺系瓦や木簡、墨書土器、多くの木器類を出土した。このことは小郡市井上付近における歴史時代の



1．小郡正尻遺跡　2．小郡前伏遺跡　3．大板井遺跡（7区）　4．大板井遺跡（6区）　5．井上薬師堂遺跡　6．薬師堂東遺跡　7．宮巡遺跡　8．姫方遺跡　9．太田東方古墳
10．田代天満宮東方遺跡　11．本川原遺跡　12．剣塚古墳　13．南西川遺跡　14．永吉遺跡　15．長ノ原遺跡　16．上野古墳　17．向築地遺跡　18．小郡官衙遺跡　19．井上廃寺遺跡
20．井上北内原遺跡　21．千塔山遺跡　22．とうれぎ土塁　23．関屋土塁　24．城ノ上遺跡　25．伊勢山遺跡　26．花聳古墳群　27．宮裏遺跡　28．三沢栗原遺跡　29．松尾口遺跡
30．北牟田遺跡　31．横隈山遺跡　32．三国小学校遺跡　33．三沢蓬ケ浦遺跡　34．横隈山古墳　35．横隈孤塚遺跡　36．乙隈天満宮遺跡　37．乙隈東畑遺跡　38．干潟遺跡
39．松尾古墳郡　40．焼峠古墳　41．金山遺跡

第 1 図　小郡前伏遺跡と周辺遺跡分布図（昭和59年３月国土地理院発行の２万５千分の１「小郡」を使用）

遺構を一層強調し、大宰府との関係性を深める事実である。因に隣接して薬師堂東遺跡(註11)では、住居跡・掘立柱建物群が検出されている。井上の集落より東方約4kmでは、奈良時代の住居跡群が密集した立野遺跡(註12)、宮原遺跡が調査され、その規模、構造等を把握するに充分な資料を提供するに至っている。

このように歴史時代においても、九州管内を統一した大宰府遺跡も年次的計画調査が進行しつつあり、府の規模、構造さらに役人の生活住居の空間までせまろうとしている。併せて一般平民の住居生活遺構が多数発見されてきていることは奈良時代の生活を知る新たなプロフィールとして注目していかねばならない問題である。

なお、小郡市周辺の環境と古代遺跡の分布に関しては、九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告の5・7・10集に記してあり、詳細はそれにゆずることとする。(高橋)

註　1　横隈山遺跡　小郡市文化財調査報告書第3集　小郡市教育委員会　1974
註　2　向築地遺跡　小郡市文化財調査報告書第5集　小郡市教育委員会　1978
註　3　干潟遺跡1　福岡県教育委員会　1980
註　4　干潟遺跡　小郡市文化財調査報告書第16集　小郡市教育委員会　1983
註　5　井上北内原遺跡　小郡市文化財調査報告書第20集　小郡市教育委員会　1984
註　6　九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXXI　福岡県教育委員会　1979
註　7　福岡県城山遺跡群　夜須町教育委員会　1972
註　8　福岡県三井郡小郡遺跡発掘調査概要　福岡県教育委員会　1968
註　9　小田富士雄　「九州における山田寺系棰先瓦の発足」　歴史考古学6　1961
註　10　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―10―　福岡県教育委員会　1987
註　11　九州横断自動車道関係の埋蔵文化財調査で、住居跡、掘立柱建物等を多数検出しており、現在整理中である。
註　12　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―8―　立野遺跡（3）
福岡県教育委員会　1986

Ⅲ　遺構と遺物

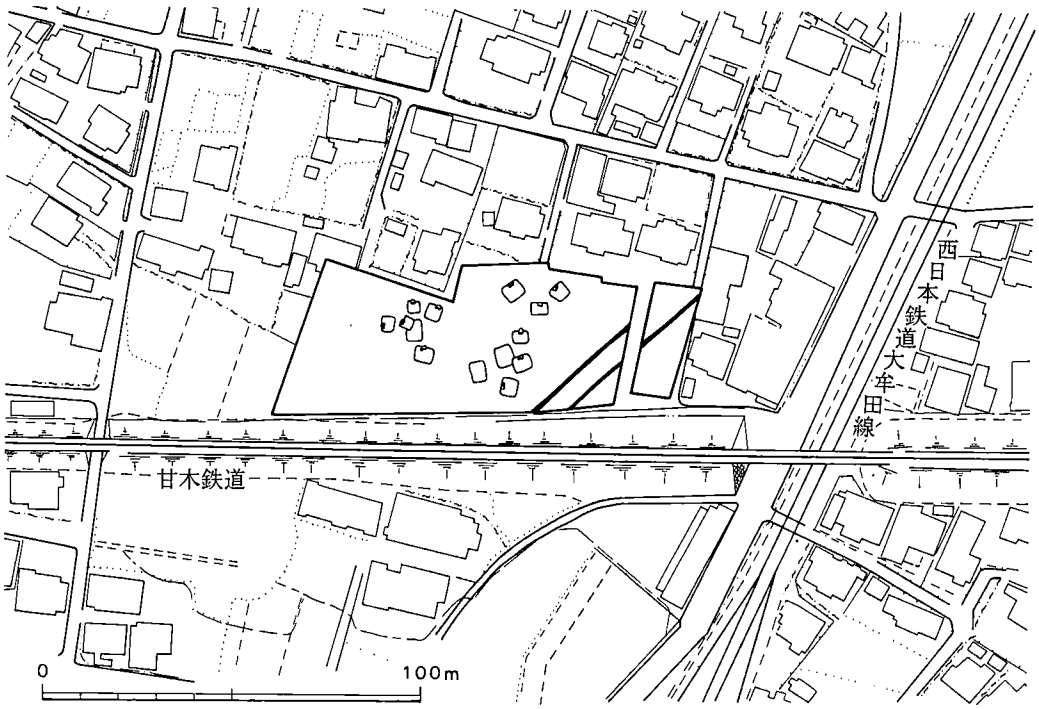
1．はじめに

小郡前伏遺跡は甘木鉄道と西鉄大牟田線の交差する北西部に位置するが、ちょうど甘木鉄道と平行して九州横断自動車道が走る形となる。

調査区はA・B地区に分けた。西側をA、東側をBとし、区内には当初用地買収が遅れていたせいもあって、民家が1軒あり、調査期間の後半頃に移転が行なわれた。区内に重機を入れて表土除去作業をはじめたが、ここには民家が軒を並べていたらしく、家の基礎ならびに家崩れの際の攪乱等で遺構面はかなり荒廃していた。

調査区の遺構面は西側が高く標高25.6mで、東側につれて約1.5mゆるやかなスロープで低くなっている。調査を開始してまもなく梅雨期に入ったため、東側の低地に水が溜り、調査は1週間以上遅々として進展しなかった。結局5月22日に調査を開始し、7月19日にすべて終了することができた。

A地区は近世の攪乱の為に遺構の残存状態は良くなかった。検出された遺構は、住居跡14軒、掘立柱建物1棟、方形竪穴2基、土壙4基、井戸2基、溝2条と多数のピット群である。住居



第 2 図　小郡前伏遺跡周辺地形図(1/2000)

跡は区内の中央部に集中して検出し、南・北方向に拡がりをみせている。

B地区は、A地区東側部と同じ遺構面の高さを保ち、表土および暗褐色土を除去すると遺構面に達する。区内は攪乱が著しくA地区から延びた溝2条と新しい落込み状の遺構を検出するにとどまった。

尚、本稿では各遺構ごとに説明することとし、(例) の①～②の順に記述した。

(例) ①1号住居跡
　　カマド
　② 出土土器
　　須恵器
　　土師器

また、鉄製品、石製品、フイゴについては、別項にまとめた。

〈竪穴式住居跡について〉

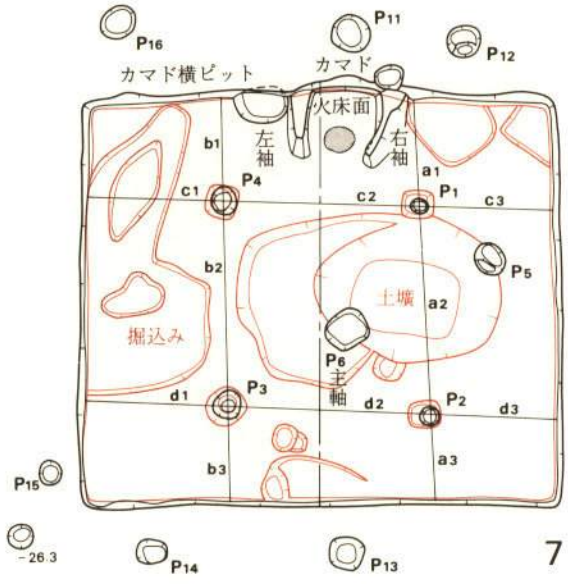
小郡前伏遺跡では竪穴式住居跡を14軒検出しており、個々の住居跡の記述においては以下の点について記述する。

位　置……調査区の何処に住居跡が位置するか。

規　模……長軸×短軸mと表記し、床面積はプラニメーターによる測定値である。床面積が10㎡未満の住居跡、14㎡前後の住居跡、20㎡を越す住居跡がある。

平面形……長方形と方形がある。

主軸方位……カマドが付される辺を上にした場合に住居跡の中軸線と真北



第 3 図　竪穴式住居跡模式図(例－7号住居跡)

とのなす角度。N00° W若しくはN00° Eと表記。

主柱穴……P１～４の４本が主柱穴。

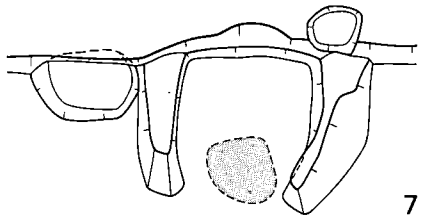
補柱穴……住居跡の周囲に配されるピットで、P11より番号を付したが、必ずしも住居跡に伴うとは限らない。数値は検出面からの深さ。

柱　間……主柱穴相互の距離で、主柱穴を結んだ線は方形もしくは長方形を呈する。

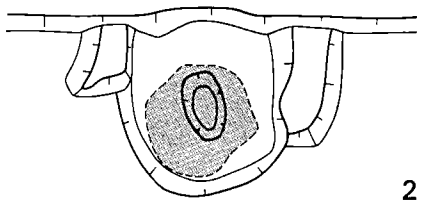
床　面……黄褐色土と茶褐色土で貼床しており、主柱穴を結んだ範囲は踏み締められて堅くなっている。

貼床下部……貼床を剝がして検出した土壙や溝状の掘込み。

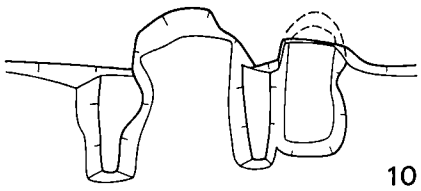
遺　物……出土土器には須恵器と土師器があり、土製品・石製品・鉄製品等については別記した。



作り付け型



掘込みを有する作り付け型



突出型

第 4 図　カマド模式図

〈カマドについて〉

カマドを有する住居跡は、北・北西・西壁の何れかに付設しており、作り付け型・掘込みを有する作り付け型・突出型の三者に分類した。

位　置……住居壁の何処にカマドが付設されるかということ。

形　態……作り付け型（1）、掘込みを有する作り付け型（2）、突出型（3）がある。

1は住居壁に袖部を貼り付けたカマド。

2は作り付け型の袖部前面に掘込みをもつカマド。

3は住居壁を掘込んで袖部を貼り付けたカマド。

袖　部……黄褐色土と茶褐色土を盛っており、補強材として土器を袖の中に入れる例もある。

火床面……加熱を受けて赤変している。

支　脚……小型甕を倒立させて使用している。

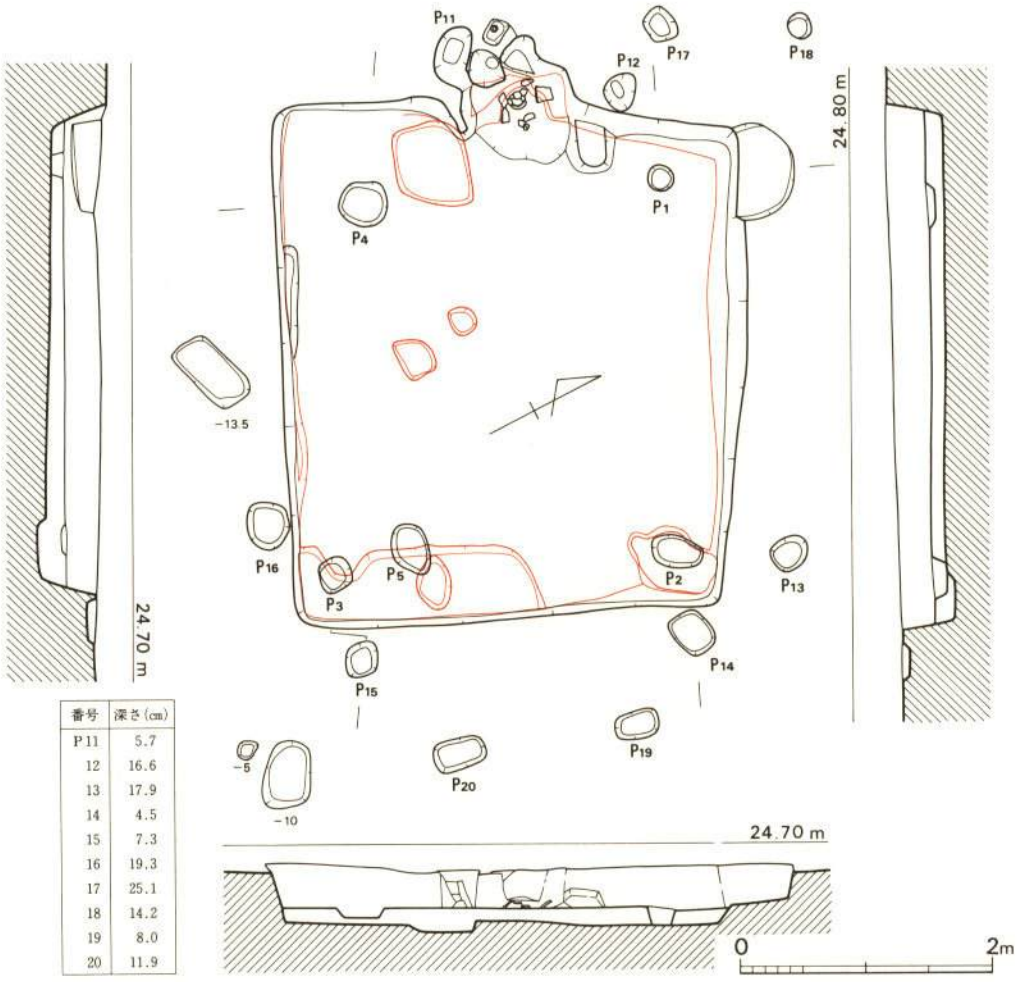
袖横ピット……袖部の隣にあり、内には炭・焼土・灰が詰まっている。

2．竪穴式住居跡

調査区の中央に群集するが、住居跡どうしの切合いは少ない。平面形は方形ないし長方形を呈し、4本柱と考えられる。カマドは住居壁の北・北西・西側の何れかに付設している。前後関係は次のとおりである。(矢印は古→新を表す)

3号住居跡　→　1号土　壙

12号住居跡　→　11号住居跡



番号	深さ(cm)
P11	5.7
12	16.6
13	17.9
14	4.5
15	7.3
16	19.3
17	25.1
18	14.2
19	8.0
20	11.9

第 5 図　1号住居跡実測図(1/60)

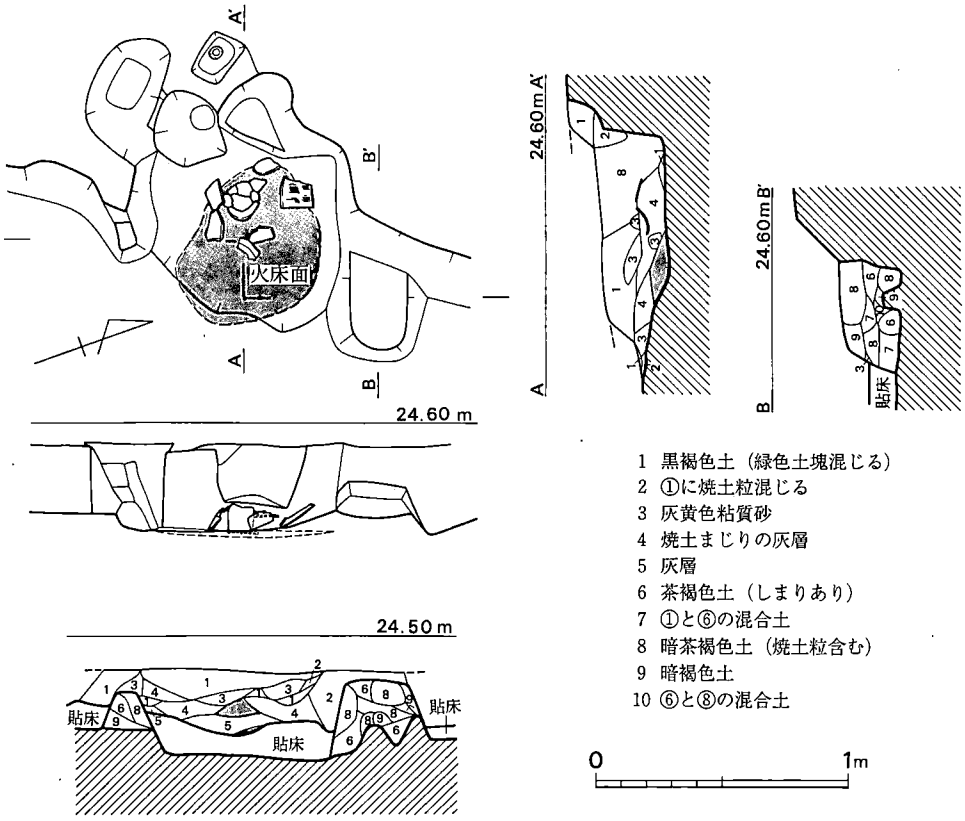
1号住居跡（図版４－１、第５図）

調査区の中央北側に単独で位置する。平面形は長方形を呈し、長軸4.03m、短軸3.46m、壁高20～30cmを測る。床面積は13.4m^{2}であり、主軸方位はN62°Wを示す。コーナー部に偏しているＰ１～４が主柱穴と考えられ、深さはＰ１―11cm、Ｐ２―19cm、Ｐ３―12cm、Ｐ４―６cmと浅い。柱間はＰ１～２間3.0m、Ｐ４～３間3.0m、Ｐ１～４間2.4m、Ｐ２～３間2.8mを測る。また、竪穴外のＰ11～16は補柱穴になるか。

床面は平坦であり、中央部は踏み締められて堅くなっていた。壁溝は南壁の一部に認められた。遺物は埋土中から須恵器・土師器・鉄製品、カマド内から土師器が出土した。

カマド（図版５－１、第６図）

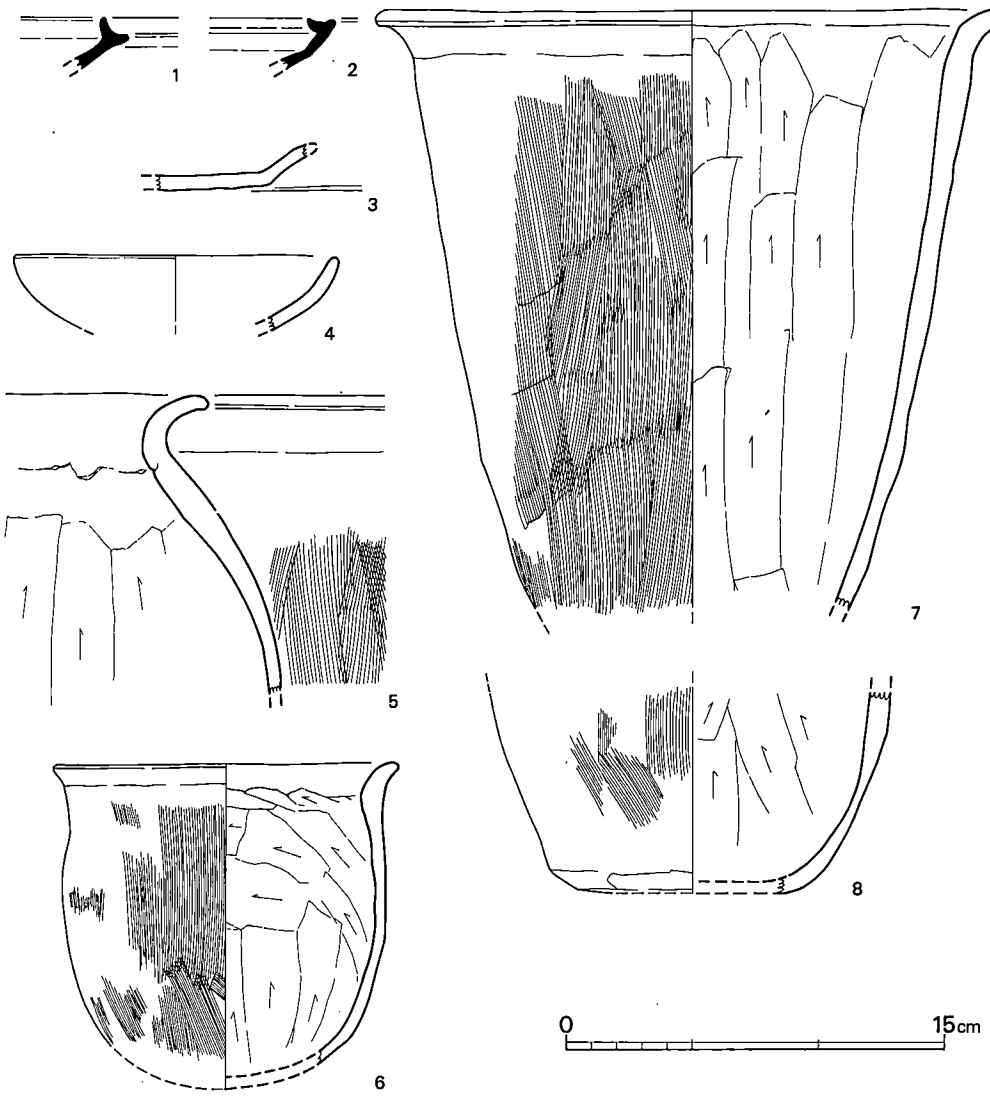
突出型で西壁中央に付設している。天井部は残存せず袖部が辛うじて残っている位であった。右袖は長さ40cm、最大幅40cm、残高11cmを測る。また、袖部は地山の暗褐色土を盛っており、



第 6 図　１号住居跡カマド実測図(1/30)

⑧には焼土粒が混ざっていた。カマド奥壁から飛び出している穴が煙道と考えられる。火床面は堅く焼けていたが、壁体はさほど焼けていなかった。支脚は小型甕を倒立させて使用している。

出土土器（図版24－１、第７図）



第 7 図　１号住居跡出土土器実測図(1/3)

須恵器

坏（1・2）　1は身である。2の受部の立上りは1よりも低く、蓋になるかもしれない。ともに受部はヨコナデである。焼成・胎土とも良好で、色調は暗灰色を呈する。

土師器

皿（3）　口唇部を欠く。内外面ともナデ調整である。

坏（4）　口縁部の破片であり、口唇部は丸く納める。内外面ともヘラミガキ調整による。また、内面には赤色顔料の塗布がみられた。

甕（5・6・8）　5は口縁～肩部の破片で、口縁部は鉤状に屈曲する。6はカマドの支脚として使用した小型甕で、推高13.0cm、口径13.3cmを測る。8は底部資料である。何れも内面ヘラケズリ、外面ハケ目調整である。5の外面には煤が遺存している。

甑（7）　口縁部は外方に屈曲している。内面はダイナミックなヘラケズリ、外面はハケ目調整であり、外面には煤が遺存する。

1～4は埋土中、6～8はカマド内、5は貼床中の出土である。

2号住居跡（図版6－1、第8図）

1号住居跡の南西側2.5mに位置する。平面形は長方形を呈し、長軸4.32m、短軸3.24m、壁高は北壁側で21cmを測る。床面積は14.1m^{2}であり、主軸方位はN9°Wを示す。主柱穴はP1～4であり、1号住居跡同様コーナー部に偏している。深さはP1—4cm、P2—16cm、P3—11cm、P4—8cmと浅い。柱間はP1～2間2.4cm、P4～3間2.4m、P1～4間3.5m、P2～3間3.2mを測る。また、竪穴外のP11～19は補柱穴になるか。

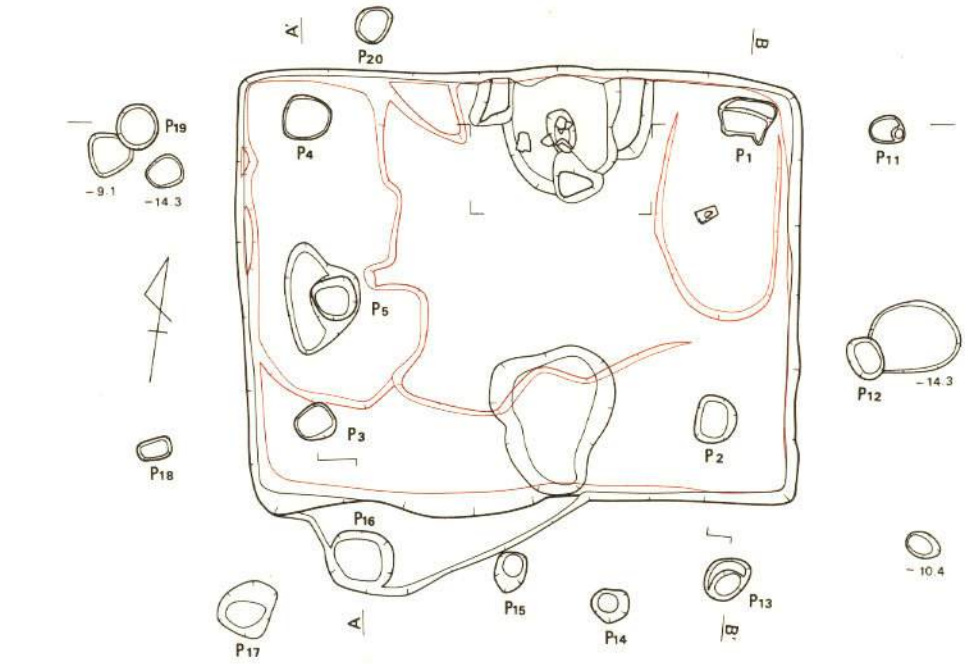
床面はほぼ平坦で、中央部は堅く踏み締められていた。貼床の下部には浅い溝状の掘込みがみられた。遺物は埋土中から須恵器・土師器及びフイゴの羽口、カマド内から土師器が出土している。

カマド（図版5－2、第9図）　火床面の掘込みを有する作り付け型であり、北壁の中央やや右寄りに付設している。天井部は残存せず袖部のみ残るが、掘込み前面の粘土は崩壊した天井部の残骸と考えられる。右袖は長さ64cm、最大幅40cm、残高23cmを測る。袖部は黒褐色土を盛っている。火床面は堅く焼けていたが、壁体はさほど焼けていなかった。また、火床面は床面よりも低く、中央には12×20cmの小穴があり支脚の抜き跡であろう。カマド内からは土師器片が浮いた状態で出土した。

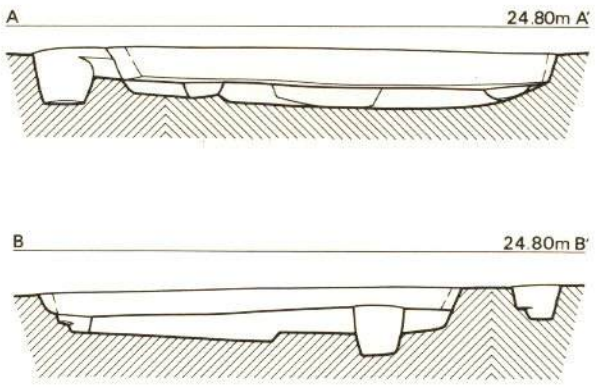
出土土器（第10図）

須恵器

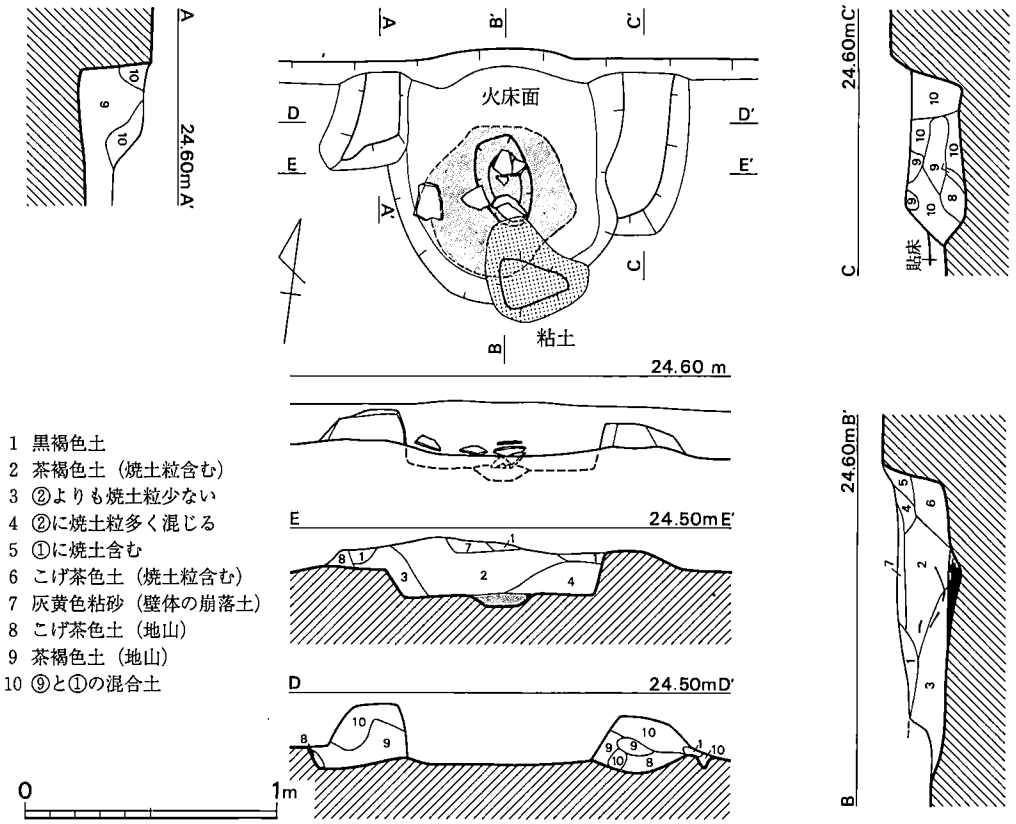
甕（4）　口縁部破片であり、内面には厚く灰をかぶる。



番号	深さ(cm)
P11	5.9
12	23.8
13	24.6
14	11.6
15	31.3
16	38.7
17	12.7
18	34.1
19	26.3



第 8 図　2 号住居跡実測図(1/60)



第 9 図　2号住居跡カマド実測図(1/30)

土師器

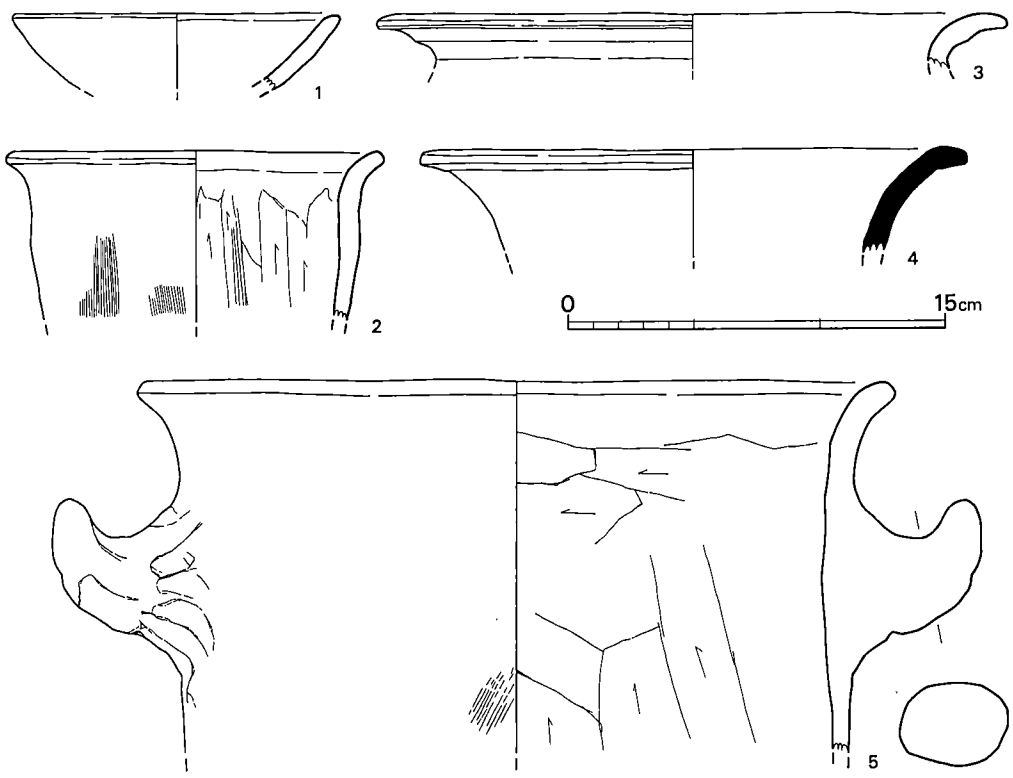
坏（1）　口縁部の小破片である。内面はヘラミガキを施す。

甕（2・3）　2は小型の甕である。口縁部ヨコナデ、内面ヘラケズリ、外面ハケ目調整による。3は口縁部破片で、外面を強くナデている。

甑（5）　口縁部は僅かに外反し、把手は上位に付している。内面はダイナミックなヘラケズリを施す。胎土に長石・石英・雲母・赤褐色粒を含む。(小田)

3号住居跡（図版7－1、第11図）

2号住居跡の北西側3.5mに位置し、1号土壙に切られる。平面形は方形を呈し、長軸4.62m、短軸4.36m、壁高は北西壁側で32cmを測る。床面積は22.0m^{2}程であり、主軸方位はN56°Wを示す。主柱穴は4本と考えられるが、1本分は土壙に壊され存在しない。深さはP1—82cm、P2—42cm、P3—78cmと深い。柱間はP1～2間2.3m、P1～3間2.5mを測る。



第 10 図　2号住居跡出土土器実測図(1/3)

西壁側には長さ1.9m、幅0.76m、深さ1.0mの屋内土壙があり、上層から須恵器が出土した。

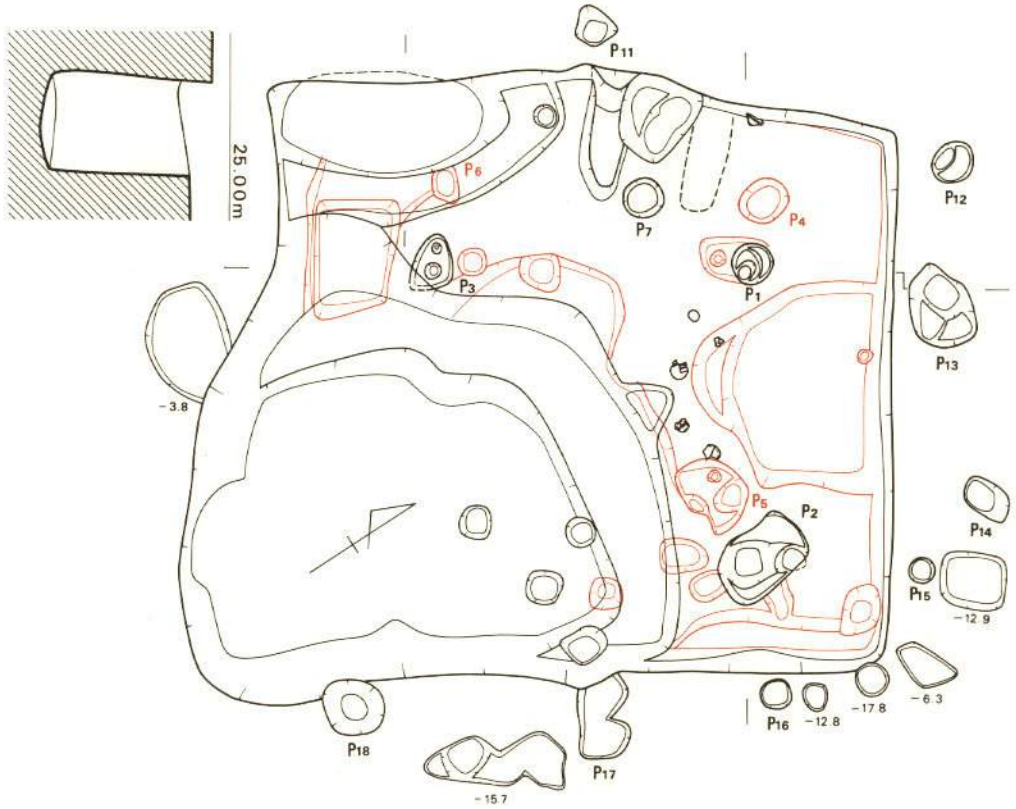
床面は土壙側に緩傾斜している。P 4 ～ 6 は貼床下部の検出であり、建替えがあったものと考えられる。北壁側には土壙状の掘込みがある。遺物は埋土中から土器・鉄製品・石製品・フイゴの羽口等が出土した。

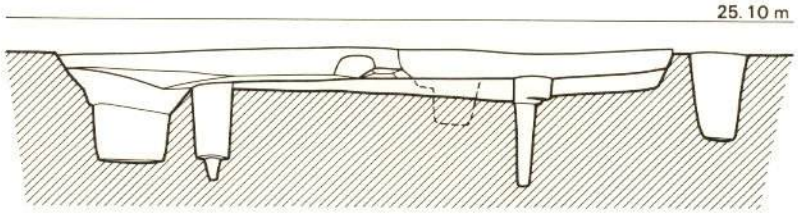
カマド（第12図）

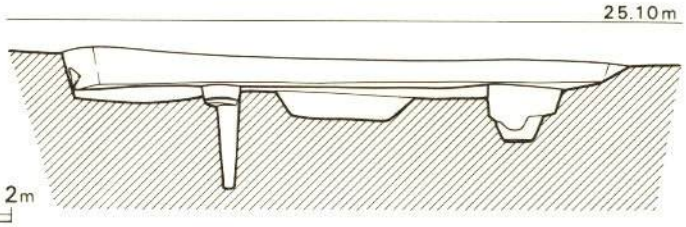
作り付け型であり、北壁の中央やや右寄りに付設している。遺存状態は悪く、カマド奥壁にあるピットに壊されており、左袖が残るのみである。左袖は長さ89cm、最大幅36cm、残高23cmを測る。袖部は茶褐色土を盛っている。支脚は遺存せず、火床面はさほど焼けていなかった。また、左袖のすぐ横にはピットがあり、焼土・灰が充満していた。灰を一時的に貯めておくための穴であろうか。

出土土器（図版24－ 2 、第13図）

土師器　1 ～ 6 は埋土上層出土の土師器である。

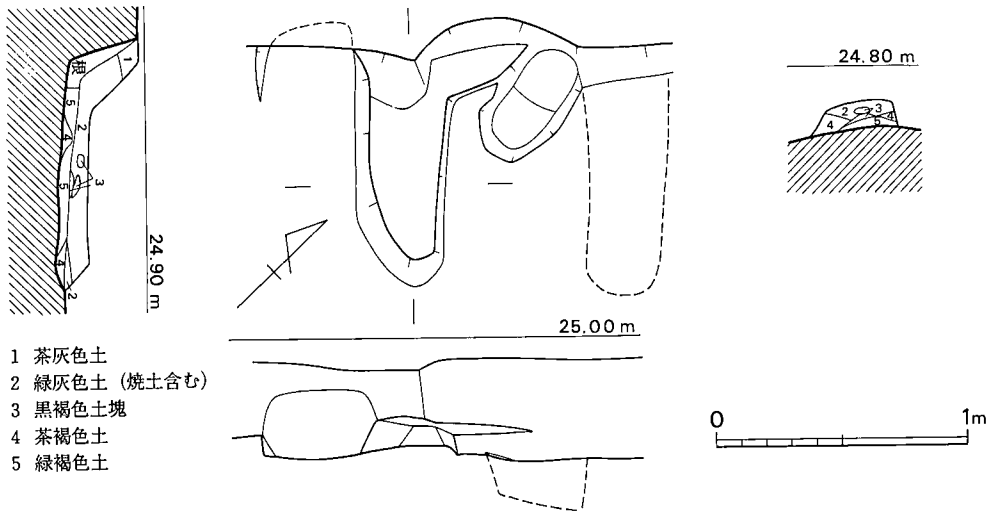




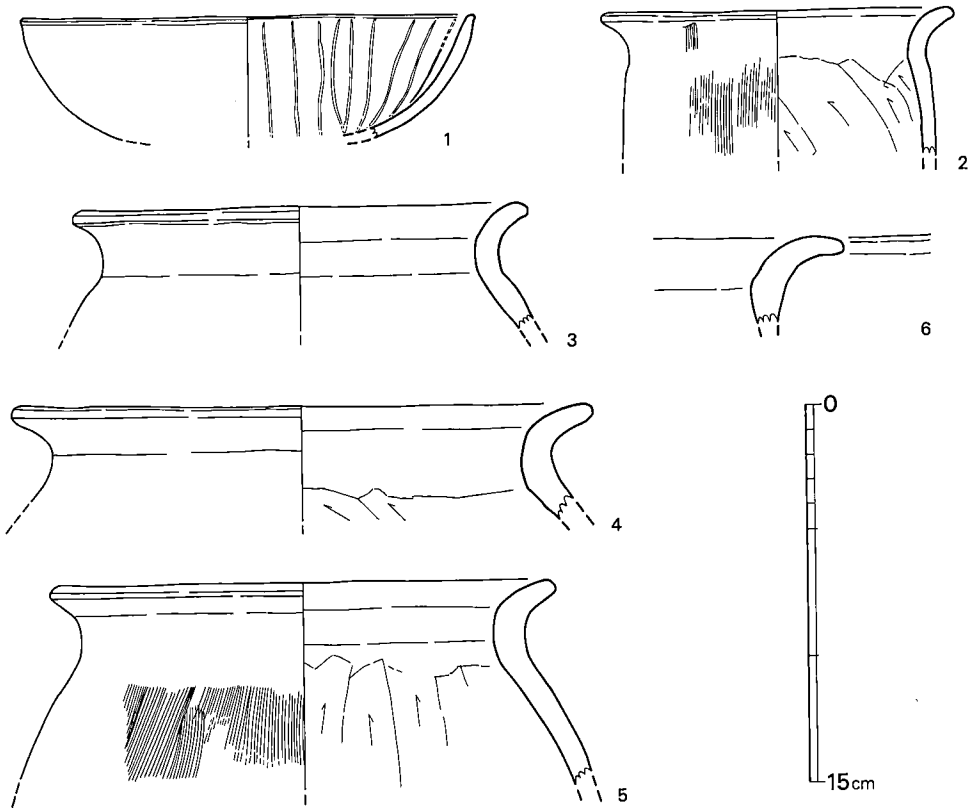


番号	深さ(cm)
P11	43.0
12	15.4
14	36.0
15	11.6
16	21.2
17	4.7
18	46.1

第 11 図　3 号住居跡実測図(1/60)



第 12 図　3 号住居跡カマド実測図(1/30)



第 13 図　3 号住居跡出土土器実測図(1/3)

埦（1）　口唇部は平坦面を有し、内面は暗文状のヘラミガキを施す。胎土は精良で、色調は褐色を呈する。

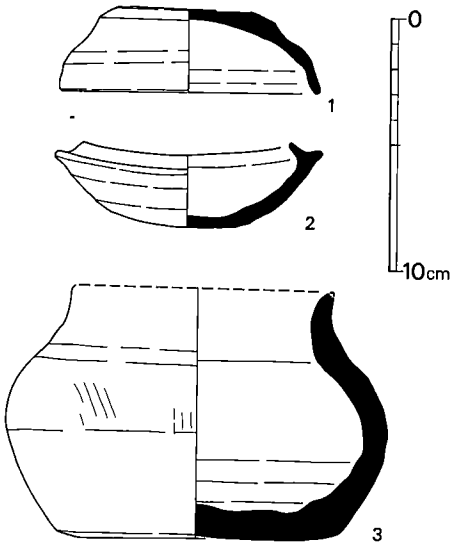
甕（2～6）　2は小型の甕である。口縁部ヨコナデ、内面ヘラケズリ、外面ハケ目調整による。3～6は口縁部破片であり、何れも口縁部ヨコナデ、内面ヘラケズリ、外面ハケ目調整による。胎土に長石・石英・雲母を含む。また、3の外面には煤が遺存する。

屋内土壙出土土器（図版24－2、第14図）

須恵器

坏（1・2）　1は蓋で、器高3.3cm、口径10.0cmを測る。口唇部は丸く納めており、天井部は平坦面を有する。口縁部はヨコナデ、内面ナデ、外面ヘラケズリ調整である。焼成は軟質で、灰色を呈する。2は身で、かなり焼き歪みがある。受部ヨコナデ、内面ナデ、外面ヘラケズリ調整を施す。焼成は軟質で、褐色を呈する。

壺（3）　口唇部を欠く。胴部は張っており、平底の底部へ移行する。焼成は極めて軟質であり、色調は明灰色を呈する。また、外面にはT字形のヘラ記号がある。（小田）



第14図　3号住居跡屋内土壙出土土器実測図(1/3)

4号住居跡（図版8－1、第15図）

5・6号住居跡の北側にあり、何れの住居跡とも切合い関係はない。長軸4.14cm、短軸（主軸）2.82mで、主軸に対して横長の長方形をなす。現状での壁高は、南壁38.4cm、西壁42.3cm、東壁27.3cmを測る。主柱穴は下層まで掘下げたが、竪穴内では検出できなかった。P3—27.0cm、P4—44.1cm、P6—39.7cm、P9—21.3cmと深いが不規則である。壁上のP12（22.1cm）・P16（33.5cm）等は、本住居跡に関連する柱穴であろうか。主軸方位はN15°Wを示し、床面積は11.7m²を測る。

カマド（図版8－2、第16図）

カマドは、北壁のほぼ中央に設ける。掘形は壁外に奥行30cm、幅80cm程方形に掘込む。壁に長さ50cm程の両袖を取りつける。焚口に床面より5cm程高く土手状のものを設ける。カマド奥行85cm、燃焼部の下部は15cm程掘込まれている。カマドに使用されているものと同じ粘土を、カマド左右の竪穴壁に、袖際より西へ50cm、東へ70cm、現状で2cmの厚さに貼っていた。住居内壁全面に貼っていたとは考えられず、カマド構築時の必要から貼ったものと思われ

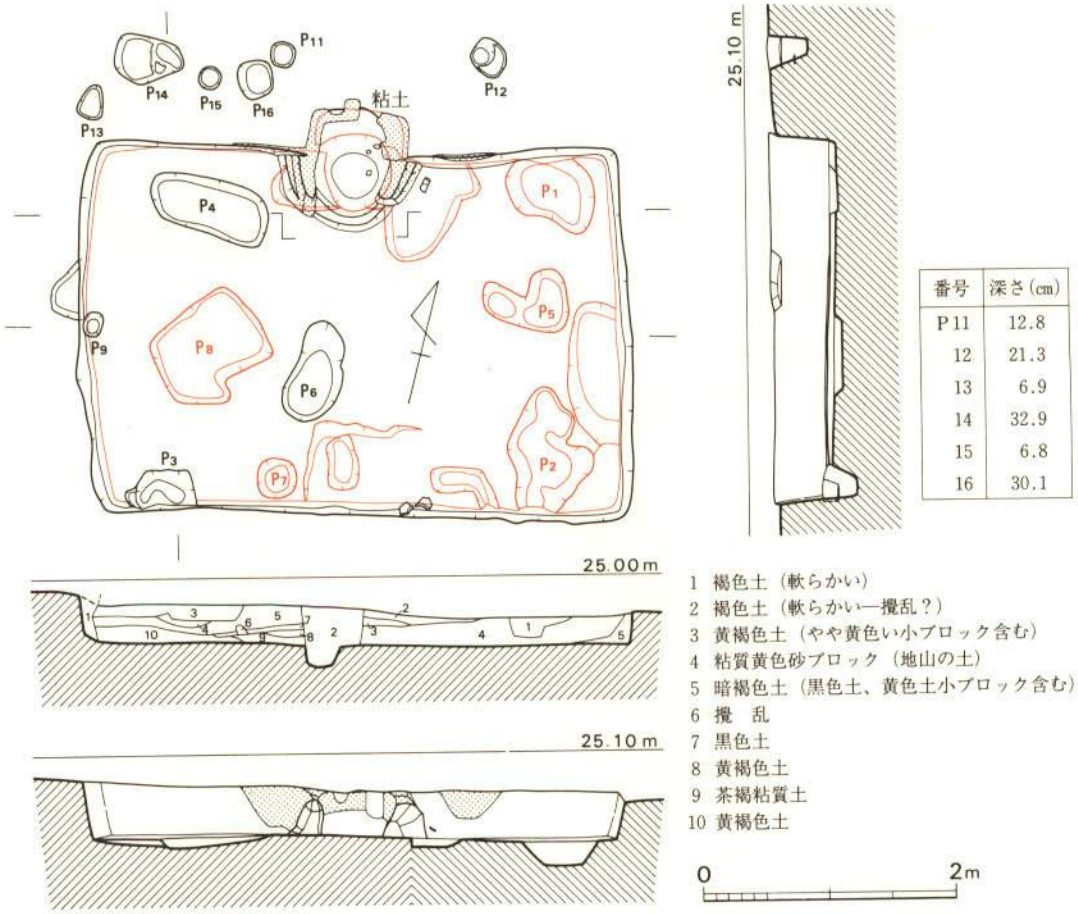
るが意図は不明である。

出土土器

土師器甕・坏、須恵器坏蓋片が出土しているが、何れも小片で図示できるものはない。鉄器が出土している。(木村)

5号住居跡（図版9－1、第17図）

4号住居跡の南側2mに位置する。南壁側は攪乱されており、ために6号住居跡との切合い関係はつかめなかった。平面形は方形を呈し、長軸4.85m、短軸4.68m、壁高はカマド左側で19cmを測る。床面積は19.3m²程であり、主軸方位はN23°Wを示す。主柱穴はP1～4で、深



番号	深さ(cm)
P11	12.8
12	21.3
13	6.9
14	32.9
15	6.8
16	30.1

第15図　4号住居跡実測図(1/60)

さはＰ１—49cm、Ｐ２—61cm、Ｐ３—75cm、Ｐ４—45cmと深めである。柱間はＰ１～２間1.9m、Ｐ４～３間1.95m、Ｐ１～４間2.15m、Ｐ２～３間1.95mを測る。カマドの対面には楕円形の掘込みがある。遺物は埋土中から須恵器・土師器及びフイゴの羽口、カマド内から土師器が出土した。

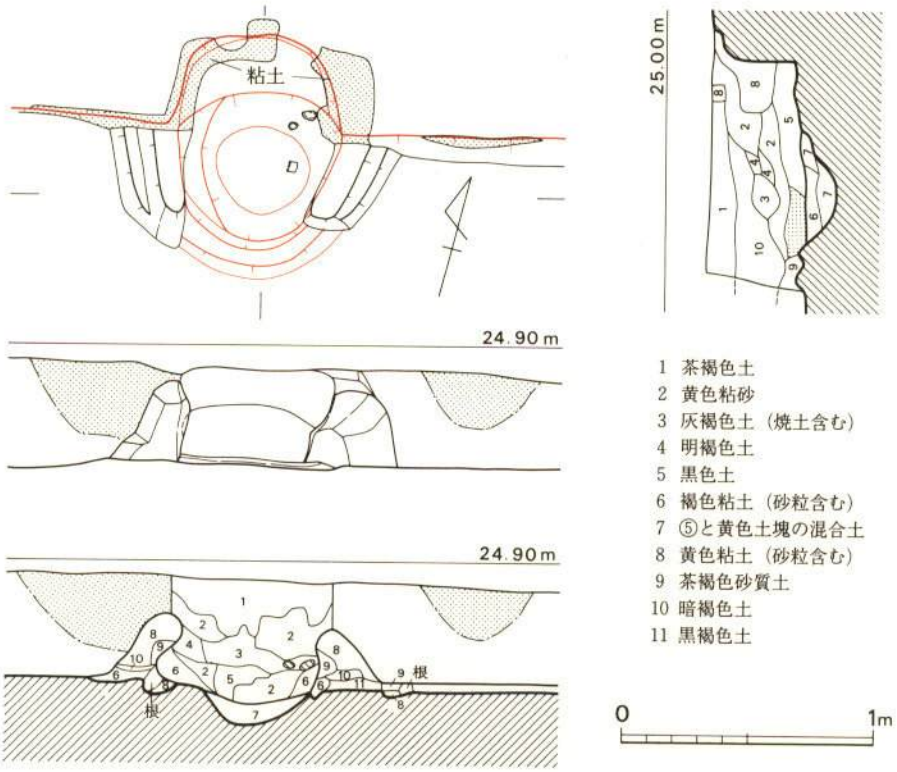
カマド（図版９－２、第18図）

突出型であり、北壁のほぼ中央に付設している。右袖の長さ57cm、最大幅34cm、残高11cm、左袖の長さ42cm、最大幅31cm、残高10cmを測る。袖部は緑褐色土塊混じりの土と灰白色砂粒混じりの土を盛っている。支脚は遺存していない。火床面はあまり焼けていなかった。カマドの左右にはピットがあり、焼土・灰・炭が詰まっていた。カマド内からは土師器片が浮いた状態で出土した。

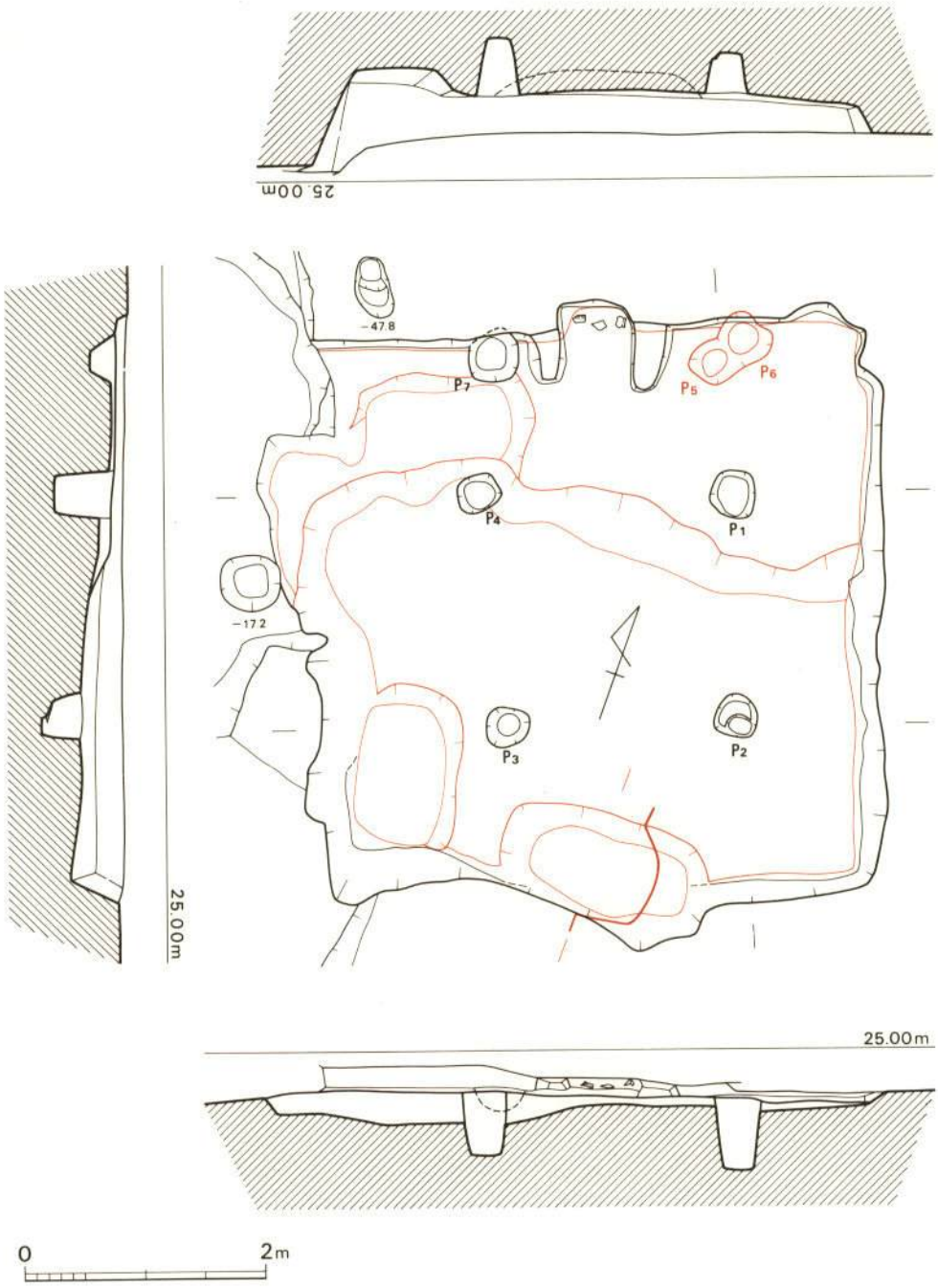
出土土器（図版24－３、第19図）

須恵器

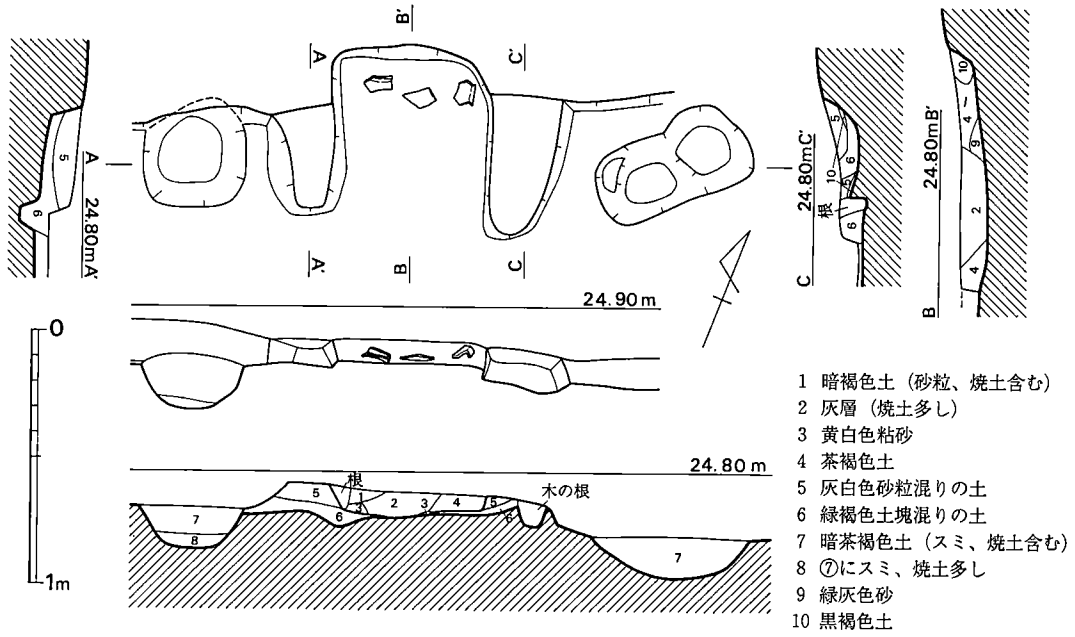
坏（１～３・９）　１～３は身である。三者とも受部の立上りは弱い。受部ヨコナデ、内面



第 16 図　４号住居跡カマド実測図(1/30)



第 17 図　5 号住居跡実測図(1/60)



第 18 図　5号住居跡カマド実測図(1/30)

ナデ、外面ナデである。また、1は外面にヘラ記号を付している。

横瓶（9）　口縁部を欠く。内面は同心円タタキ、外面は平行タタキの後にカキ目を施す。焼成は良好で、灰青色を呈する。

土師器

坏（4）　口唇部は丸く納める。胎土は精良であり、色調は黄褐色を呈する。

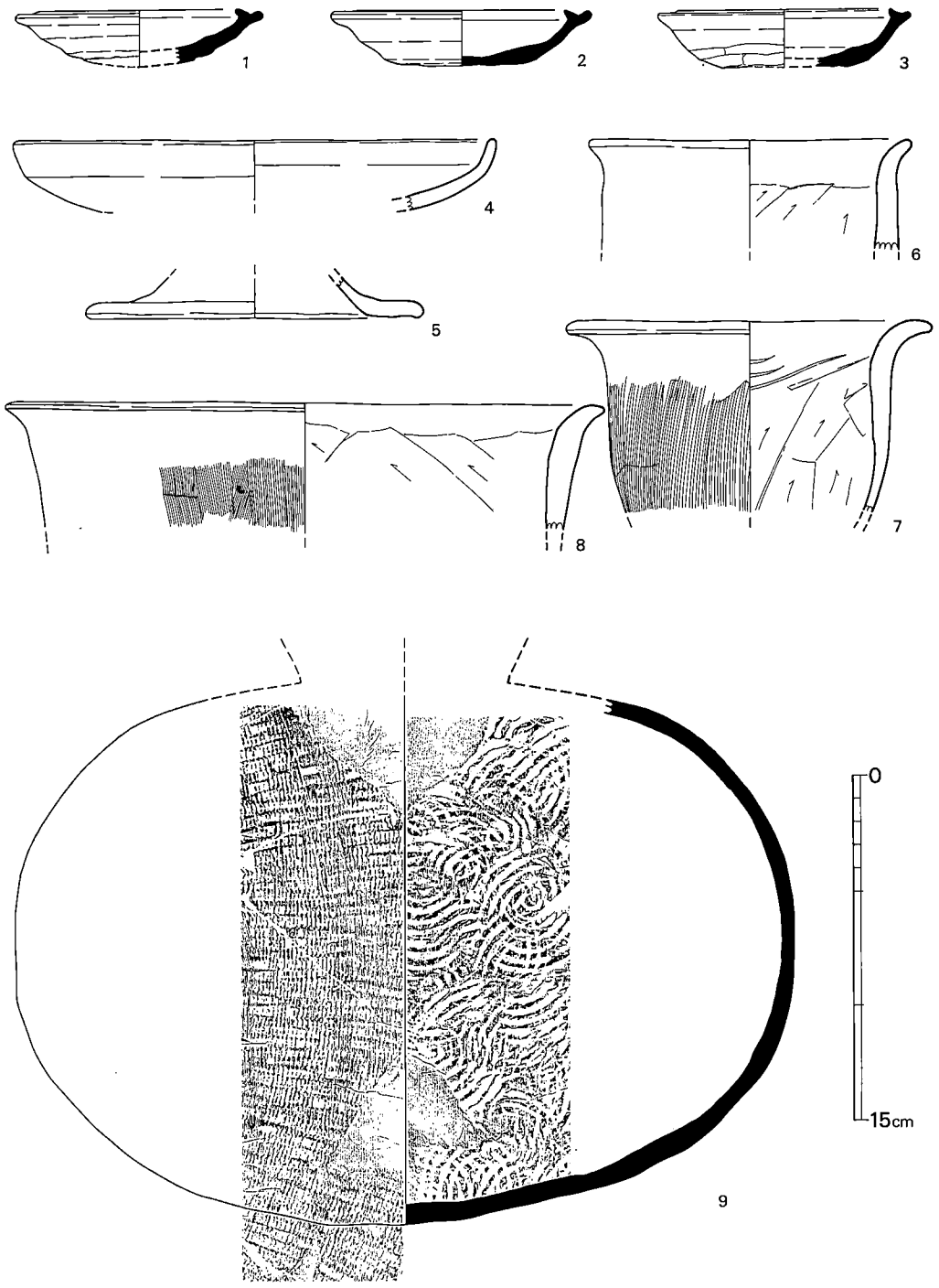
高坏（5）　脚裾部破片であり、内面にヘラケズリを施す。胎土は精良である。

甕（6・7）　6・7は小型甕であり、7の口縁部は大きく外反する。7は内面ヘラケズリ、外面ハケ目調整を施す。胎土に長石・石英・雲母を含む。

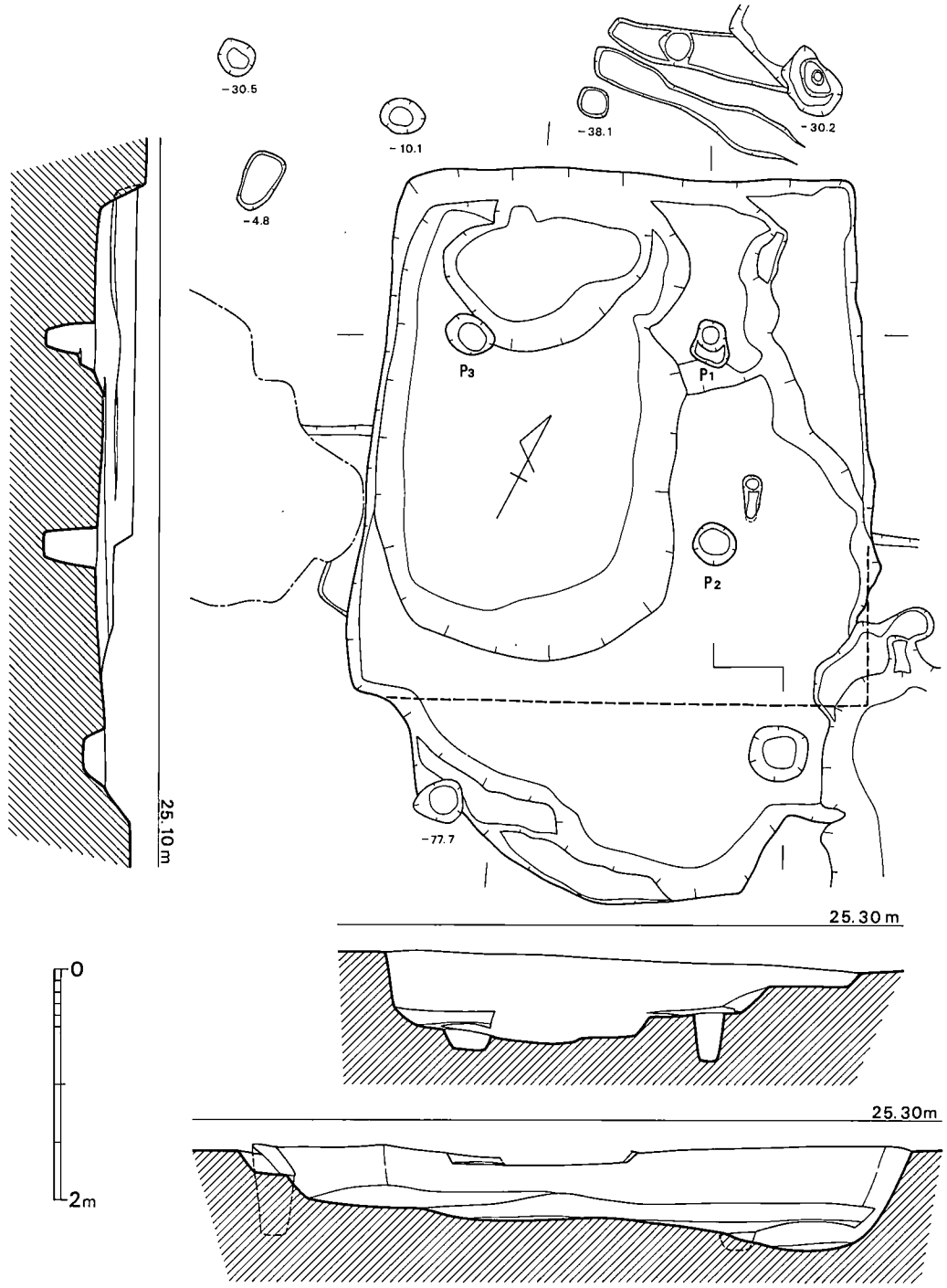
甑（8）　口縁部破片であり、外方に小さく屈曲する。内面ヘラケズリ、外面ハケ目調整である。(小田)

6号住居跡（図版10－2、第20図）

5号住居跡の西側に位置し、本跡と切合い関係にあるが、その部分が大きく掘込まれているため、前後関係は明確でなく、そのため東南部コーナーを欠く。5号住居跡に貼床をしていた可能性がある。西壁長4.12m、北壁長3.6mを測る。東・南壁長は不明であるが、南壁は北壁より長くなり、ほぼ南北に長い台形をなす。床面は、北東隅にわずかに残存するのみで(壁高17.4cm)、カマドの位置は不明である。住居跡中央西寄りに大きく掘込まれた浅い土壙がある。

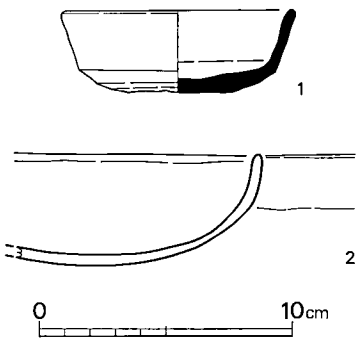


第 19 図　5 号住居跡出土土器実測図(1/3)



第 20 図　6 号住居跡実測図(1/60)

主柱穴は3本確認されているが恐らく4本柱であったと思われる。確認面からの各柱穴の深さは、P1—41.7cm、P2—45.4cm、P3—20.1cmである。柱間はP1～2間1.8m、P1～3間2.1mを測る。



第21図　6号住居跡出土土器実測図(1/3)

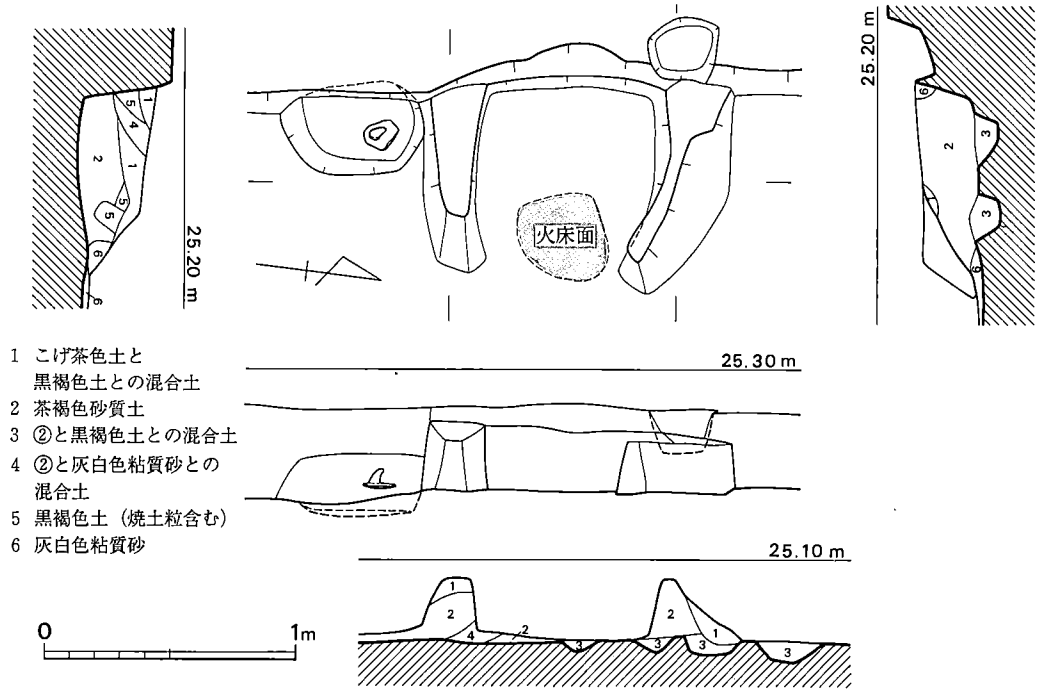
出土土器（図版24－4、第21図）

須恵器

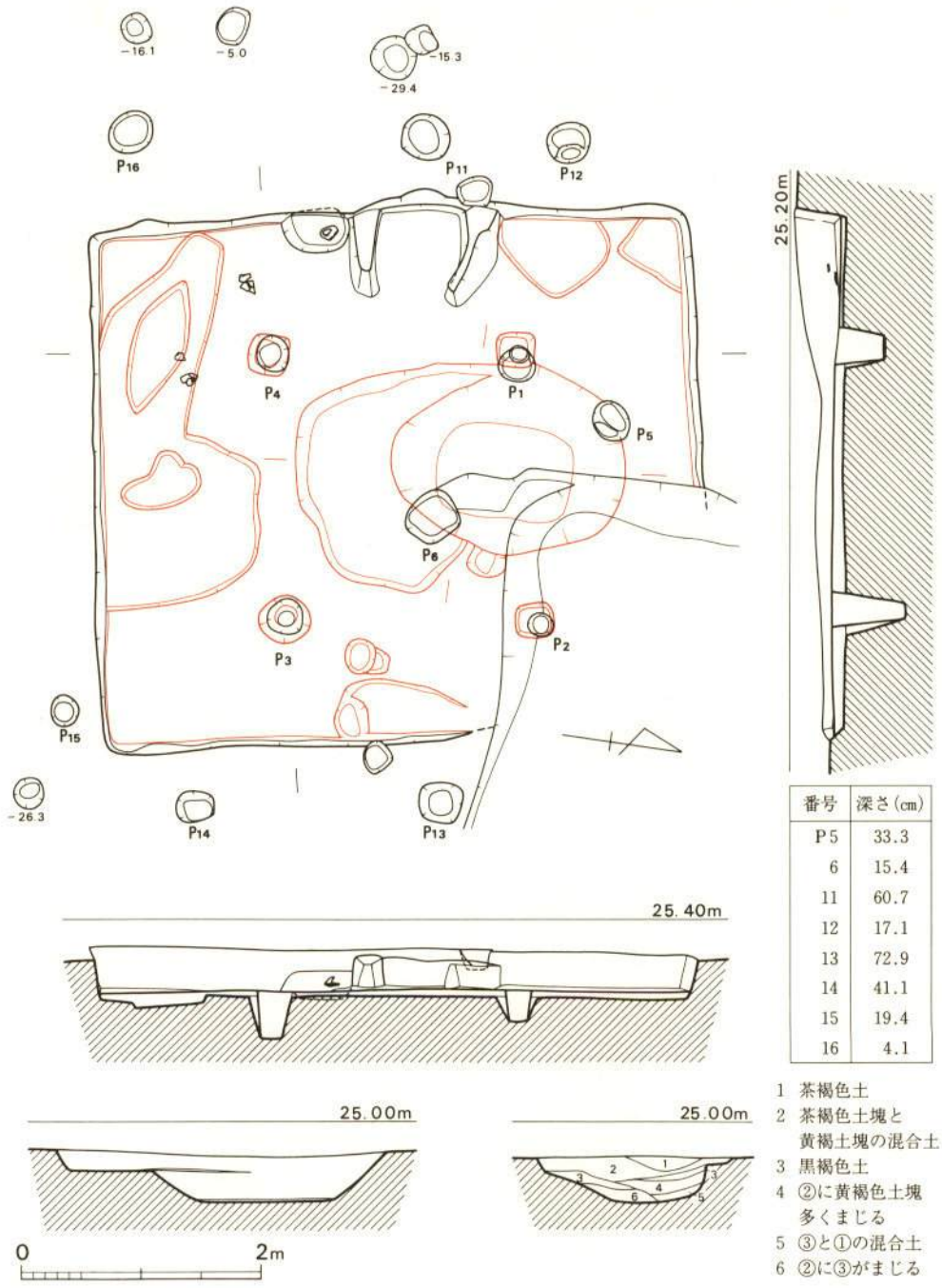
坏（1）　坏身底部はヘラケズリの後ナデを施し、平坦面をつくる。底部よりなだらかに立上がり屈曲部をつくりやや外反しながら口縁に至り端部は丸まる。口縁外面及び内面はヨコナデを施す。

土師器

坏（2）　坏底部はなだらかに丸まりそのまま口縁部にわずかに立上がってのびる。外面底部にケズリ痕が残り、外面口縁下及び内面にはナデが施される。残高4.4cm、口径不明。他に鉄鏃、刀子、砥石が出土した。（木村）



第22図　7号住居跡カマド実測図(1/30)

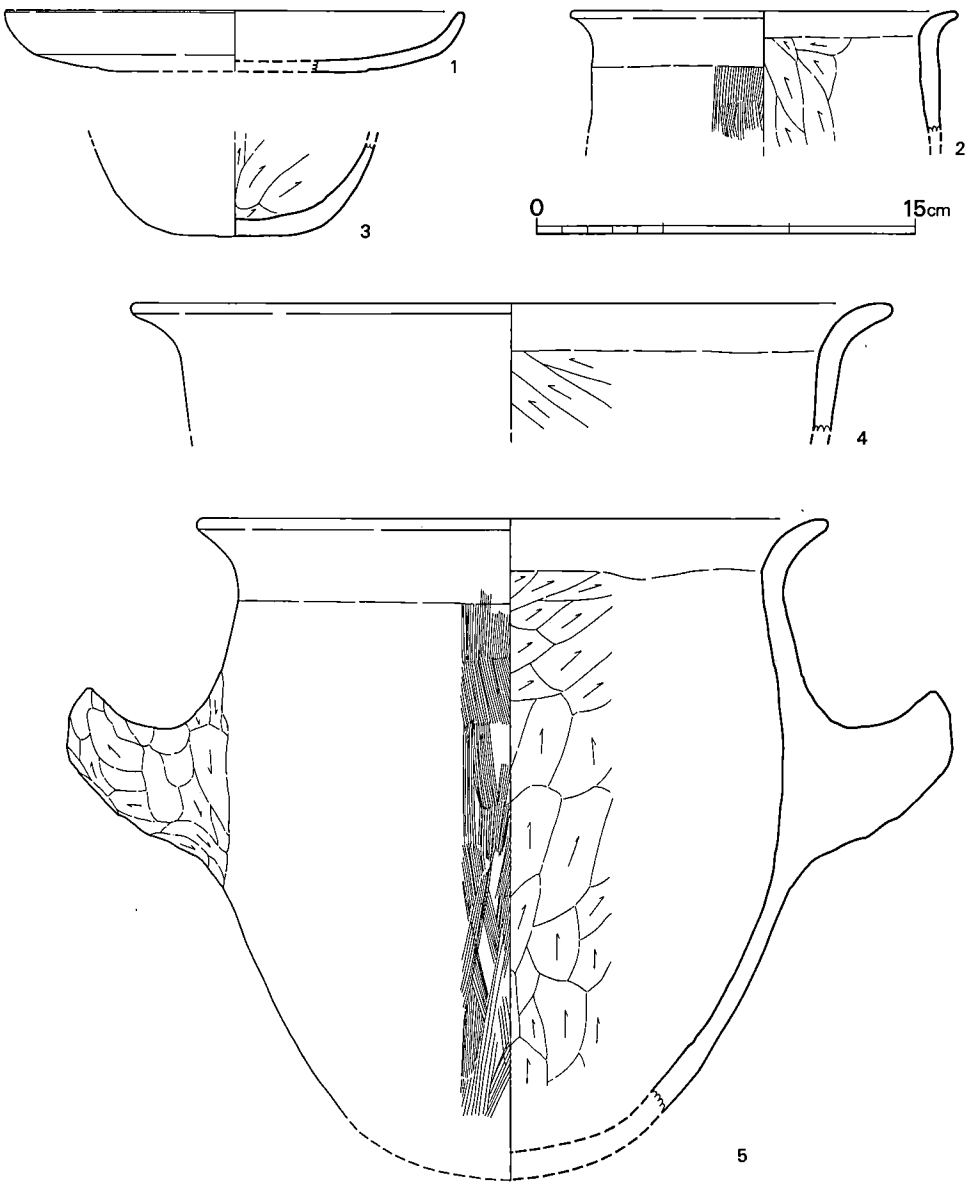


番号	深さ(cm)
P5	33.3
6	15.4
11	60.7
12	17.1
13	72.9
14	41.1
15	19.4
16	4.1

第 23 図　7 号住居跡実測図(1/60)

7号住居跡（図版11－1、第23図）

5号住居跡の南側1mに位置し、北壁コーナーは攪乱坑に切られる。平面形は長方形を呈し、長軸5.11m、短軸4.43m、壁高はカマド側で35cmを測る。床面積は21.2m²程であり、主軸方



第 24 図　7号住居跡出土土器実測図(1/3)

位はN100°Wを示す。主柱穴はＰ１～４で、深さはＰ１—26cm、Ｐ２—32cm、Ｐ３—61cm、Ｐ４—39cmを測る。柱間はＰ１～２間2.3m、Ｐ４～３間2.2m、Ｐ１～４間2.1m、Ｐ２～３間2.15mを測り、主柱穴を結ぶ線は方形である。

暗茶褐色土と黄褐色土で貼床しており、貼床下部より土壙・溝状の掘込みを検出した。遺物は埋土中より土器・フイゴの羽口が出土した。

カマド（図版11－３、第22図）

作り付け型であり、西壁のほぼ中央に付設している。袖部のみ遺存し、右袖の長さ85cm、最大幅31cm、残高22cm、左袖の長さ74cm、最大幅28cm、残高26cmを測る。袖部はこげ茶色土と茶褐色砂質土を盛っている。支脚は遺存していなかった。火床面と袖部内壁はよく焼けていた。また、左袖の横にはピットがあり、焼土・灰・炭が詰まっていた。３・５号住居跡のそれと同様な性格と考えられる。

出土土器（第24図）

土師器　１～５は土師器である。

坏（１）　口縁端部は丸く納めている。外底面はヘラケズリである。

甕（２～４）　２・３は小型甕であり、２は口縁部破片、３は底部破片である。４は口縁部破片であるが、甑になるかもしれない。

甑（５）　口縁部は大きく外反し、胴部中位に把手が付く。口縁部ヨコナデ、内面ヘラケズリ、外面ハケ目調整である。焼成は良好で、色調は茶褐色を呈する。（小田）

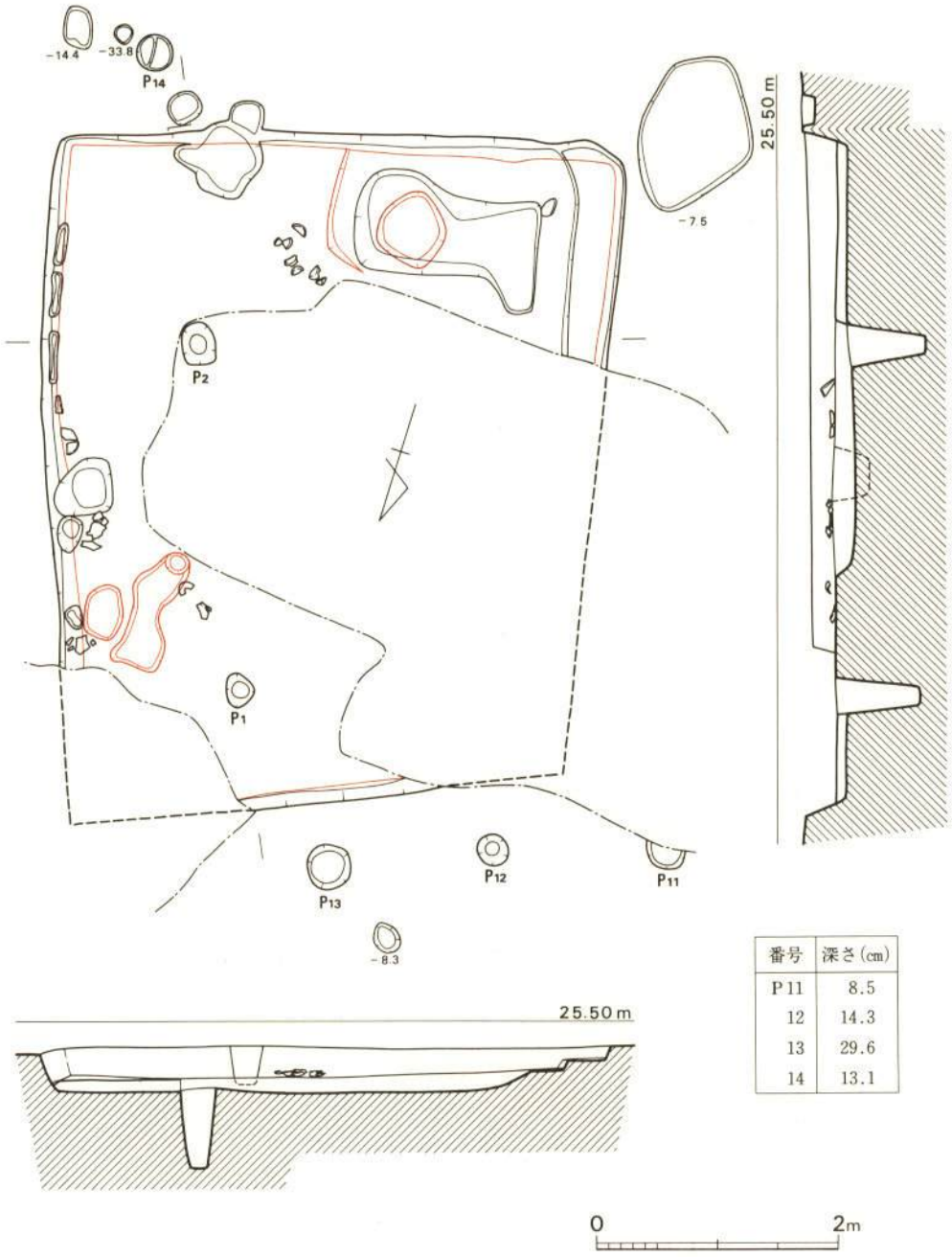
８号住居跡（図版12－１、第25図）

Ａ地区中央部の南端で検出した。家屋撤去の際に攪乱され、住居面積の約2/3が掘削されていた。

平面形態は方形に近い長方形で歪んだ形状をなし、規模は長軸5.5m、短軸約4.6mで、床面積は24m^{2}程になるか。主柱穴と考えられる穴は２個あり、深さＰ１—70cm、Ｐ２—75cmと深く、柱間はＰ１～２間2.4mを測る。床面は東半部が厚さ約10cmの堅固な貼床で、東壁の一部に幅10cm前後、深さ３～５cmの壁溝を検出した。東壁のほぼ中央には一辺約45cm、深さ40cmの隅丸方形のプランをなす土壙が検出され、周辺に土師器、須恵器が数点出土した。この土壙の検出状況から判断して、この時期に普遍的に見られるカマド対面の土壙と思われ、検出されなかったカマドについては、おそらく西壁側に据えられていたものと推考する。

床面下層で３個のピットを検出し、検出面からの深さ約35cmを測る。

遺物の出土状況は、東壁中央部の土壙を中心に土師器（坏・壺）、砥石等が出土し、南壁中央付近では須恵器（蓋・坏類）が多く見られた。



番号	深さ(cm)
P11	8.5
12	14.3
13	29.6
14	13.1

第 25 図　8 号住居跡実測図(1/60)

出土土器（図版25－１、第26・27図）

須恵器

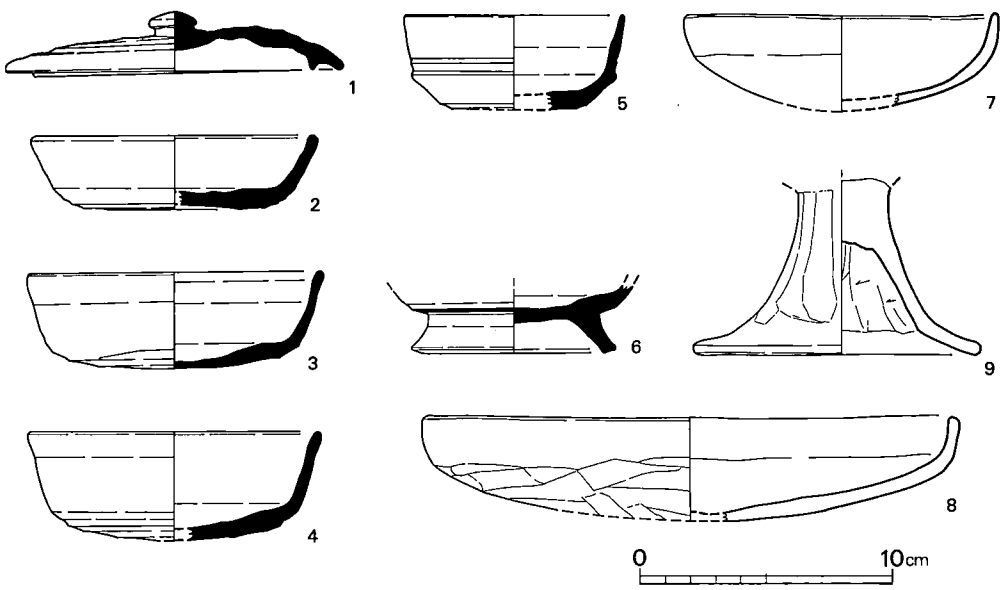
蓋（１）　径1.9cmのつまみを貼付し、浅い身受けのかえりがある。口径11.0cm、受け部径13.3cm、高さ2.4cmを測る。外天井部はヘラケズリを施し、一部灰かぶりを見る。

坏（２～６）　高台を貼付したものとそうでない二種がある。２～４は口径11.0cm、11.5cm、11.3cmで、４の器高が前二者よりわずかに高い。外底部は回転ヘラケズリ調整である。５は復原口径8.8cm、器高3.7cmを測り、外底は平坦でケズリ調整を施す。底部から1.4cm上方で「く」字状に屈曲し、口縁部は真直ぐ立上る。体部中位に２条の浅い沈線が巡る。色調は黒灰色で一部灰をかぶっており、体部下位に不明瞭なヘラ記号がある。６は高さ1.5cmの高台を八の字状に踏んばった坏で、底径7.1cmを測る。内底はナデ、外底はヘラ切り離しのままである。

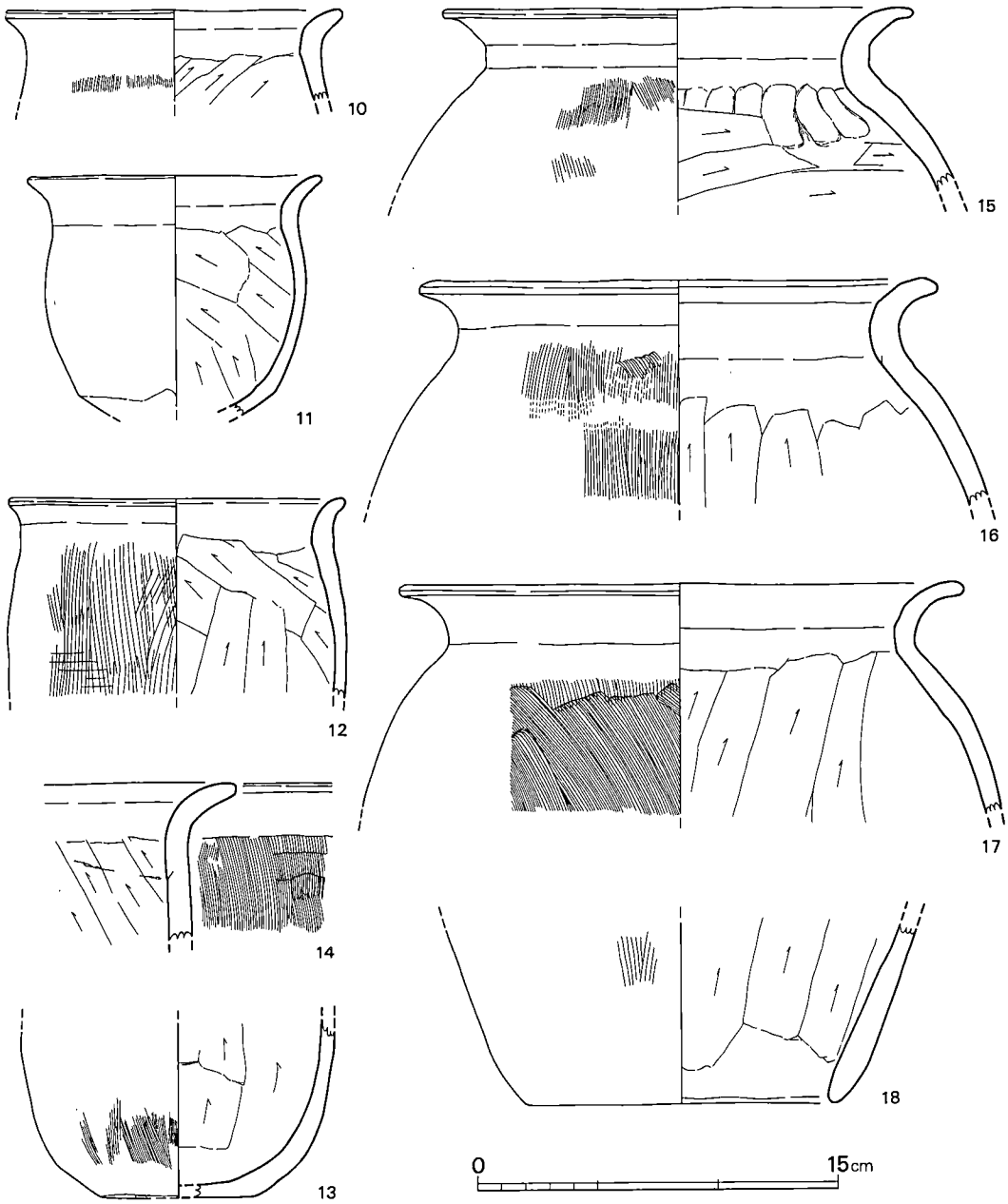
土師器

坏（７）　復原口径12.2cm、器高3.8cm。底部から口縁部にかけて丸味を持って立上り、口唇部は直に近い。内面はナデ、外底一部にケズリ調整を施す。

皿（８）　復原口径20.6cm、器高4.1cmの法量から皿とした。底部はやや丸底風で体部中位から口縁部にかけてほぼ真直ぐに立上り、従って内面に緩やかな稜をもつ。中位下端は工具によるケズリ痕が明瞭である。胎土は精撰され、焼成は硬質。



第 26 図　８号住居跡出土土器実測図①(1/3)



第 27 図　8 号住居跡出土土器実測図②(1/3)

高坏（9）　坏部は欠損している。底径11.1cmを測る。底部から1.0cmで「く」字状に屈曲して開脚するため、内面に明瞭な稜をなす。脚部は内・外面共に縦方向の力強いケズリを行っているが、未調整のままである。焼成硬質。

甕（10～17）　10～13は量的に最も多い一般的な小型甕である。中でも11は復原口径12.0cmと他に比較して若干小さくなり、器肉は薄く、体部から口縁部にかけ緩やかに外反する器形である。内面は下→上に斜めのケズリ調整。外体部にハケ目痕は認められない。10・12は復原口径13.7cmを測る。口縁部は若干肥厚しつつ強く外反する10と、そうでない12がある。共に内面はケズリ調整、外体部ハケ目痕を残す。13は底部片である。

14～17は大型の甕で口径19.4cm～23.0cm前後の間にあり、口縁部が強く外反する特徴をもっている。15は口縁屈曲部がやや肥厚し、口唇部に至り薄くなる。内面の稜下端は指頭圧痕が明らかである。橙褐色で胎土に細砂粒、雲母片を含む。16・17は橙褐色の色調で、焼成は硬質である。17の外体部は斜方向のハケ目による調整である。

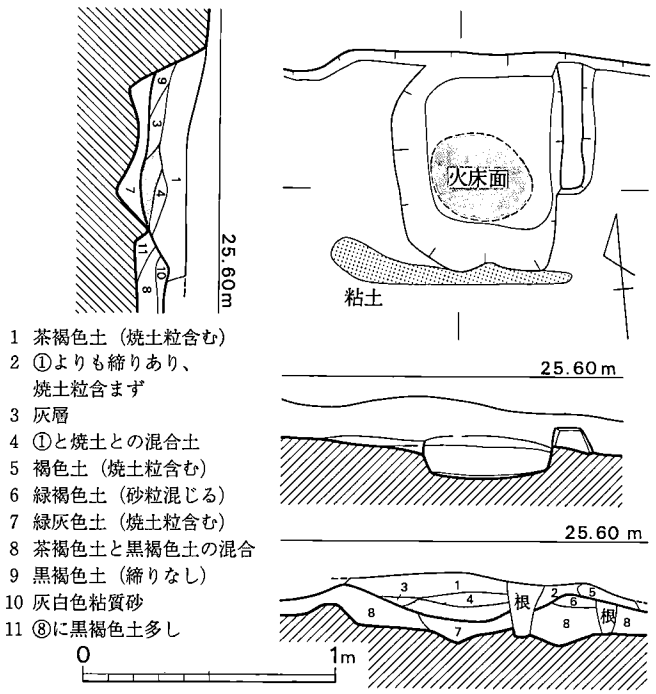
甑（18）　復原底径13.0cmの甑底部片である。断面は底部周辺に従い器肉が僅かに肥厚し、端部は丸くナデ調整されている。体部上半が欠損して明らかでないが、この時期の例などからやや脹らむ筒状の器形であろう。内面は下→上にケズリ調整。外面は粗いハケ目調整である。（高橋）

9号住居跡（図版13－1、第29図）

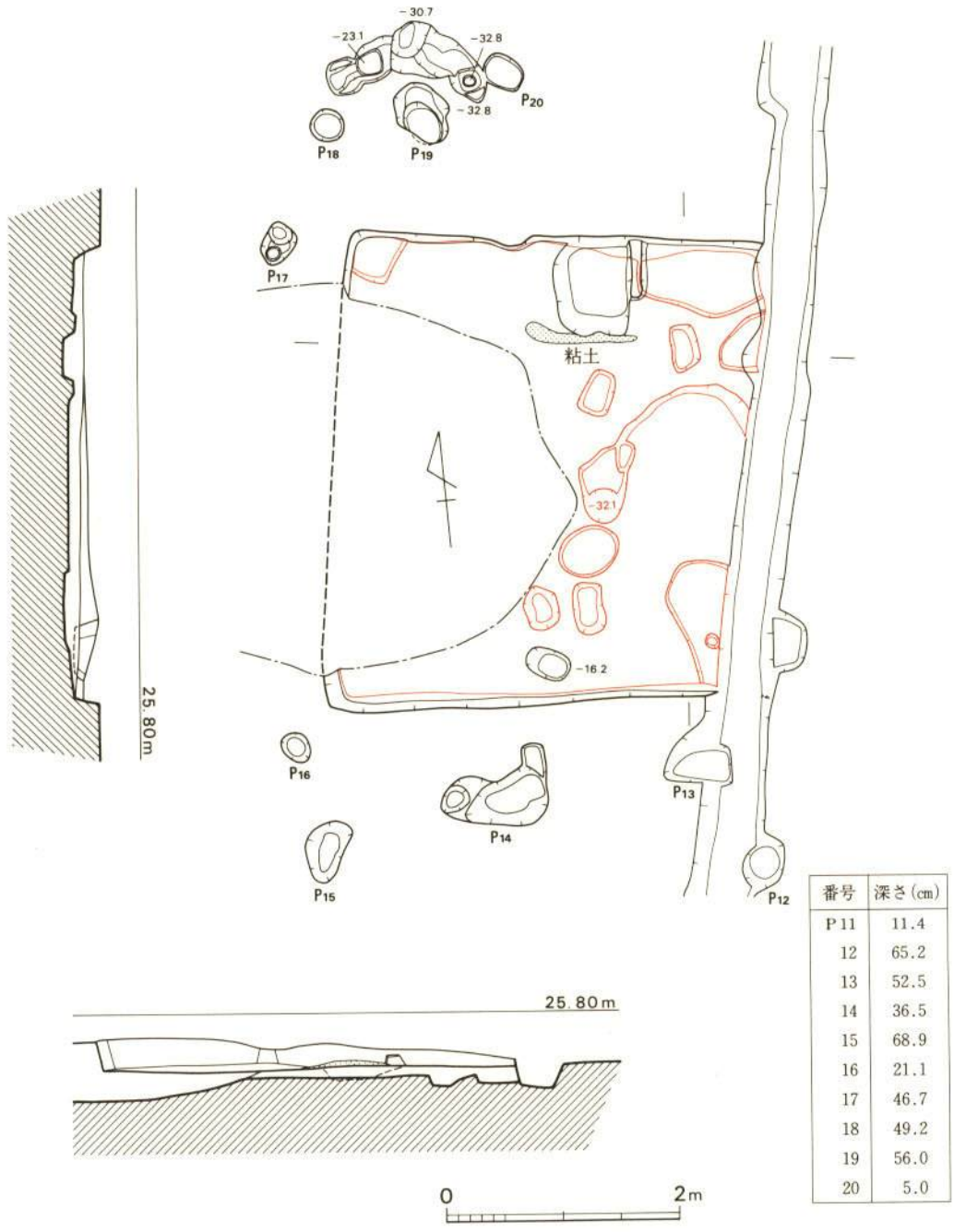
調査区の西側1mに位置する。西壁は攪乱され、東壁は現代溝に切られている。西壁長4.13m、溝内で東壁が収まることから北壁長3.9m程であろう。主柱穴についてはよく判らなかった。床面はほぼ平坦であり、10cm程貼床している。貼床下部からはピットを検出した。遺物は埋土中より土師器が出土した。

カマド（図版13－2、第28図）

火床面の掘込みを有する作り付け型であり、北壁のほぼ中央に付設している。遺存状態は悪く、右袖のみ残る。火床面は30×40cm



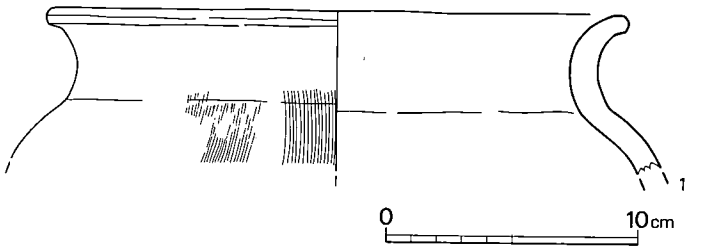
第 28 図　9号住居跡カマド実測図(1/30)



番号	深さ(cm)
P11	11.4
12	65.2
13	52.5
14	36.5
15	68.9
16	21.1
17	46.7
18	49.2
19	56.0
20	5.0

第 29 図　9 号住居跡実測図(1/60)

の範囲で赤変している。
また、掘込みの前面には灰黄色粘砂が3～6cmの厚さでみられた。



第30図　9号住居跡出土土器実測図(1/3)

出土土器（第30図）

土師器

甕（1）　口縁部は鉤状に外彎し、端部は丸い。口縁部はヨコナデ、内面ヘラケズリ、外面ハケ目調整である。色調は黄褐色を呈する。

10号住居跡（図版14－1、第31図）

9号住居跡の西側2mに位置する。平面形は方形を呈し、長軸3.42m、短軸3.03m、壁高はカマド側で28cmを測る。床面積は9m^2であり、主軸方位はN7°Wを示す。主柱穴はP1～4と考えられるが、10～20cmと浅く確証はない。床面は平坦であり、8cm程貼床している。貼床下部よりピット状の掘込みを検出した。遺物は埋土中より土器・鉄製品及び鉄滓・フイゴの羽口等が出土した。

カマド（図版14－3、第32図）

突出式であり、北壁の中央に付設している。袖部のみ遺存し、右袖の長さ53cm、最大幅29cm、残高16cm、左袖の長さ56cm、最大幅41cm、残高22cmを測る。袖部はこげ茶色土と茶褐色砂質土を盛っている。支脚は残存していない。火床面はあまり焼けていなかった。また、右袖の横にはピットがあり、焼土・灰・炭が詰まっていた。3・5・7号住居跡のカマド横ピットと同様な性格と考えられる。

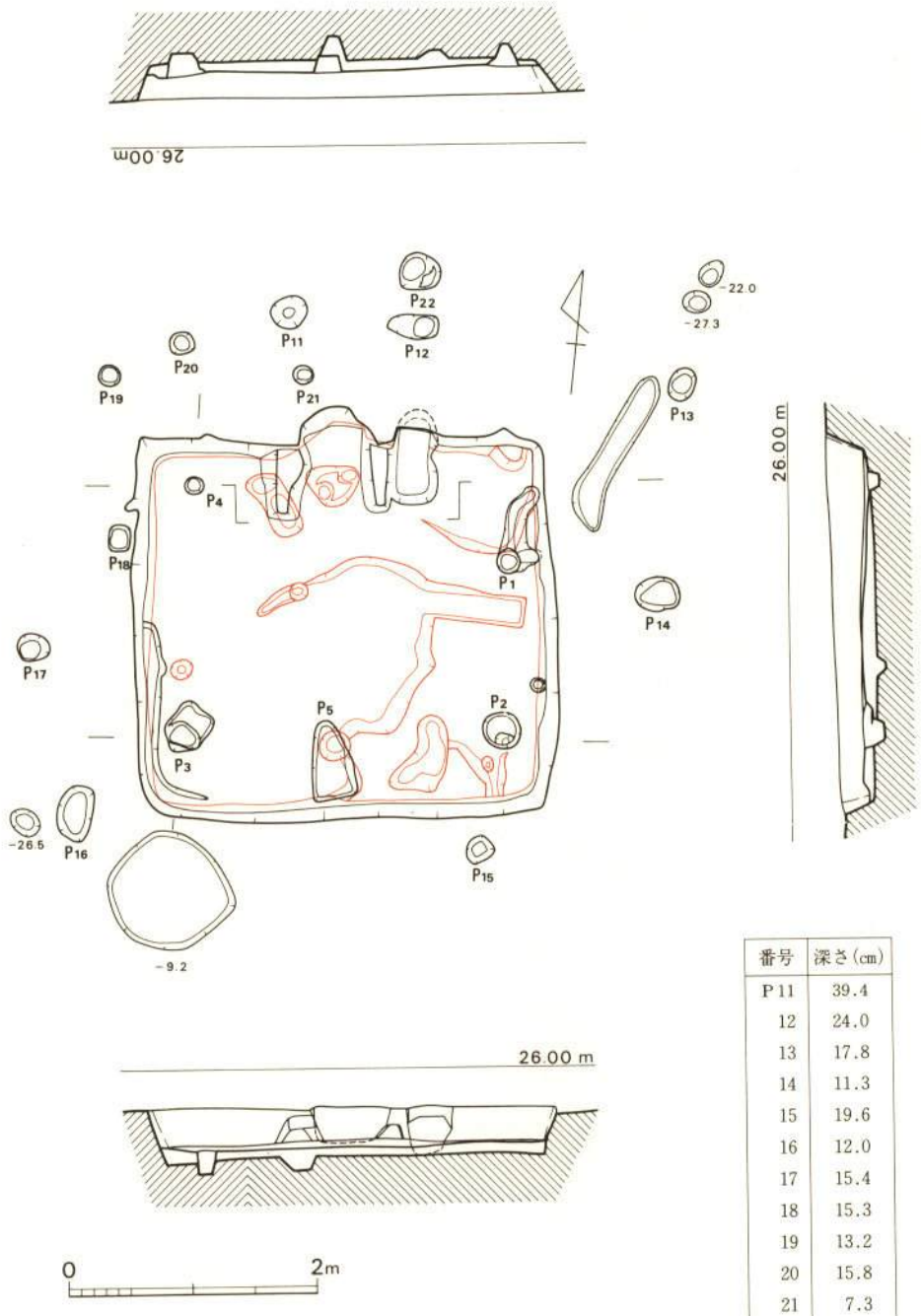
出土土器（第33図）

土師器

坏（1・2）　1は深めの坏であり、口縁部は外方に開く。口唇部は丸い。2の口縁部は直立気味に立上がる。

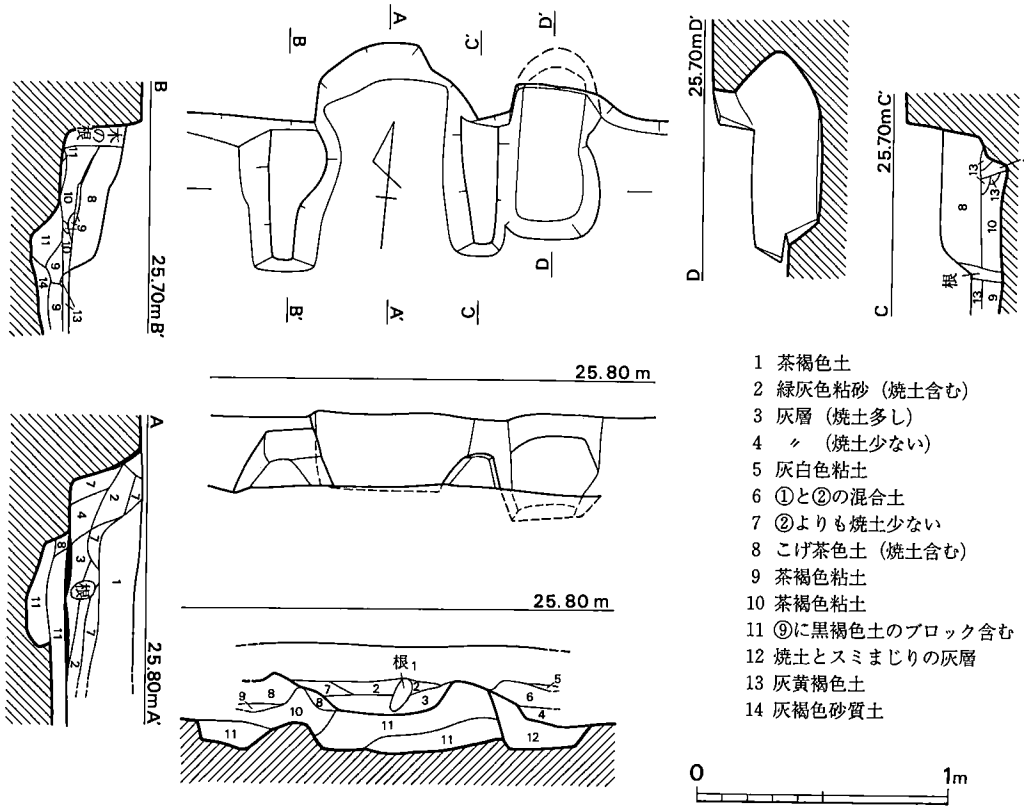
埦（3）　やや深めの**埦**で、口唇部は丸く納める。外面はヘラケズリである。

甕（4～6）　4～6は小型甕である。何れも口縁部は小さく屈曲する。内面はヘラケズリである。胎土に長石・石英を含む。(小田)

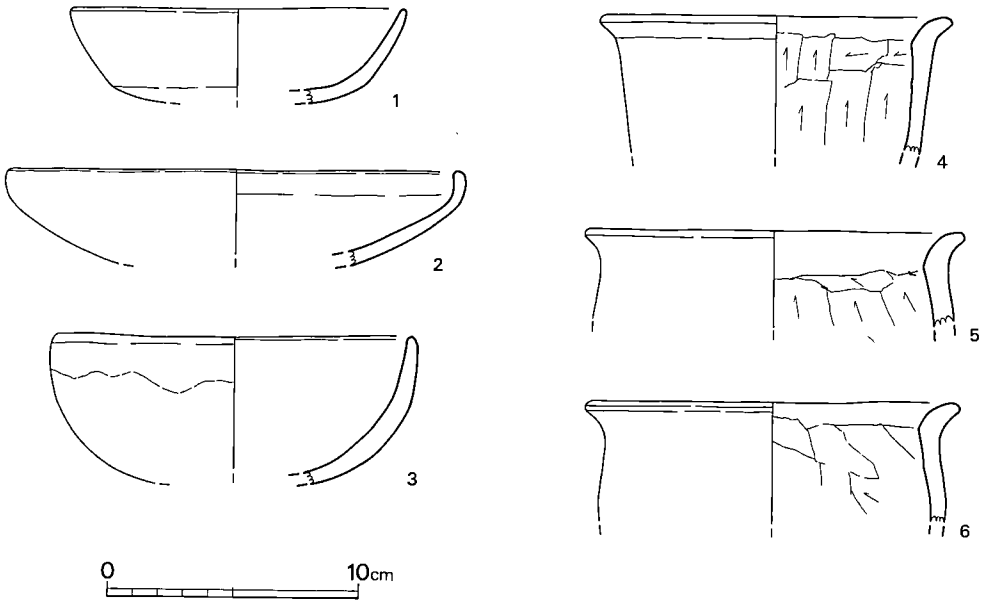


番号	深さ(cm)
P11	39.4
12	24.0
13	17.8
14	11.3
15	19.6
16	12.0
17	15.4
18	15.3
19	13.2
20	15.8
21	7.3
22	42.3

第 31 図　10号住居跡実測図(1/60)



第 32 図　10号住居跡カマド実測図(1/30)



第 33 図　10号住居跡出土土器実測図(1/3)

11号住居跡（図版15－２、第35図）

住居跡群西域中央にあり、９・10・13・14号住居跡に囲まれる。12号住居跡と切合い関係にあり、12号住居跡を切る。南壁の一部は攪乱を受け南西コーナーを欠く。東西（主軸）2.7m、南北2.6mの方形をなす小型の住居跡である。竪穴の主柱穴は明確でないが、貼床下で検出された南壁側にある穴は、約10cm程の深さを示しており、柱穴の位置としてその可能性は強い。柱穴間距離１m。現状での壁高は北壁24.8cm、東壁20.3cmを測る。貼床下層は、カマドの前面及び東壁下に不整形の掘込みが認められ、焼土が混在する。

カマド（図版16－２、第34図）

カマドは、西壁中央やや南寄りに設けられる。壁外に幅62.0cm、奥行40.0cmの方形に掘り込む。住居跡壁内に両袖がわずかに張り出して（約20cm）残存する。燃焼部は掘形張出し部内にあり、土師器甕を伏せて支脚としている。焚口部は径75×60cmの円形で、深さ16cmに掘込まれているが、実際の火床面はほぼ住居跡床面と同レベルになっている。焚口部に支脚の抜き跡らしきものがあり一度作り直された可能性がある。

出土土器（図版25－２、第36図）

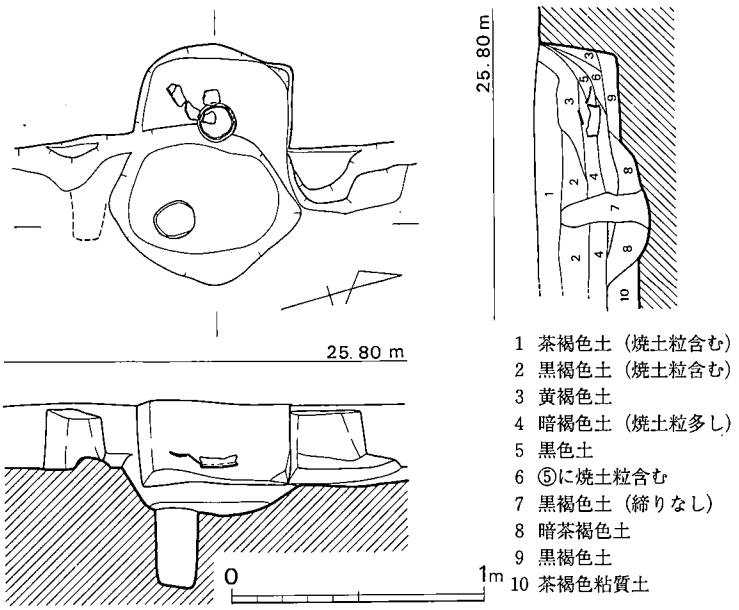
須恵器

蓋（１）　短めの身受けのかえりをもつ。天井部内面は平坦をなす。内面ナデ、外面はヘラケズリの後、口縁部付近はヨコナデを施す。恐らく擬宝珠形つまみがつくと思われる。復原口径13.0cm。

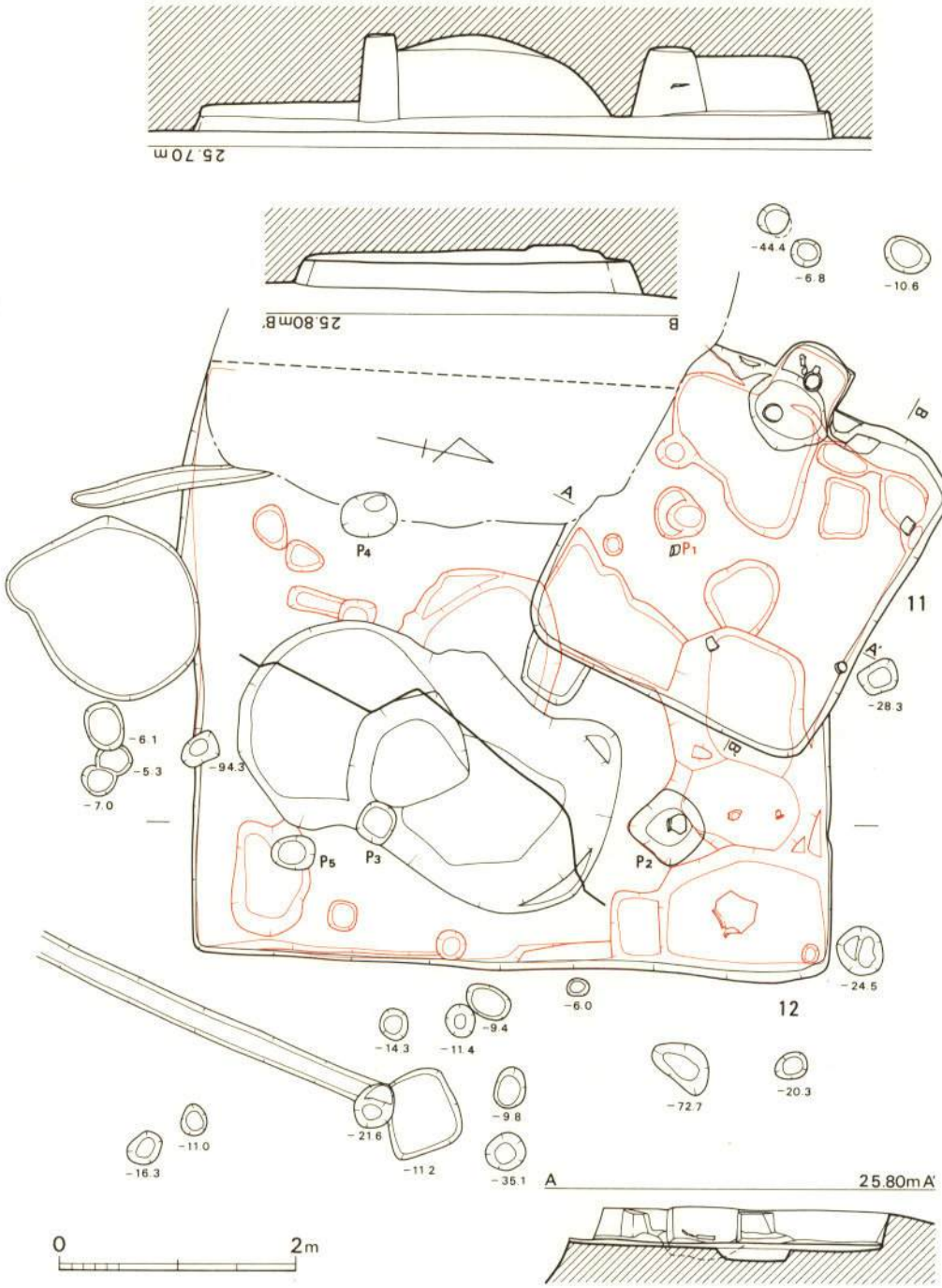
坏（２）　若干外開きに丸まる高台が体部に寄って付き、体部は丸味を帯び外反しながらのびる。底部外面はケズリ、体部及び内面はヨコナデを施し、体部外面は灰をかぶっている。口径14.0cm、器高5.4cm、底径9.8cm。

土師器

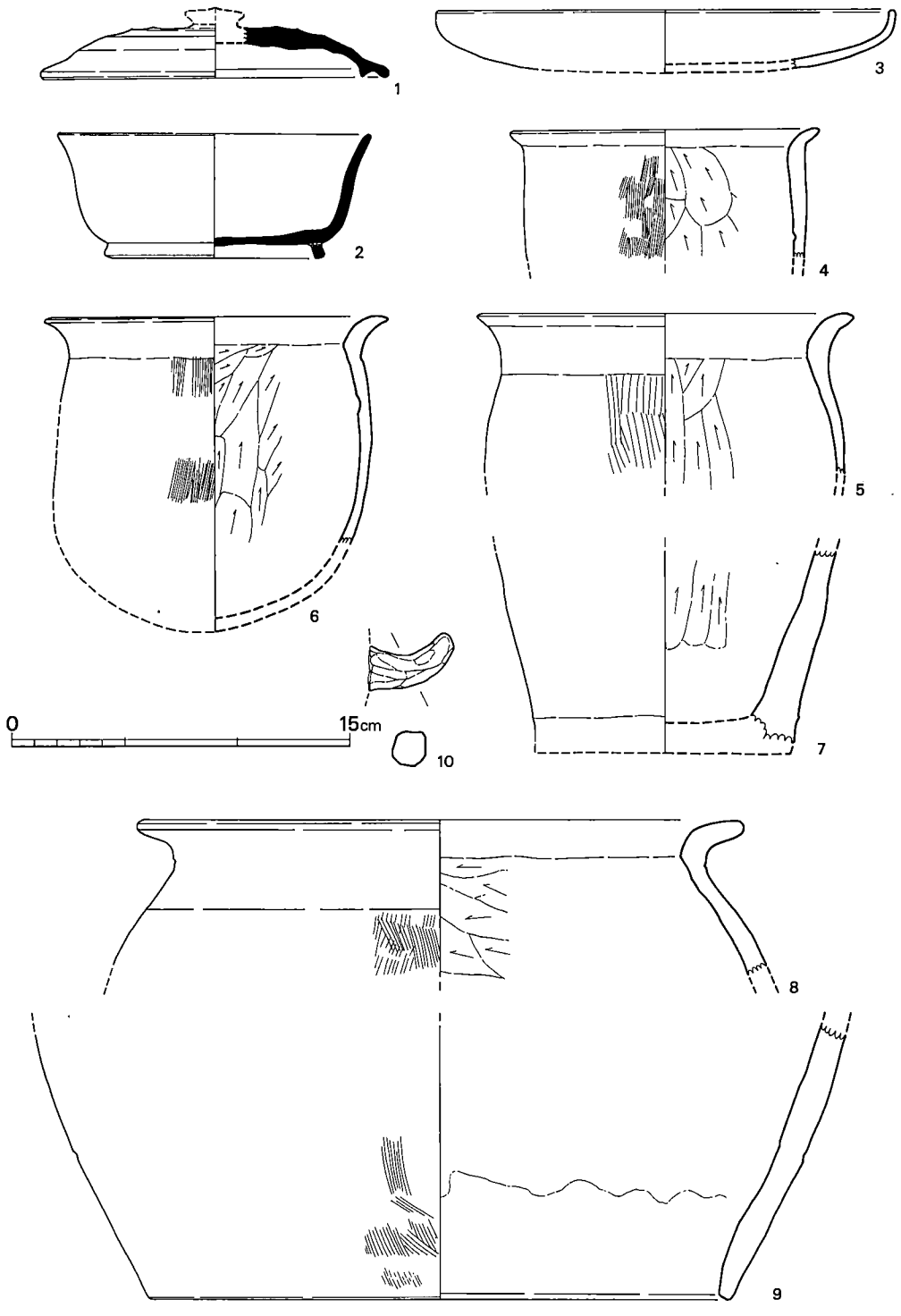
坏（３）　丸味を持った平底になると思われ、口縁は丸味を帯びながら開く。口縁内



第 34 図　11号住居跡カマド実測図(1/30)



第 35 図　11号・12号住居跡実測図(1/60)



第 36 図　11号住居跡出土土器実測図(1/3)

外面にヨコナデ、外底部に簾状の線刻痕がある。復原口径20.4cm、器高2.6cmを測る。

甕（4～8）　4～6は小型甕で、4の胴部は直線的にのび、口縁は短く稜をつくって外反する。胴部内面はヘラケズリの後ナデが施され、頸部の稜は明瞭でない。外面はハケ目が残る。復原口径13.8cmを測る。床面出土。5の胴部はやや膨らみ、口縁は丸味を帯びて外反する。胴部内面はヘラケズリの後ナデが施され、頸部は稜が明瞭でなく丸まる。口縁内外はヨコナデ、外面頸部以下は縦位の荒いハケ目痕が残る。復原口径16.8cmを測る。カマド内出土。6はカマドの支脚として用いられていたもので、底部を欠損するが丸底になると思われる。胴部はやや膨らみ、口縁は稜をつくって外反する。胴部内面はヘラケズリの後ナデ、頸部稜は明瞭である。口縁内外面ともヨコナデ、外面頸部以下は縦位の細いハケ目痕が残る。口径15.3cm、復原高13.9cmを測る。7は底部付近破片。8の胴部は大きく膨らみ、口縁は強く外反する。胴部内面は斜位のヘラケズリの後ナデる。頸部稜は明瞭である。口縁内外面ともヨコナデが頸部からやや下位部分まで施され、以下ハケ目が残る。

甑（9）　甑底部破片で、復原底径26cmを測る。

把手（10）　10は把手付の小型埦又は甕の把手である。

この他鉄製品が出土している。

12号住居跡（図版15－2、第35図）

11号住居跡と切合い関係にあり、11号住居跡に切られ、西側は大きく攪乱を受けており、カマドの位置は不明である。東壁は5.3m、下層掘込みにより推定すると南壁4.9mとなり、長方形を呈する。現状での壁高は北東隅29.4cm、南東隅11.9cm。主柱穴は4本確認され、柱間は、P1～2間2.65m、P2～3間2.5m、P3～4間2.7m、P4～1間2.7mを測り、検出面からの各柱穴の深さは、P1—65.5cm、P2—22.7cm、P3—49.2cm、P4—53.1cmである。貼床下は、中央部に土壙状のもの及び北壁下に溝状のもの、他は全体に浅く（10cm前後）皿状に掘込まれている。

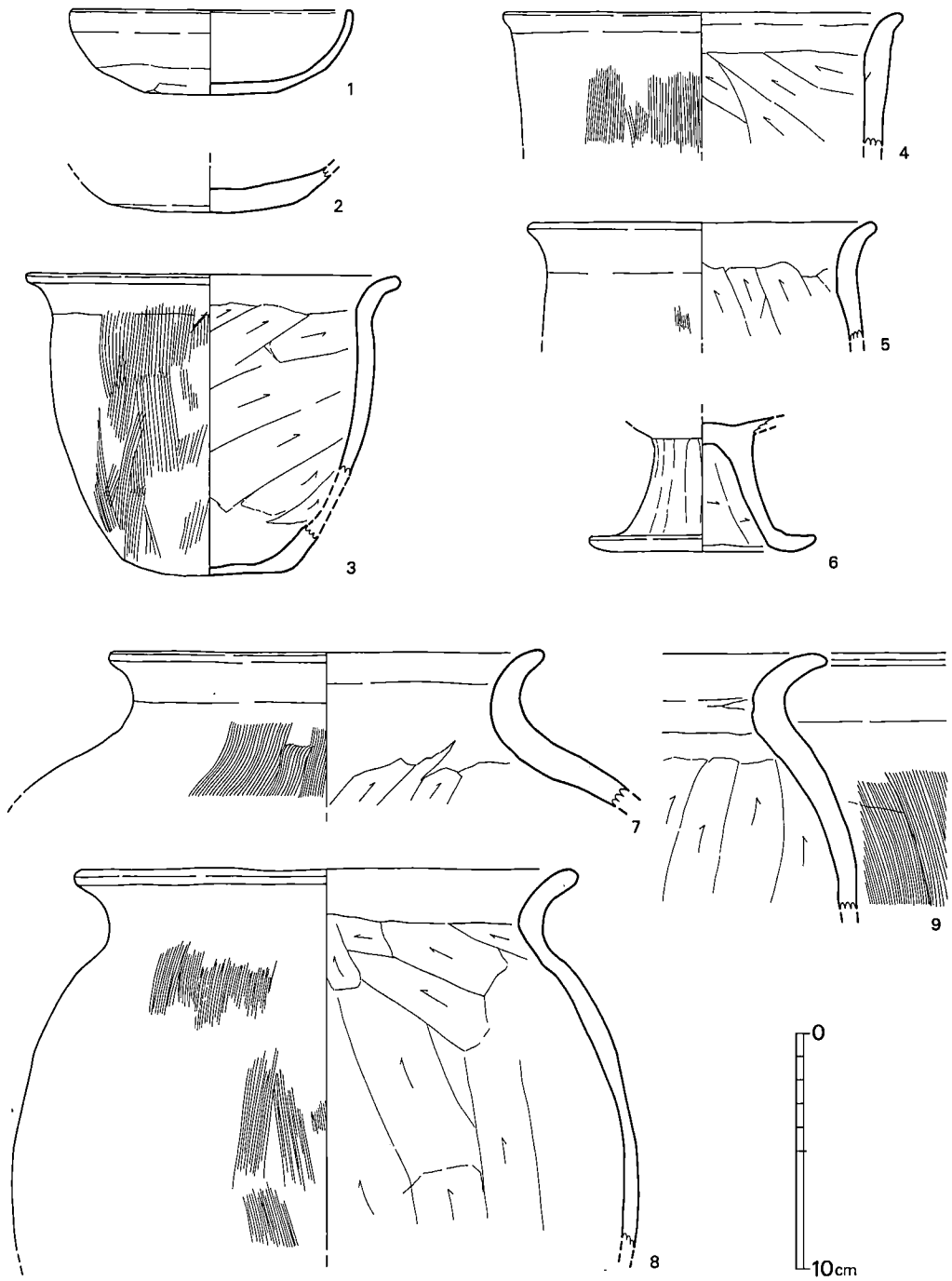
土器は、北東コーナー付近の貼床下土壙で主に出土している。

出土土器（図版25－3、第37・38図）

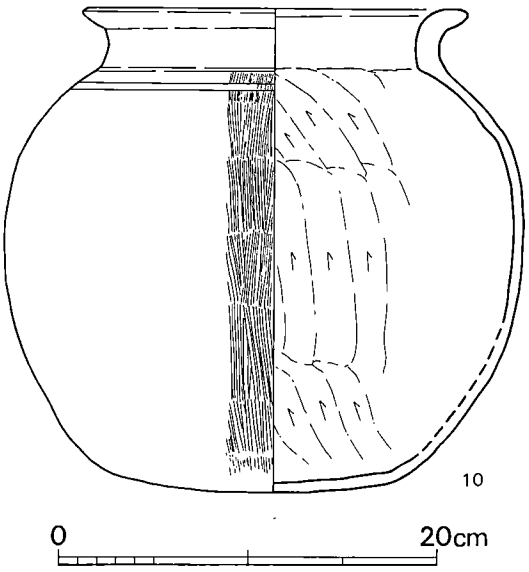
土師器

坏（1）　底部は丸底気味で、口縁は丸まりながら立上る。底部外面はヘラケズリ、内面はナデ、口縁内外面はヨコナデが施される。

甕（3～5、7～9）　4の胴部は直線的で、口縁は短く外反する。胴部内面は斜位のヘラケズリ、頸部にやや稜がつく。口縁内外はヨコナデを施し、以下に縦位ハケ目痕が残る。復原口径16.5cm。3は丸味を帯びた平底で、胴部はやや膨らみながら開き、口縁は稜をつくりな



第 37 図　12号住居跡出土土器実測図①(1/3)



第 38 図　12号住居跡出土土器実測図②(1/3)

がら外反する。胴部内面はヘラケズリで、頸部に稜をつくる。口縁内外はヨコナデ、以下にハケ目が残る。口径15.7cm、器高7.3cm。7～9は何れも胴部が球形に膨らみ、底部は丸底気味で、頸部はすぼまり強く外反する。胴部内面は縦位ヘラケズリ、口縁内外面はヨコナデ、以下は縦位ハケ目が残る。7・9の頸部内面の稜は丸味をおび明瞭でない。8は稜が明瞭である。口径20.3cm、器高25.8cmを測る。7は口径18.6cm、9は口径21.5cmを測る。

高坏（6）　脚柱部は直線的で、外面は縦位ヘラケズリを施し、内面はケズリ出す。端部は水平に開きわずかに跳ね上る。2・3・5・7は貼床下土壙より出土、以外は住居跡埋土より出土した。以上の他に鉄鏃と鉄滓が出土している。(木村)

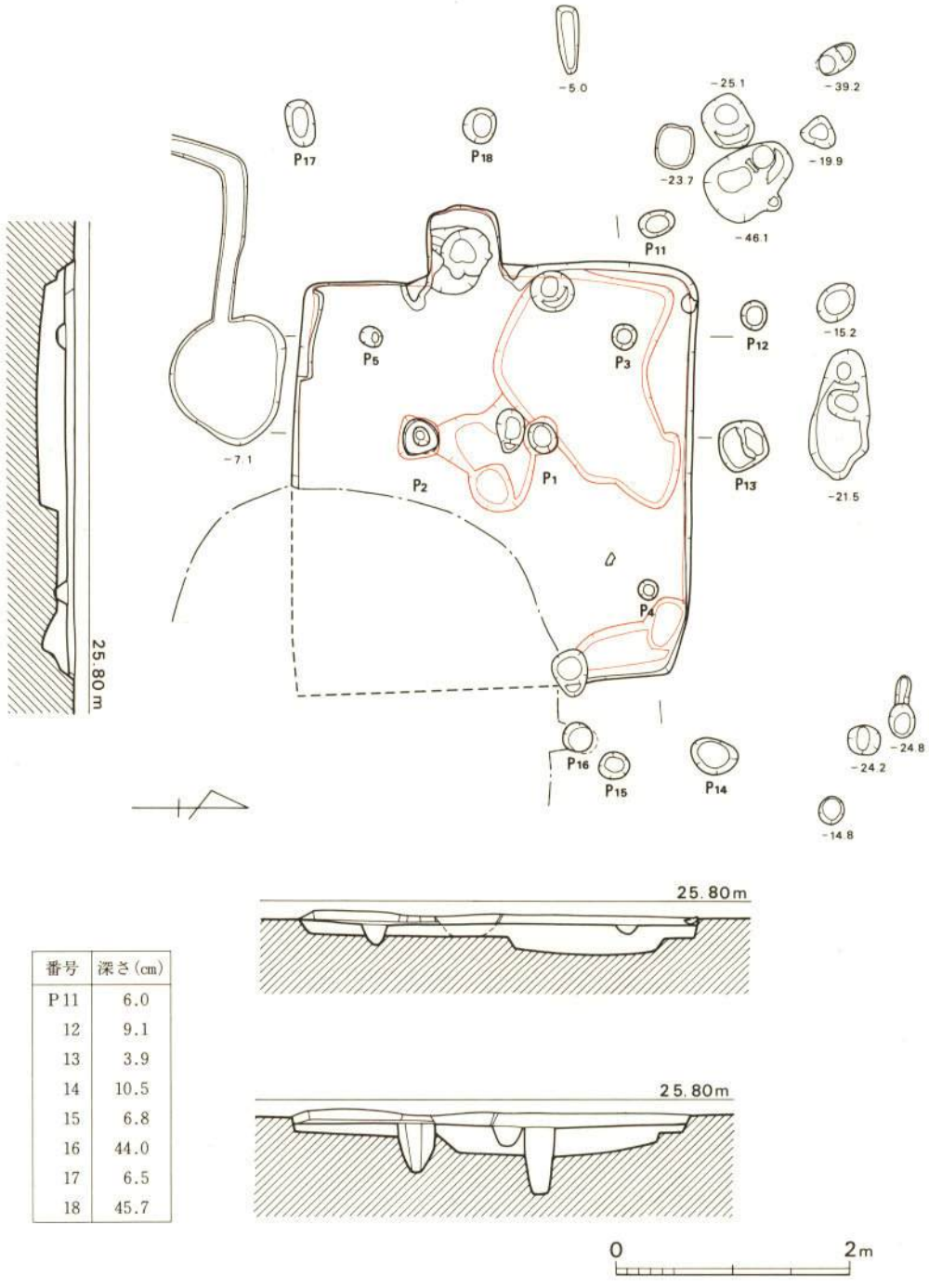
13号住居跡（図版17、第39図）

検出した住居跡中、最も西端に位置する。コーナーを隅円にしたほぼ方形に近い平面形をなし、長軸3.45m、短軸3.3mで、床面積11.5m^{2}程である。東南コーナー部が近世の攪乱によって壊されている。主柱穴は住居中央部よりやや西側寄りにＰ１、Ｐ２があり、Ｐ１は径35cmで深さ43cm、Ｐ２は径33cm、深さ56cmである。柱間は1.06mを測る。さらに各コーナー寄りにＰ３～５を検出した。各々径約15～20cmで円形を呈し、深さ10～15cmである。この柱穴を４本柱の主柱穴とするには掘形の形状から察して不安があり、構造上の観点から支柱と考えた。床は厚さ５～10cmの堅固な貼床である。床面下層で北西コーナー寄りに、約1.7×1.3m、深さ20cmの不整形の土壙を検出したが遺物の出土はない。

遺物は、西壁のカマド北寄りと、主柱穴周辺部において須恵器（坏)、土師器（坏・甕）等が出土した。

カマド（図版17－３、第40図）

西壁のやや南寄りに設置された、所謂突出型のカマドである。両袖は僅かに遺存し、左袖最大幅17cm、長さ16cm、右袖は最大幅22cm、長さ12cmを測る。袖は茶黄色粘質土を突出壁から延長するかのように積み上げている。突出部は住居壁より長さ約55cm、幅60cmで、検出面よ



番号	深さ(cm)
P11	6.0
12	9.1
13	3.9
14	10.5
15	6.8
16	44.0
17	6.5
18	45.7

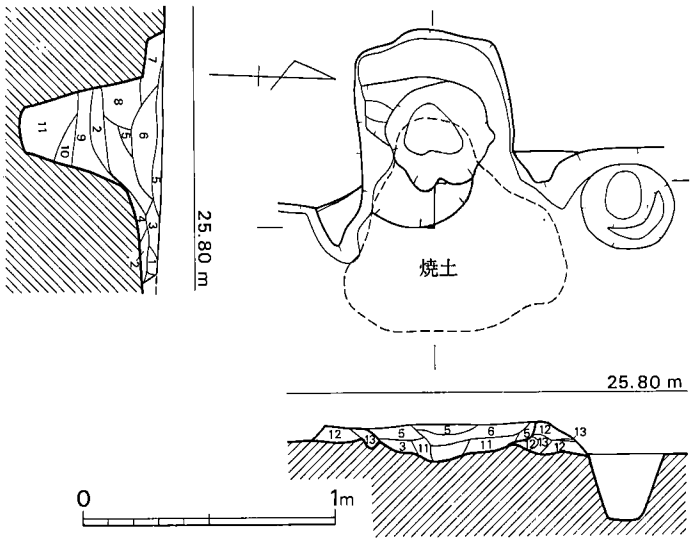
第 39 図　13号住居跡実測図(1/60)

り約15cmの深さで掘られている。奥壁から約15cm離れて上端径40cm、下端径17cm、深さ48cmの穴が掘られており、火床面を壊している。埋土は茶灰粘質土、焼土、炭化物等を混在した層序が認められた。周壁面に粘土は付着しておらず、あまり焼けていない。

出土土器(図版26－1、第41図)

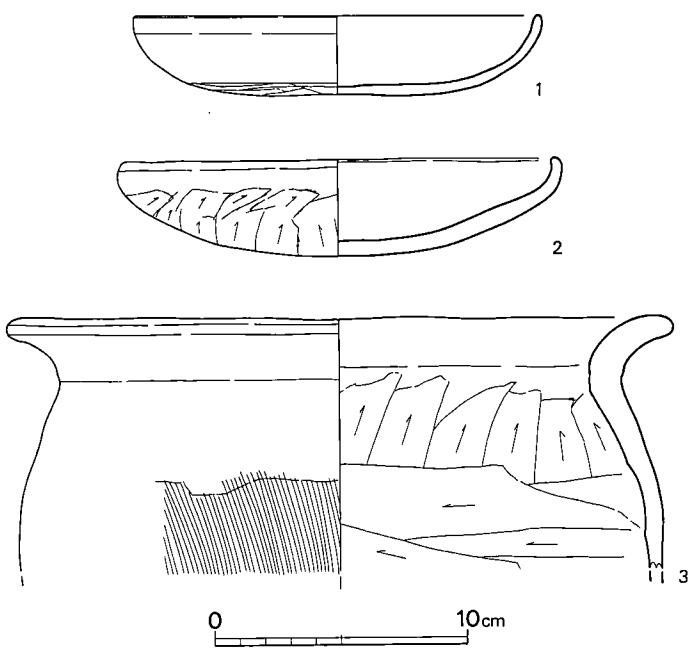
土師器

坏（1・2）　1は口径16.2cm、器高3.1cmで、体部から口縁は丸味を帯びながら立上り、口縁部は直立する。外底は平坦である。器肉は薄く、内底は丁寧なナデ、内・外体部は横ナデ、外底はケズリ調整を施す。茶褐色を呈し、精撰された土器である。貼床下から出土した。2は口径17.0cm、器高3.8cmを測る。底部は丸底風で、口縁端部は強く内彎する。内面はナデ、外面はケズリの調整を施す。底部から体部にかけては下→上の強いケズリが認められる。色調は橙褐色で、胎土は精良である。



1黄灰色粘質土　2黒色土　3暗茶灰色土　4茶灰色土(焼土含む)　5黒灰色土　6淡黒灰色土　7暗茶褐色土(焼土、炭含む)　8淡茶褐色土　9暗黄灰色土(②と焼土、混じる)　10黄灰色土　11黒茶色土（焼土粒含む）12緑褐色土と黒褐色土との混合土　13黒褐色土

第 40 図　13号住居跡カマド実測図(1/30)



第 41 図　13号住居跡出土土器実測図(1/3)

甕（3）　復原口径25.0cm。口縁部は厚くつくり、丸味をもって強く外反する。口縁部内面と体部との境は横方向のナデ調整を施すが、下方は下→上と横方向のヘラケズリにより明瞭な稜を残す。胎土は砂粒を若干含むが精良である。（高橋）

14号住居跡（図版18－1、第42図）

12号住居跡の南側1.5mに位置する。東壁側は攪乱され、現代溝が南北に走る。平面形は長方形を呈し、長軸4.72m、短軸3.88m、壁高はカマド左側で26cmを測る。床面積は17m^{2}であり、主軸方位はN5°Wを示す。主柱穴はP1～4で、深さはP1—77cm、P2—73cm、P3—63cm、P4—56cmと深めである。柱間はP1～2間1.9m、P4～3間1.85m、P1～4間1.9m、P2～3間2.0mを測る。

カマドの対面には円形の掘込みがあり、長さ52cm、深さ40cmを測る。床面はほぼ平坦であり、10cm程貼床している。貼床を剝がしたところ四隅にテラス状の高まりを検出した。遺物は埋土中から須恵器・土師器、カマド内から土師器が出土した。

カマド（図版19、第43図）

作り付け型であり、北壁中央右寄りに付設している。右袖の長さ68cm、最大幅28cm、残高24cm、左袖の長さ69cm、最大幅36cm、残高16cmを測る。袖部は茶褐色土と灰白色砂粒混じりの土を盛っている。支脚は倒れた状態で小型甕が出土している。火床面はよく焼けており、右袖の下まで広がる。また、右袖の下にはピットがあり、焼土・灰・炭が詰まっていた。カマドが西壁に偏していること、焼土が右袖の下まで広がっていることから作替があったと考えられる。

出土土器（図版26－2、第44図）

須恵器

坏（1）　1は口縁部にかえりを有する蓋であり、天井部のつまみは欠失する。口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外天井部回転ヘラケズリを施す。焼成はやや軟質である。

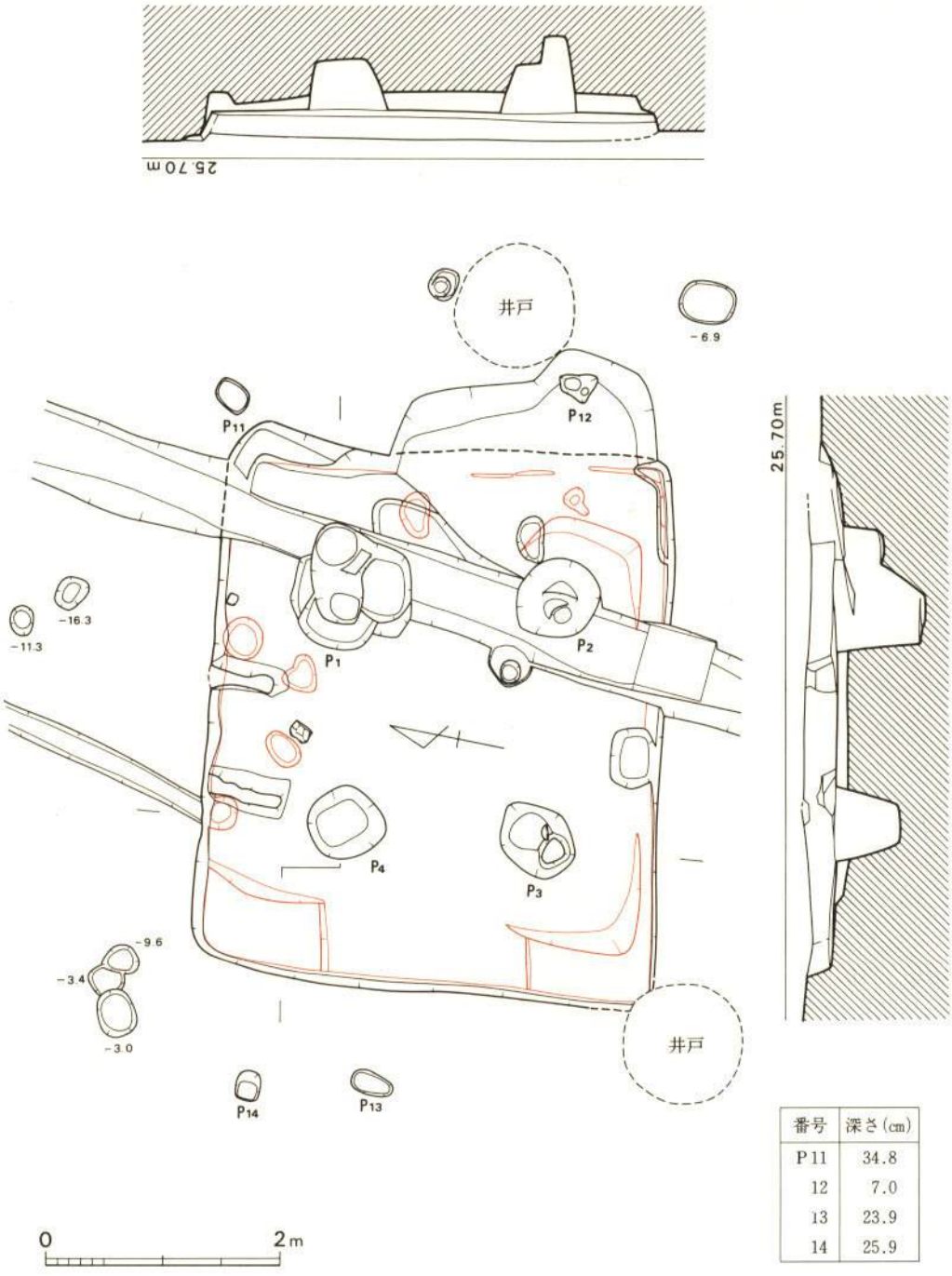
甕（4）　口縁部破片で、端部は肥厚する。外面はナデで、内面には灰が厚く被る。焼成は良好で、灰青色を呈する。

土師器

坏（2）　口唇部は丸く納める。胎土は精良であり、色調は黄褐色を呈する。外底面はヘラケズリである。

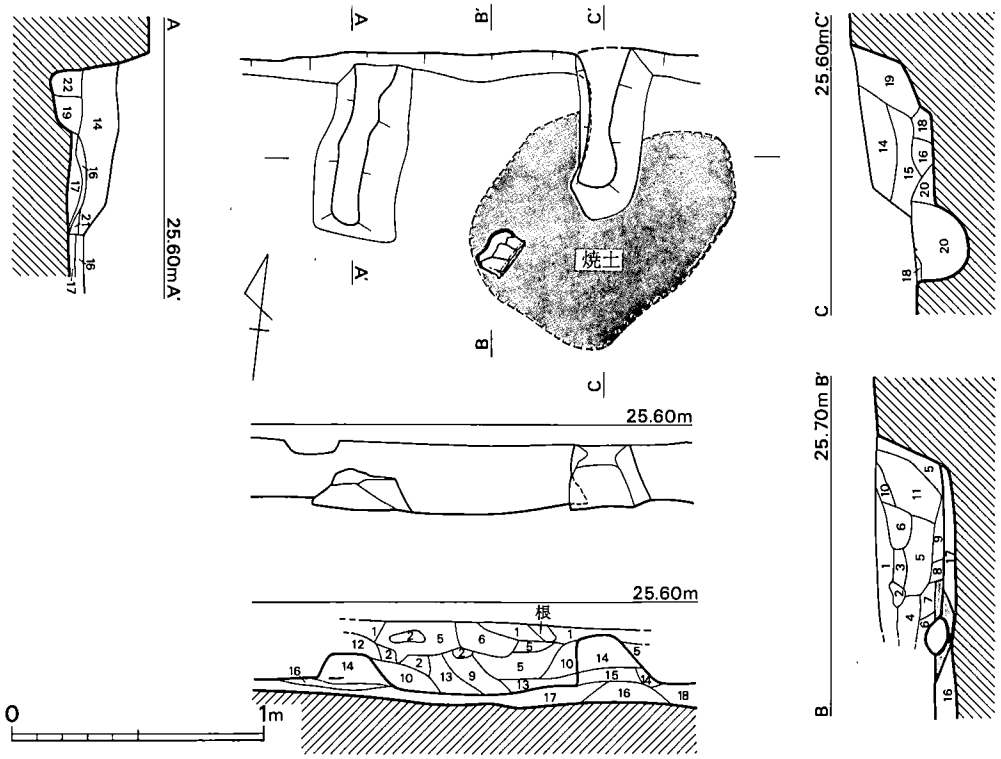
甕（3）　カマドの支脚に使用していた小型の甕である。口縁部は小さく屈曲する。内面ヘラケズリ、外面ハケ目調整である。また、口唇部に煤が付着している。胎土に長石・石英を含む。色調は暗褐色を呈する。

甑（5）　5は底部破片である。内面ヘラケズリ、外面ナデ調整である。外面に黒斑あり。（小田）



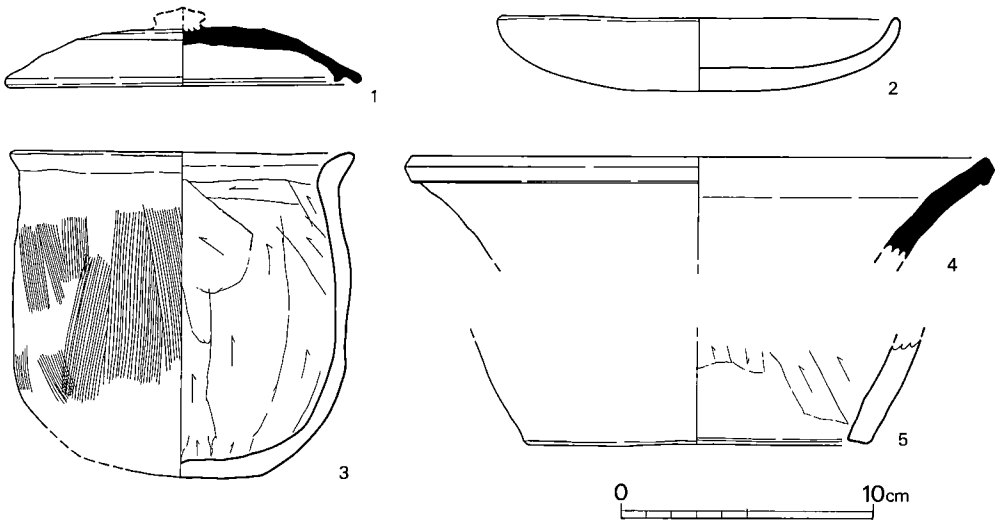
番号	深さ(cm)
P11	34.8
12	7.0
13	23.9
14	25.9

第 42 図　14号住居跡実測図(1/60)



1黒灰色土　2黒色土　3②よりも明るい　4暗黄灰色土　5暗茶灰色土　6黄灰色土　7黄茶色土
8炭　9焼土と炭の層　10暗茶灰色土(焼土粒含む)　11暗赤褐色土(焼土、炭多し)　12黒茶色土(焼土、炭含む)
13茶灰色土　14こげ茶色土（焼土粒含む）　15⑭に焼土粒多く含む　16茶褐色粘土と黒褐色土との混合土
19⑭より焼土多し　20灰層　21灰白色粘質砂　22⑭と黄灰色粘質砂の混合土

第 43 図　14号住居跡カマド実測図(1/30)

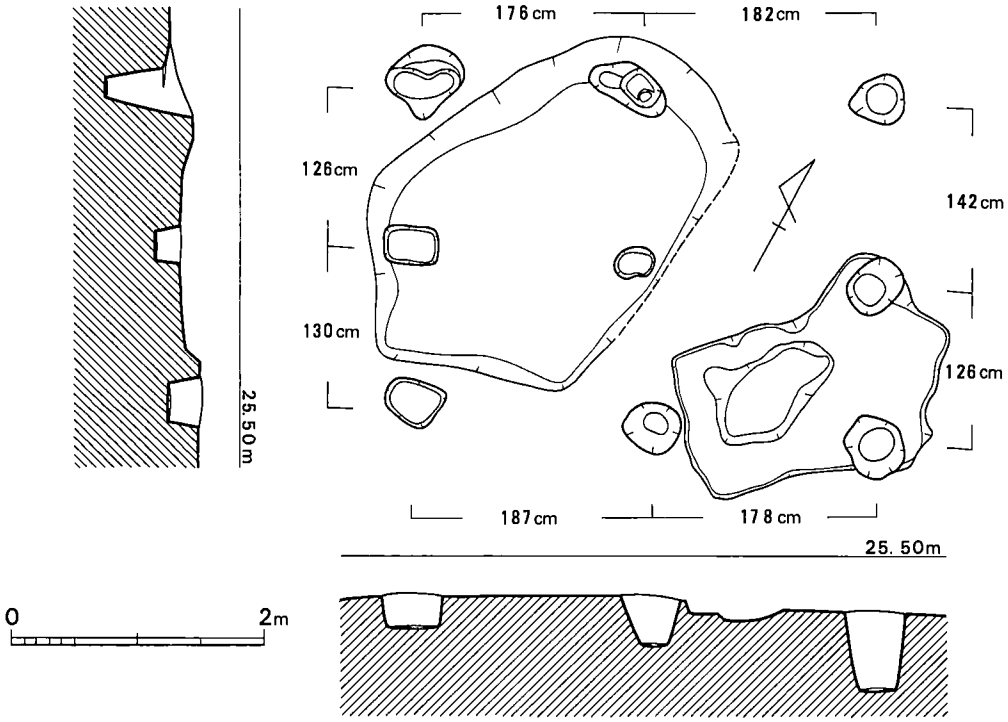


第 44 図　14号住居跡出土土器実測図(1/3)

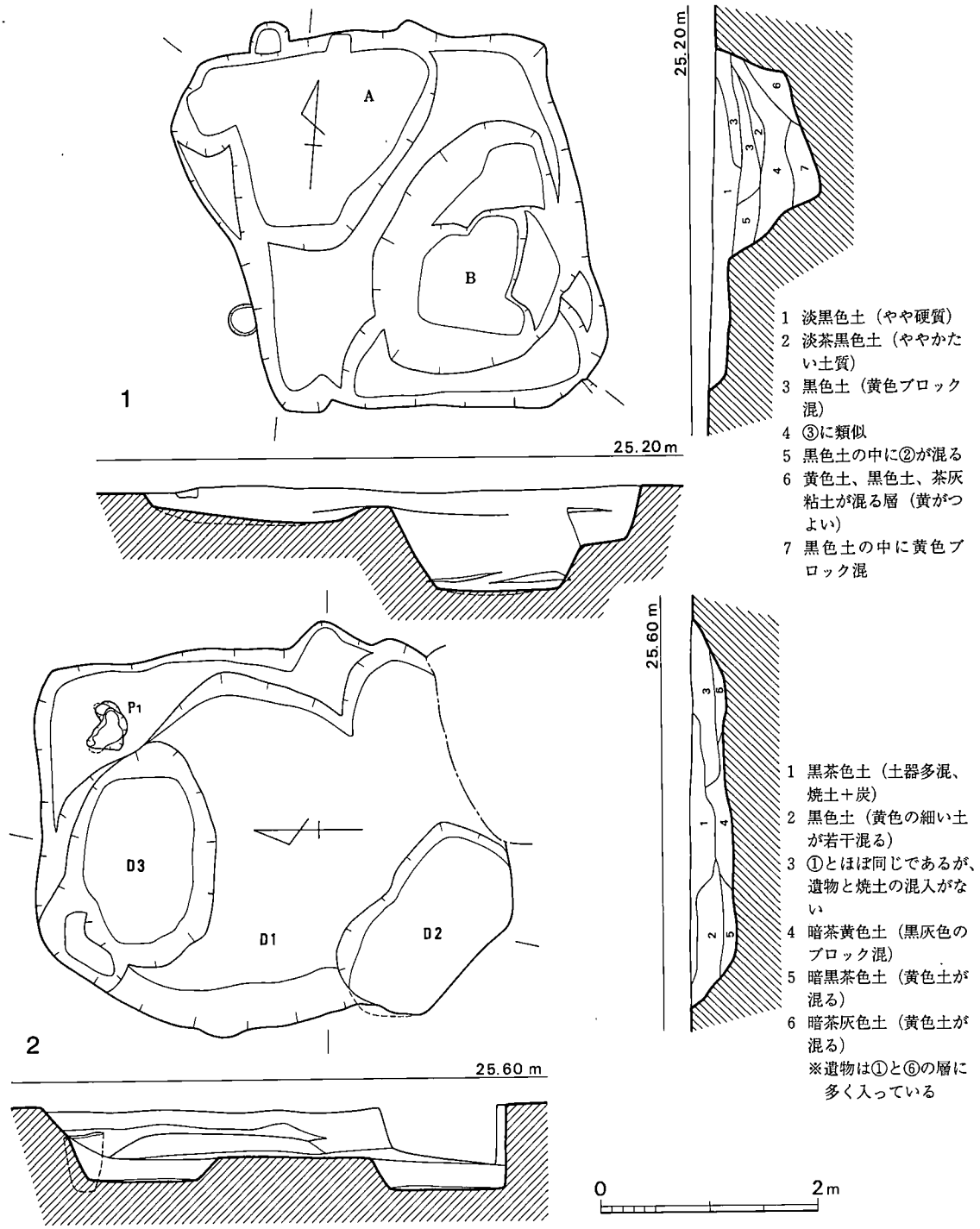
3．掘立柱建物

1号掘立柱建物（第45図）

調査区中央部の南端に、7号住居跡と8号住居跡の間に検出した2間×2間の総柱建物である。建物の方位はN28°Wで、柱間寸法は南北方向が約1.26～1.42mを測る。その寸法に若干の出入りはあるが、平均値をとって、およそ4.5尺の梁間となる。また、東西は約1.76～1.87mと柱間幅が大きく、やや西方向に偏した柱列をなすが、その平均値は約1.8m（6尺）であり、企図した桁間と考える。掘形はそれぞれ径約50cm前後の不整形で、中央掘形のみが他と比較して一回り小さくなる。柱穴は確認できなかった。なお、北西、南東コーナーの掘形のみ約2倍の深さに掘られていることを指摘しておく。（高橋）



第 45 図　1号掘立柱建物実測図(1/60)

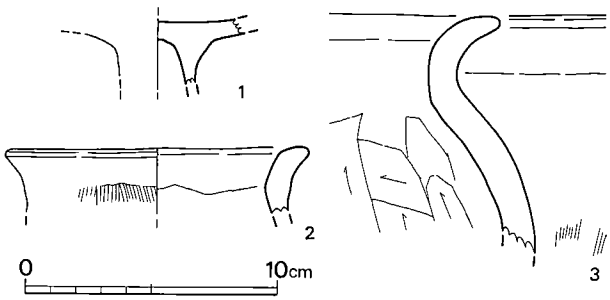


第 46 図　1・2号方形竪穴実測図(1/60)

4．方形竪穴

1号方形竪穴（図版20、第46図）

調査区のほぼ中央に検出し、4号住居跡の西側に位置する。検出時は隅丸方形のプランをしていたため住居跡と考えたが、掘り進めるうちに底面で土壙状の遺構2基を検出するに至った。



第47図　1号方形竪穴出土土器実測図(1/3)

掘形は一辺約3.0mの隅丸方形を呈し、主軸は若干西に偏している。竪穴は検出面より約15～20cmで平坦な床面となるが、北西（A）と南東（B）コーナー部に、歪んだ楕円形のプランを呈する土壙状遺構2基が内蔵されていた。

Aは長径2.5m、短径約2.0m、最深1.0mを測る。底面は北から南へ傾斜している。埋土を注視すると全体に黒色土であるが、最下層は黒色土中に黄色粘質土がブロック状に認められ、中層も下層に近似した土質を呈しつつ、ブロックの粒が細かくなる。さらに、それに混じって硬質の黒色土が部分的に混入していた。出土遺物は極めて少ない。

Bは主軸を南北にとり、長径2.4m、短径1.7m、最深0.95mを測る。埋土はAと同様軟質の黒色土である。

出土土器（第47図）

土師器

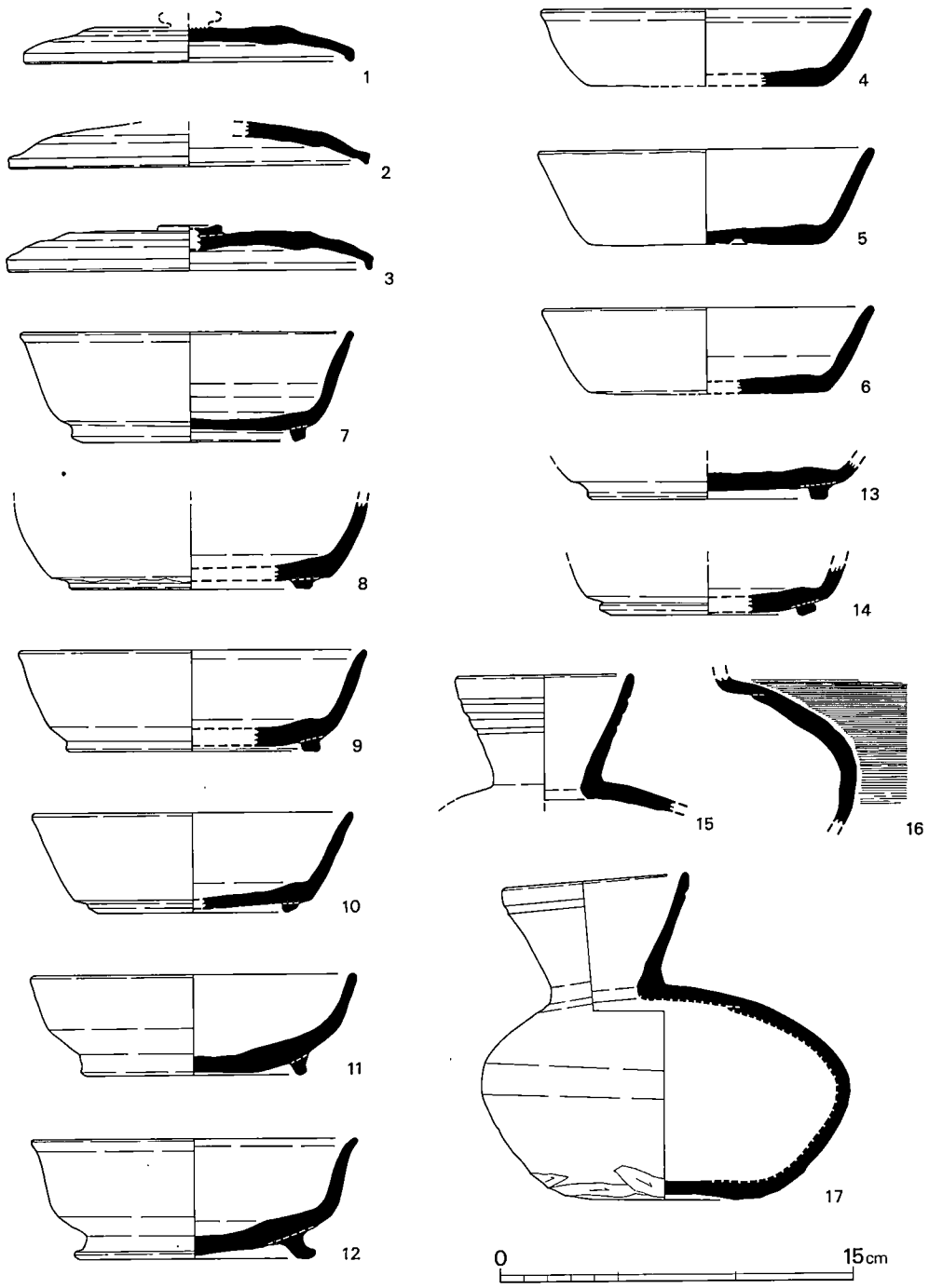
高坏（1）　坏部から脚部にいたる小片である。茶褐色を呈し、脚部内・外体共に横ナデ調整である。

甕（2）　普遍的にみられる小型の甕で、口径12.0cmを測る。外体部はハケ目調整を行い、口縁内面と内体部に稜をもって屈折する。胎土に砂粒を多く含み、焼成軟質。

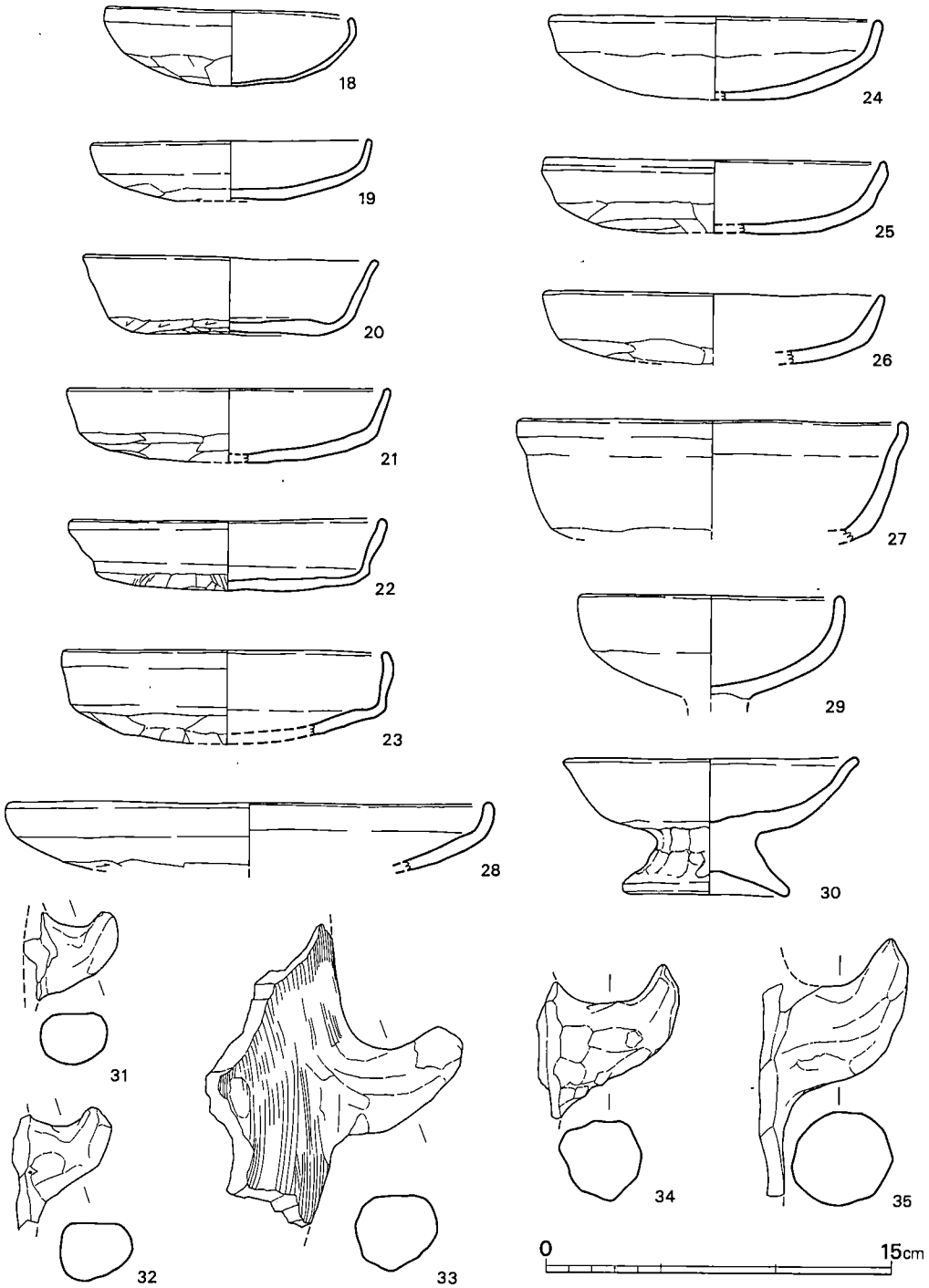
壺（3）　体部から口縁端部にかけS字状をなす。器肉が厚く、体部中位で1.3cmを測り、外体部にハケ目を残す。内体部は下→上のケズリ調整が認められる。橙褐色で胎土中に砂粒を多く含む。（高橋）

2号方形竪穴（図版21、第46図）

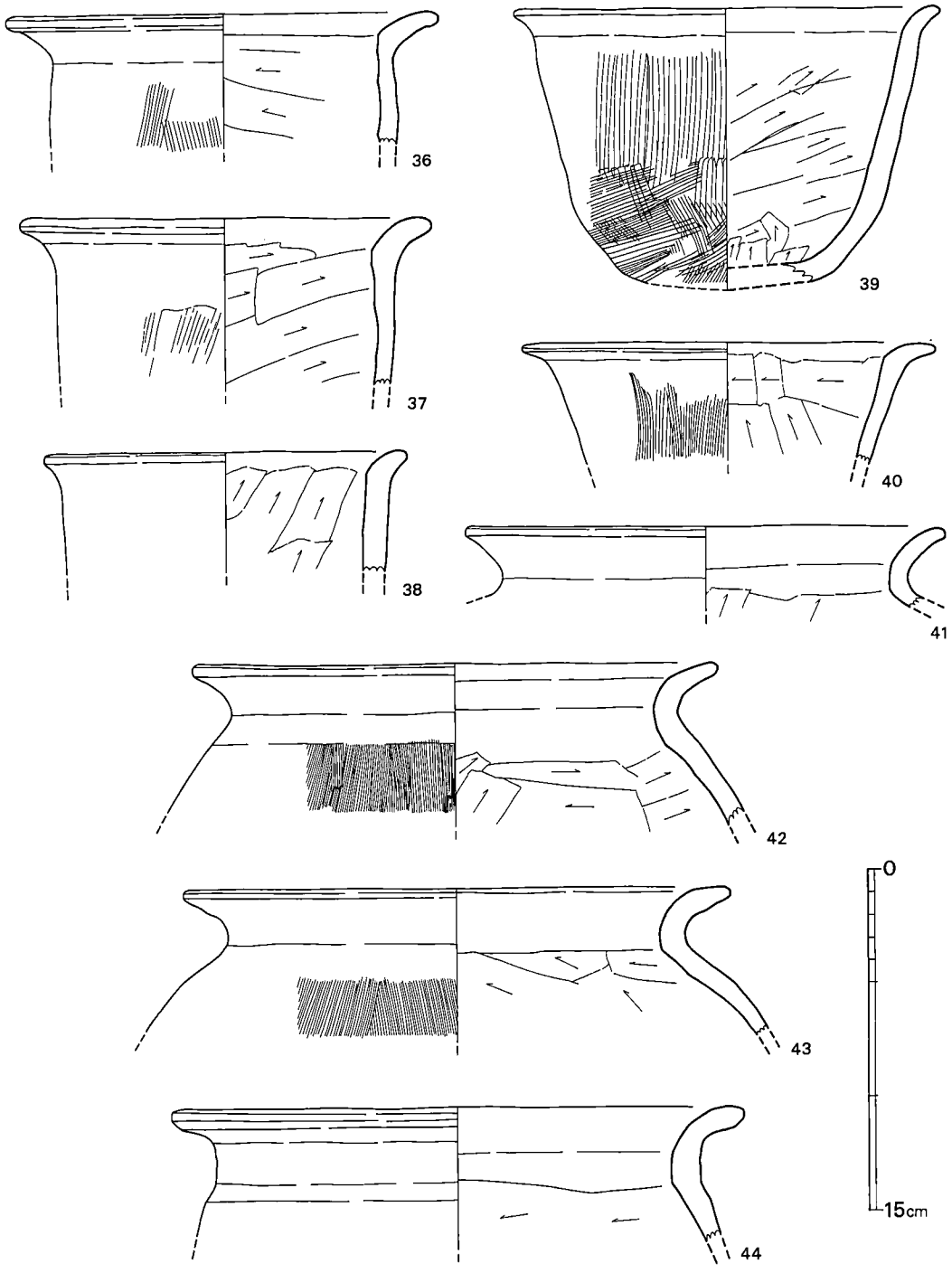
集落の南群8号住居跡の西側に位置する。北東コーナー部に浅いテラスがあり、西側及び南側には、内土壙（D—1）が存在する。内土壙は検出面より深さ39.9cmの摺鉢状をなす。さらにその北側（D—3）と南側（D—2）に内土壙を検出しているが前後関係は判明しない。



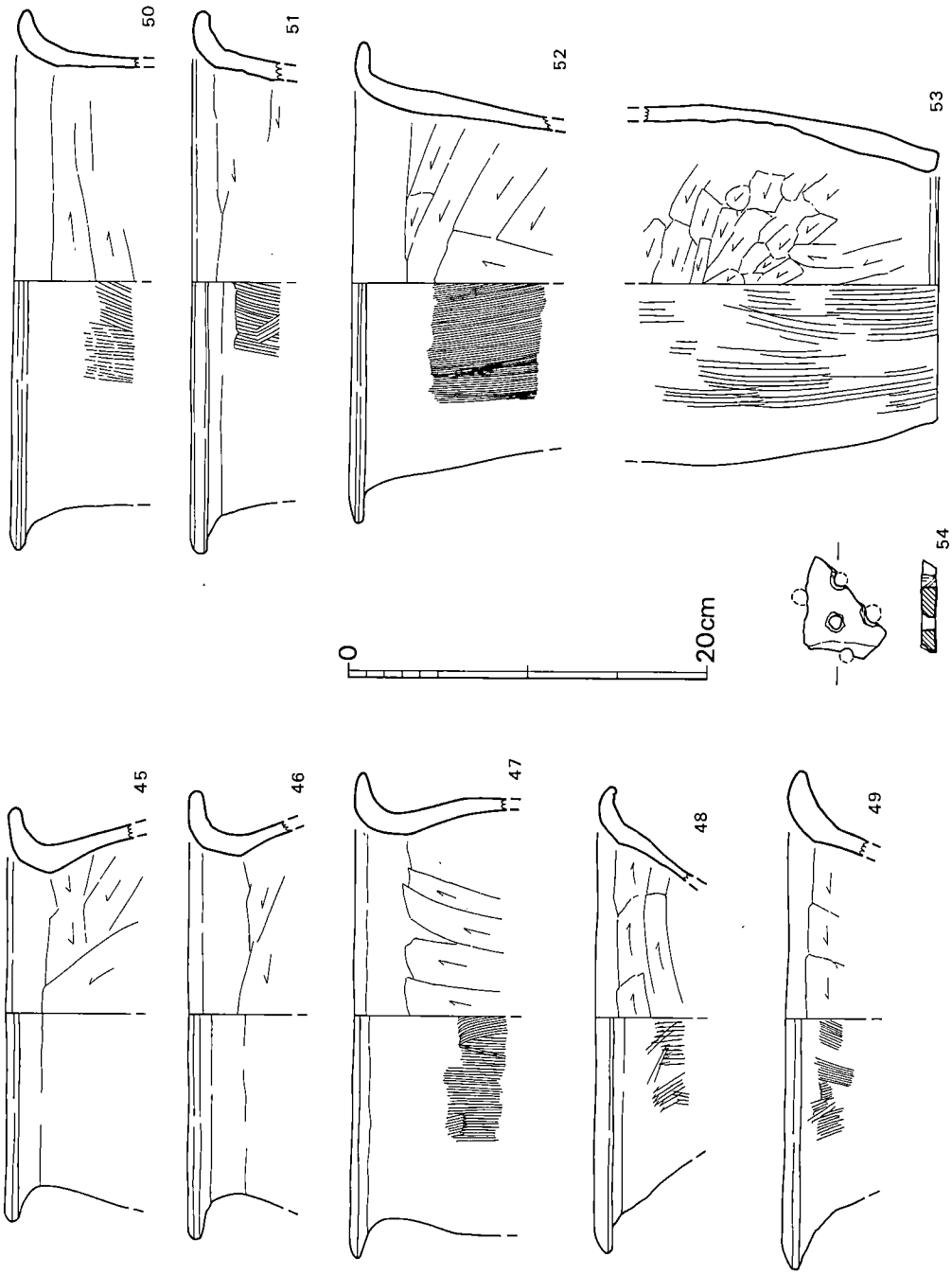
第 48 図　2号方形竪穴出土土器実測図①(1/3)



第 49 図　2 号方形竪穴出土土器実測図②(1/3)



第 50 図　2 号方形竪穴出土土器実測図③(1/3)



第 51 図　2 号方形竪穴出土土器実測図④(1/4)

南側土壙（D—2）は、1.9×1.1mの隅丸長方形をなし、検出面よりの深さ72.8cmで、その長軸やや北寄りで完形の須恵器平瓶が出土しており、その形態より土壙墓と思われる。主軸方位はN53°Wを示す。北側土壙（D—3）は長軸東西の長楕円形（2.06×1.49m）で、検出面より深さ68cmを測る。

出土土器（図版26－3、第48～51図）

須恵器

蓋（1～3）　天井部は平坦で偏平化したつまみがつく。口縁端は鳥嘴状に折れる。復原口径は1が13.6cm、2は15.0cm、3は15.3cmを測る。

坏（4～14）　4～6は平底で口縁は直線的に開いて立上る。7～14は高台を付した坏身で、7～10は底面のやや内側に高台を付ける。11・12は丸底に近い底部に先端がやや跳上った高台をつける。口縁はやや外反しながら立上る。7は口径14.0cm、器高4.7cmを測る。12は口径13.9cm、器高5.1cmを測る。

平瓶（15～17）　15の口縁下には3条の沈線が施され、16の体部にはカキ目痕が残る。17は南側土壙（D—2）よりほぼ完形で出土しており、土壙墓の副葬品の可能性がある。底部はヘラケズリされる。胴部から口縁部には横位のヨコナデが施され、口縁下に1条の沈線が施される。口径8.0cm、器高14.0cmを測る。

土師器

坏（18～28）　18は口縁が内傾し、丸底を呈する。口径11.0cm、器高3.3cmを測る。19・21・24～26は口縁が直線的に開いて立上り、丸底気味を呈する。22・23は口縁に明瞭な稜がみられ、口唇部はやや肥厚する。底部は丸底気味である。22は口径13.3cm、器高3.0cmを測る。23は口径13.8cm、器高4.1cmを測る。28は皿状を呈する。24以外底部調整はヘラケズリ、内面はナデによる。

高坏（29・30）　29は椀状、30は皿状の坏部がつき、30の脚は接合部よりハの字状に短く開く。外面は指圧痕が残り、内面はヘラケズリにより凹む。29は脚径11.6cm、脚高4.4cmを測る。30は脚径12.9cm、器高6.0cmを測る。

甕（36～47）　39は丸底で、胴部は直線的に開き、口縁が短く外反する。胴部内面横位ヘラケズリ、口縁内外面ヨコナデ、以下外面底部にいたるまでハケ目調整を施す。頸部内面の稜は明瞭でない。口径18.8cm、器高12.4cm。36～38は口縁部が強く外反し、頸部内面には横位ヘラケズリにより明瞭な稜がつく。38以外は外面頸部以下にハケ目調整痕が残る。胴部が球形に強く膨らむもの（41～43）と、やや膨らみを持ち最大径が上位にあるもの（44～47）がある。前者は口縁部が強く外反する。内面頸部以下は、横位ヘラケズリを施す。口縁内外面から頸部下までヨコナデを施し、胴部はハケ目を施すが、頸部付近はナデ消される。口径21.0～24.

0cm。後者は頸部が短く立上り口縁が強く外反する。胴部内面ヘラケズリ、外面ハケ目調整（45・46はナデ消される）を施し、頸部内面の稜は明瞭である。口径23.7～27.3cmを測る。

鉢（48・49）　胴部は直線的に強く開き、口縁はそのまま外反する。内面はヘラケズリを施し器壁を薄くしており、口縁部は肥厚する。外面はハケ目調整である。口径は48が26.3cm、49は28.1cmを測る。

甑（50～54）　胴部は直線的にのび、口縁はゆるく外反するもの（50・51）と直角に屈曲するものがある（52）。胴部内面ヘラケズリ、外面は縦位に荒いハケ目調整を施す。54は底部の破片である。

把手（31～35）　おそらく甑または把手付甕より剝離したもので、（33～35）は甑の把手であろうか。

何度かにわたって（少なくとも２回）、摺鉢状落込みに投棄したものと思われる。土器以外にフイゴの破片が出土している。（木村）

５．土壙

１号土壙（図版７、第52図）

発掘区中央の北隅に３号住居跡と重複して検出した土壙である。３号住居跡との切合い関係は第52図の土層に示すごとく住居跡埋土（淡黒茶色土）を切って掘込まれたものである。南北長約4.0m、東西長約3.5mの不整形なプランを呈する。北辺部はなだらかに二段の掘込みを有し、南辺部になるに従って深くなり、検出面から80cmを測る。埋土を観察すると大きく４層に分類できる。下から２層（黄色土のブロックが混る黒色土）と３層（細かい焼土混りの黒色土）の間に赤褐色土（焼土層）が認められた。このことは３号住居跡埋土中にも焼土が確かめられたことや、３号住居跡と本土壙出土土器が時期的に隔たるものでなく、接する時期のものであることなどから、１号土壙は３号住居跡が廃棄したまもない時期に掘られた可能性が考えられる。出土遺物は黒色土層からまとまって出土した。

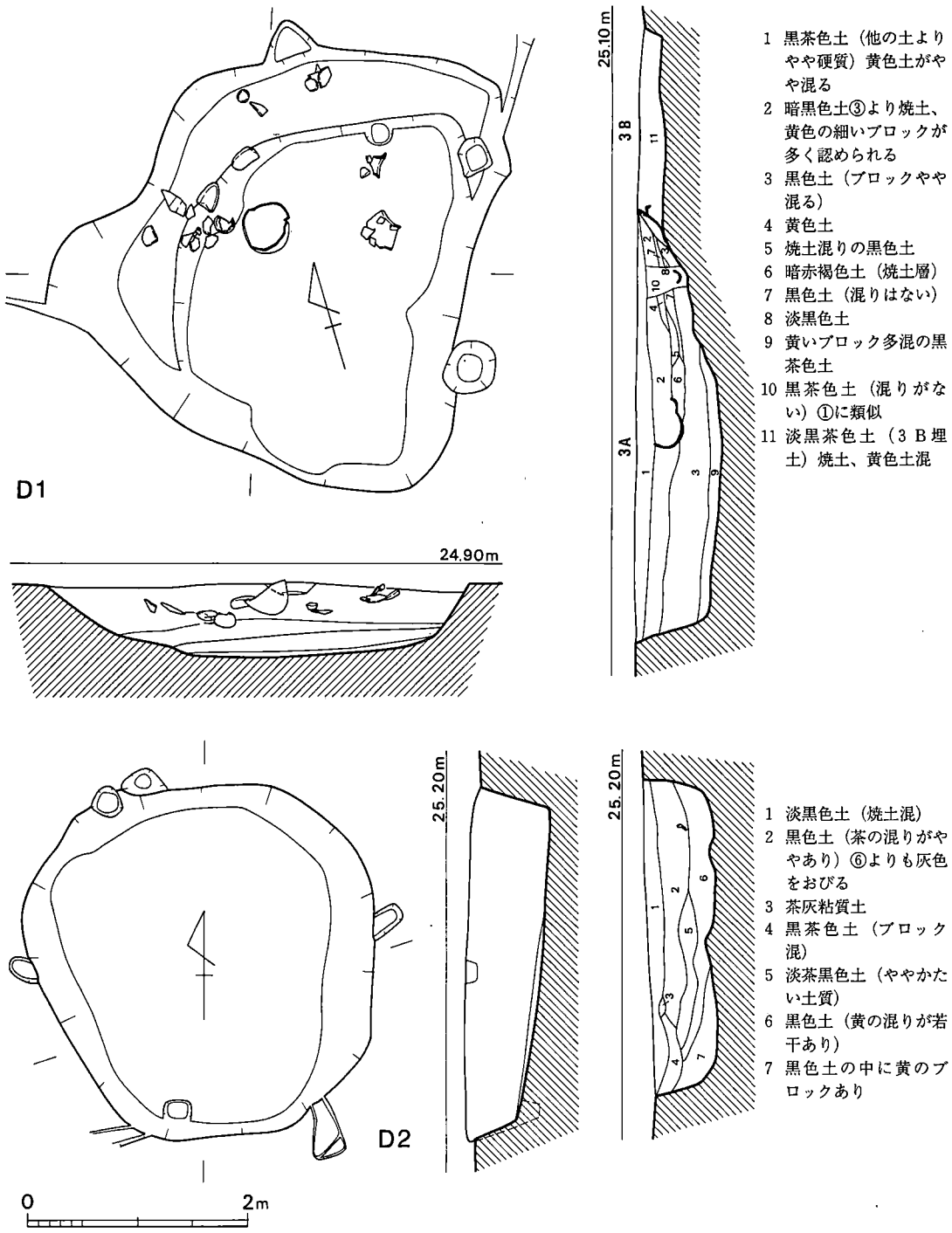
出土土器（図版27・28－１、第53～55図）

須恵器

蓋（１、２）　復原口径8.5cm、器高2.8cmでつまみの無い蓋である。天井部は平坦で丁寧なケズリ調整を施し、体部～口縁はほぼ直立する。内底はナデ、体部は横ナデ調整である。一部灰を被っており、焼成は堅緻である。坩の蓋であろう。

２はつまみを欠損する。天井部はヘラケズリを行っているが未調整のままである。復原口径12.8cmで三角形状の浅いかえりをもつ。内・外面は丁寧な横ナデである。

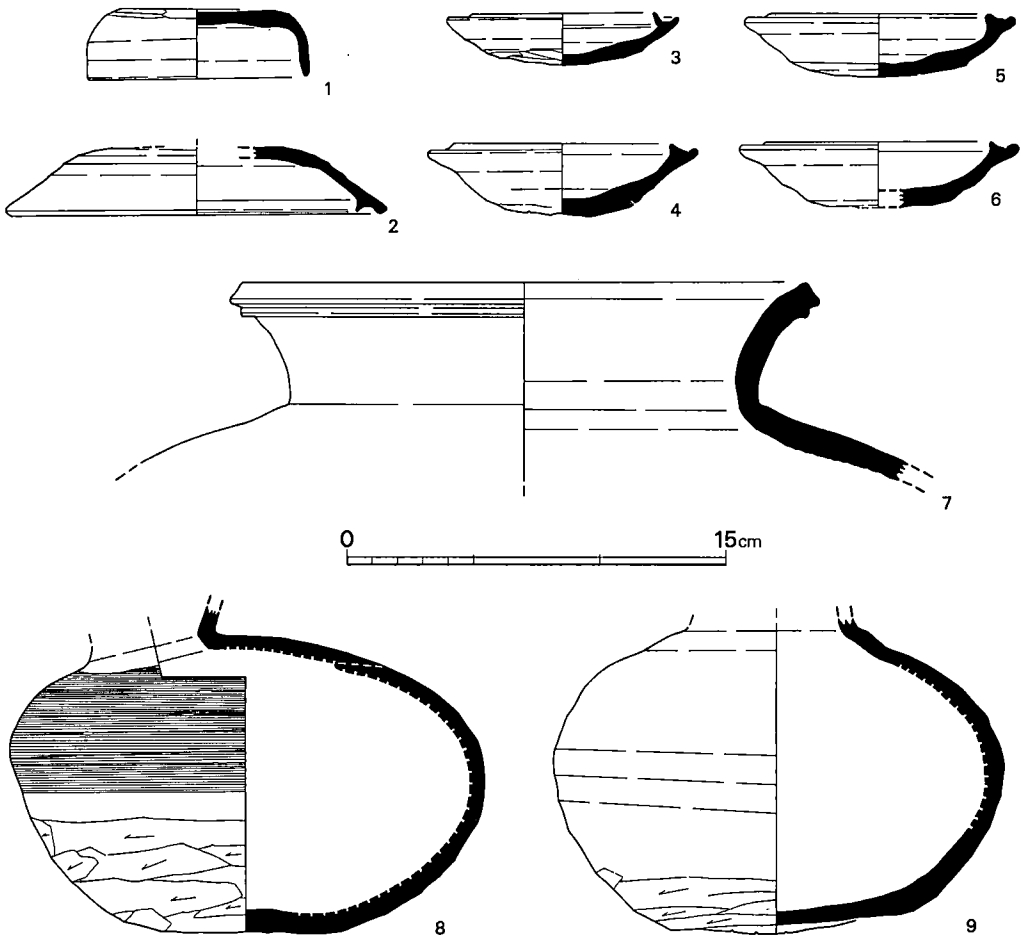
坏（３～６）　すべて受部を有する坏である。３は４～６に比較して口径が若干小さく7.



第 52 図　1・2号土壙実測図(1/60)

2cmを測る。外底はナデ、内・外体部は横ナデ調整。器高2.0cmと浅い。堅緻に焼成されている。口径は4—8.6cm、5—8.6cm、6—9.0cmで、底部から体部中位までを肥厚して作っており、口縁端部になるにつれ断面は薄くなる。口縁部から三角形状に突出する受部は浅く、口唇部はやや外反する。各々外底はヘラケズリおよびナデ調整しているが、4は未調整のままである。胎土には砂粒を若干含む程度で、精製された土器といえる。何れも灰褐色で焼成は硬質である。

甕（7・23）　7は復原口径22.2cmを測る口縁の破片である。頸部から口縁端部にかけて弓形状に外反し、端部は二重の突帯を巡す。頸部は平行の叩きを観察できるが、その上を横ナデ調整している。23は口縁部を欠損する。残存器高42.0cm、胴部上位で最大経となり42.4cm



第53図　1号土壙出土土器実測図①(1/3)

を測る。底部は丸く納める。外面は平行タタキ目、内面は青海波文タタキがつく。

平瓶（8）　頸部は欠損する。体部最大径18.7cm、底部から上部までの高さ11.7cmである。底部は緩やかな丸味をもち、底部は平坦でナデ調整を施す。外体部中位から下端は手持ちヘラケズリ、上端はカキ目調整である。灰黒色で焼成は堅緻。9は頸部を欠損しており、体部最大径17.9cmである。体部中位のやや下端から座部にかけて手持ちヘラケズリを行い、底面はナデ調整である。中位から上端は回転ナデが明瞭である。胎土に細砂粒を若干含み暗灰色を呈す。また底面にヘラ記号を見る。

土師器

坏（10・11）　10は復原口径14.8cmで、底部から体部にかけて丸底風に仕上げており、口唇部は僅かに外反する。内・外体部調整はナデにより暗文が明瞭に残る。また体部、口縁部に所々丹が認められるが、ほとんど剝落している。11は口径16.1cm、器高5.2cmで、底部・体部は丸味をもっている。体部中位下端はケズリの稜が良く残っている。内面ナデ、口縁部は横ナデ調整である。赤褐色を呈し、焼成は硬質。底面にヘラ記号を認める。

皿（12）　復原口径14.7cm、体部から口縁部にかけ真直に立上り、口唇部はやや内彎気味に仕上げている。内・外面は横ナデ調整。全体に橙褐色を呈す。

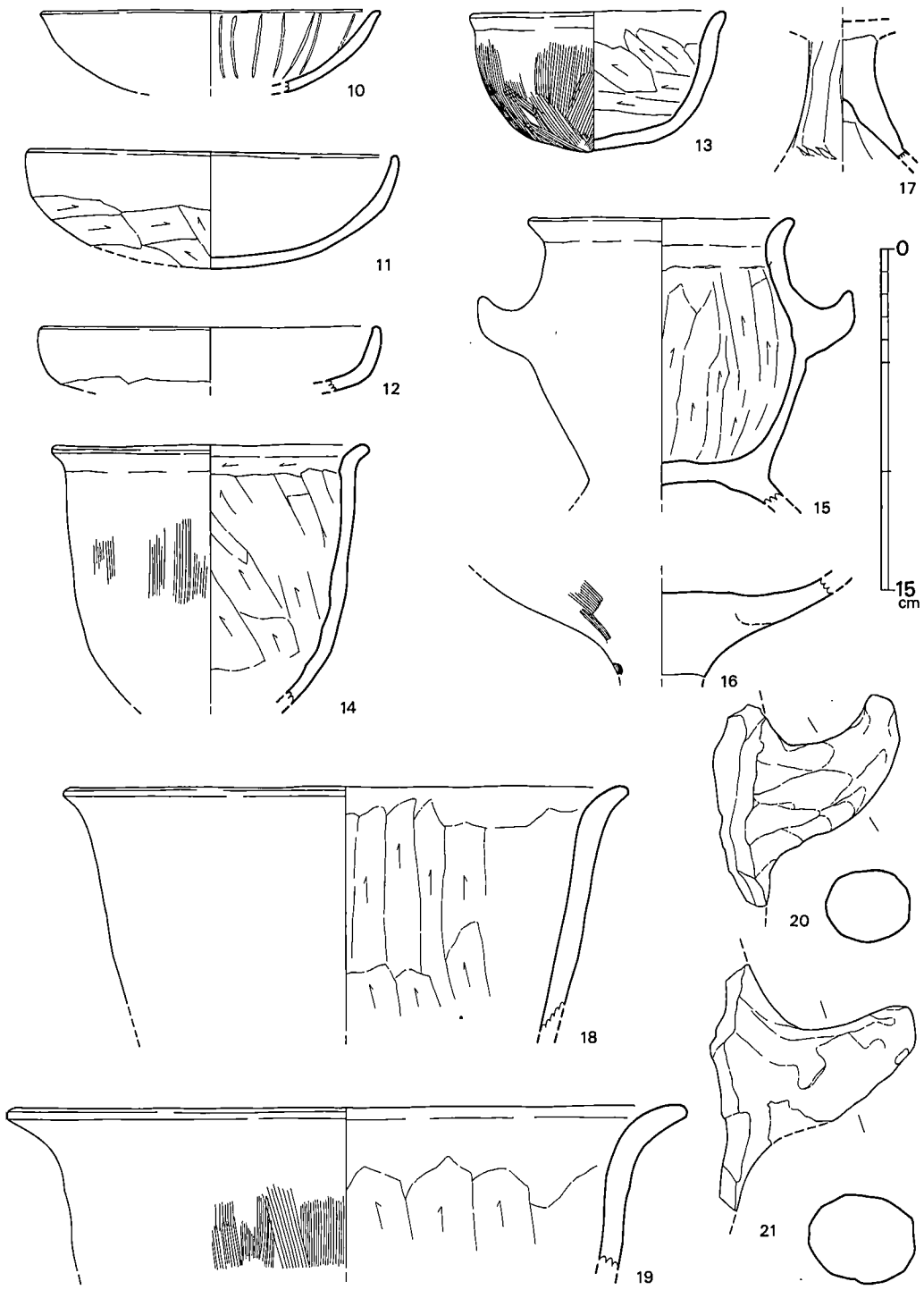
鉢（13）　手持ちの小鉢である。口径11.0cm、器高6.1cmを測る。底部は丸底風につくられ、口縁端部から底部は縦方向のハケ目を施す。口縁周辺は回転ナデであるが、内面は強いケズリ調整を見る。橙褐色で焼成は硬質。胎土に砂粒を多く含む。

甕（14・18・19・22）　14の小型甕は1号土壙中で最も多く出土したが、すべて欠損し完形品は見ない。復原口径13.6cmを測り、口縁部を緩やかに外反する。外体部はナデ、内部は下→上のケズリ調整である。胎土に砂粒を多く含み、茶褐色である。外面に一部煤付着。18・19は大型の甕片である。18は復原口径24.3cm、19は29.2cmを測る。外体部はハケ目。内部はケズリ調整による。22は底部を欠損する。口縁は肥厚し、体部の器肉は薄い。外面ハケ目、内面ケズリ。

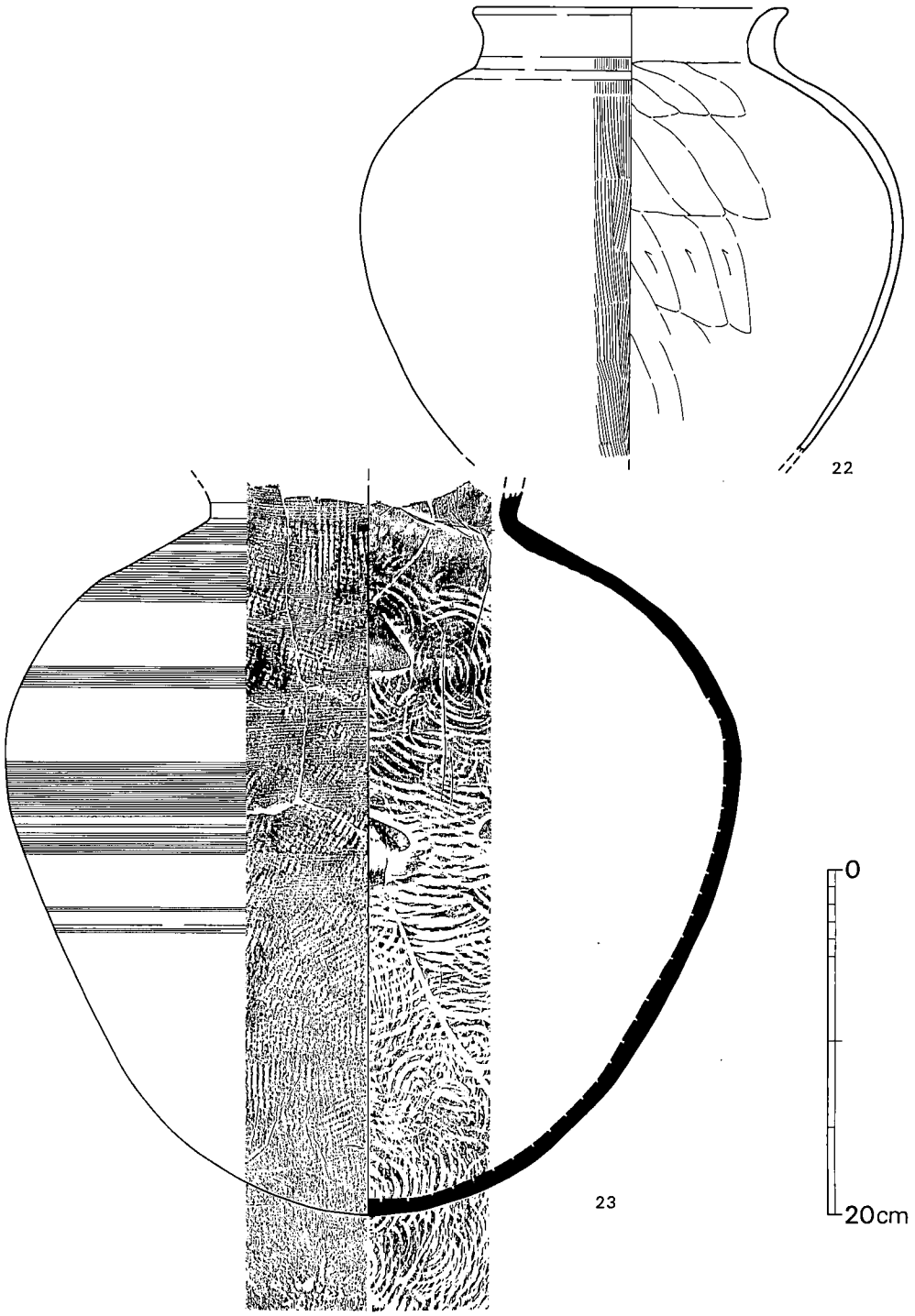
高坏（16・17）　16は脚部から坏部にかけての破片で、外面をハケ目、坏部内底はケズリ調整である。小片で明らかでないが、脚部から坏部への形状は緩やかに丸味をもって立上るものであろう。17は脚部片で、ケズリ調整が明瞭である。共に褐色を呈している。

脚台付甕（15）　15は把手の付いた脚台付甕で今回1点の出土である。口径11.4cm、内底からの高さ10.8cmを測る。把手は体部が最大径となる箇所に貼付され、丁寧にナデ調整を施す。外体部はナデ。内部は下→上のケズリである。口縁部はやや外反し屈曲する付近が若干肥厚する。調整は横ナデによる。脚部は欠損しているため明らかでないが、八の字形に踏んばったものであろう。色調は褐色を呈し、胎土に砂粒を若干含む。外面に煤が付着している。

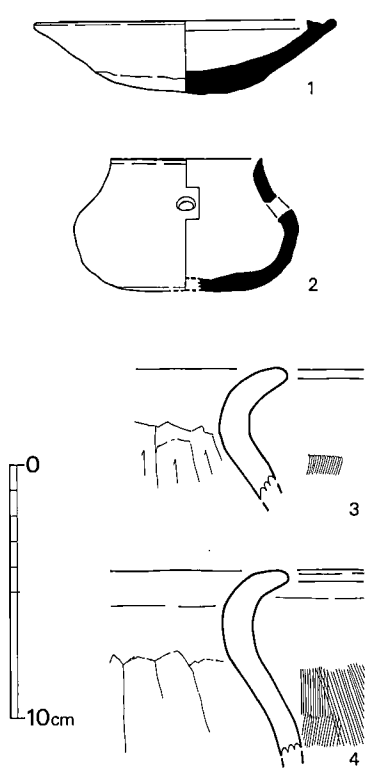
把手（20・21）　茶褐色をした甕の把手である。調整は丁寧にナデている。



第 54 図　1号土壙出土土器実測図②(1/3)



第 55 図　1号土壙出土土器実測図③(1/4)



第 56 図　2号土壙出土土器実測図(1/3)

2号土壙（図版22－1、第52図）

1号土壙の西側で隣接して検出した。南北長3.2m、東西長3.15mのほぼ円形のプランを呈する土壙である。床面は南から北へ緩傾斜し、北側で深さ約70cmである。埋土は下層から⑥黒色土、⑤淡茶黒色土、②茶色混在の黒色土、①焼土混在の淡黒色土等が認められ、②から土器が数片出土した。周壁は斜めに掘られており、底面は必ずしも平坦ではなく凹凸が認められた。

出土土器（図版28－2、第56図）

須恵器

坏（1）　口径9.8cm、受部径12.0cm、器高2.8cmを測る。立上りはやや内傾し、受部は三角形状の断面をなし浅く内傾する。内底部はナデ、外体部から口縁部は横ナデ調整を施し、底部はケズリである。胎土は砂粒が少ない。

瑞壺（2）　2片でもって復原した。復原口径6.0cm、器高5.2cm、底径5.0cmを測る。体部は丸味を帯び、口縁部に従いシャープに立上りをみせる。端部は薄く尖り気味にやや外反する。体部上位に径0.8cmの穿孔がある。底部はヘラケズリ、外体部から内体部にかけて横ナデ調整である。胎土に砂粒は少なく灰白色で、焼成は軟質。

土師器

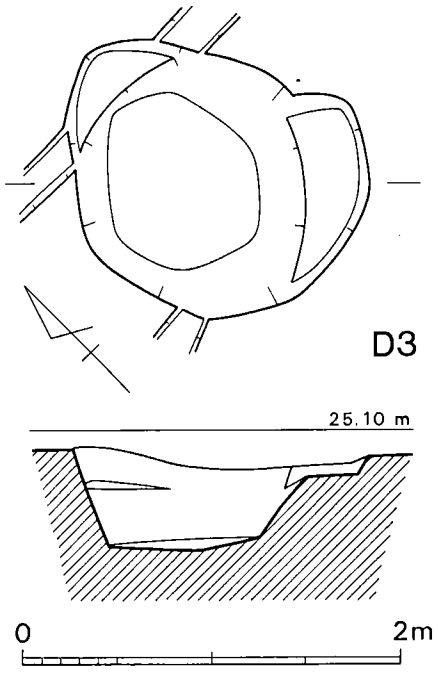
甕（3・4）　口縁の破片である。3は丸味を持って「く」字状に外反する口縁で、内面に明瞭な稜は見られない。外体部にハケ目痕が残る。橙褐色である。4は体部が張る特徴を有し、そのため頸部がしまった形をとる。口縁端部は器肉が薄くなって丸く納まる。外体部はハケ目調整。内体部は下→上のケズリである。

3号土壙（図版22－1、第57図）

2号土壙の南側に隣接して検出した。南北長約1.4m、東西長約1.35mの円形プランを呈する。北側と南側に浅い平坦な掘込みがあり、周壁の傾斜は60°を測り、床面に達する。床面はほぼ平坦で、直径約1.0～1.20mである。中央で最深50cmを測る。遺物の出土はなかった。

4号土壙（図版22－3、第58図）

検出時はプランから想定して住居跡かと思われたが、掘り下げるにつれ床面が3つに区分される土壙となった。調査区の最も西端部に検出し、南北長3.35m、東西長2.9mの隅丸方形に近いプランを呈する。四周の壁はかなり出入りが激しく、北西コーナー部ではピットが認められた。床面は3つに区分され、かつ3段から成っており、南東コーナーが最も高く、その西側、北側は約10cmの落差で低くなっている。最も低い北側で、検出面からの深さ50.5cmである。埋土層序は下層から⑥暗黄灰粘質土、⑤黒灰色土、④黒茶色土（焼土と炭化物混）、③黄灰粘質土、②黒色土、①黒茶色土となるが、④の層からは夥しい土器類、紡錘車等が出土し、一気に投棄されたことを物語っている。この土壙はプラン、埋土層などから方形竪穴遺構に類するかもしれない。



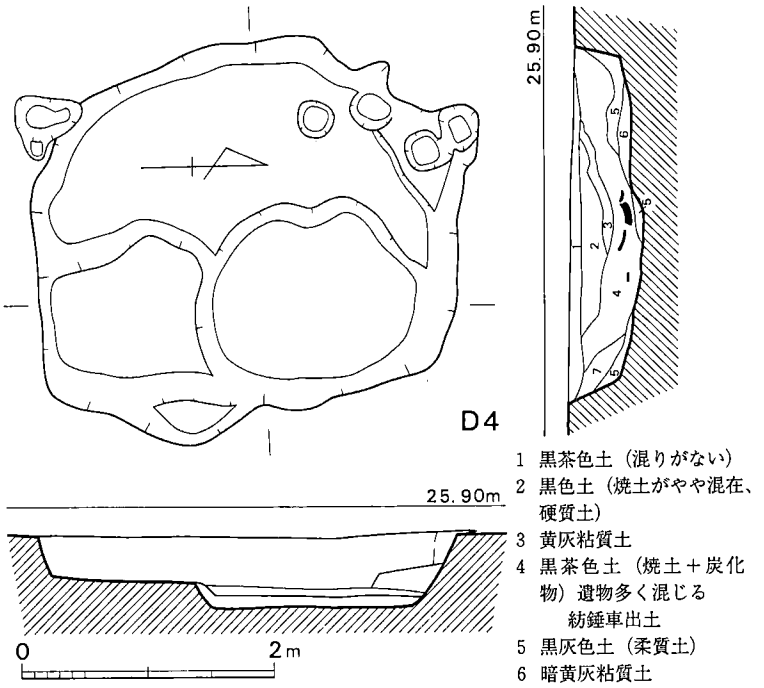
第 57 図　3号土壙実測図(1/40)

出土土器（図版28－3、第59・60図）

土器の出土量は多い方であったが、器形を推定しうる遺物は第59・60図に示すのみである。

須恵器

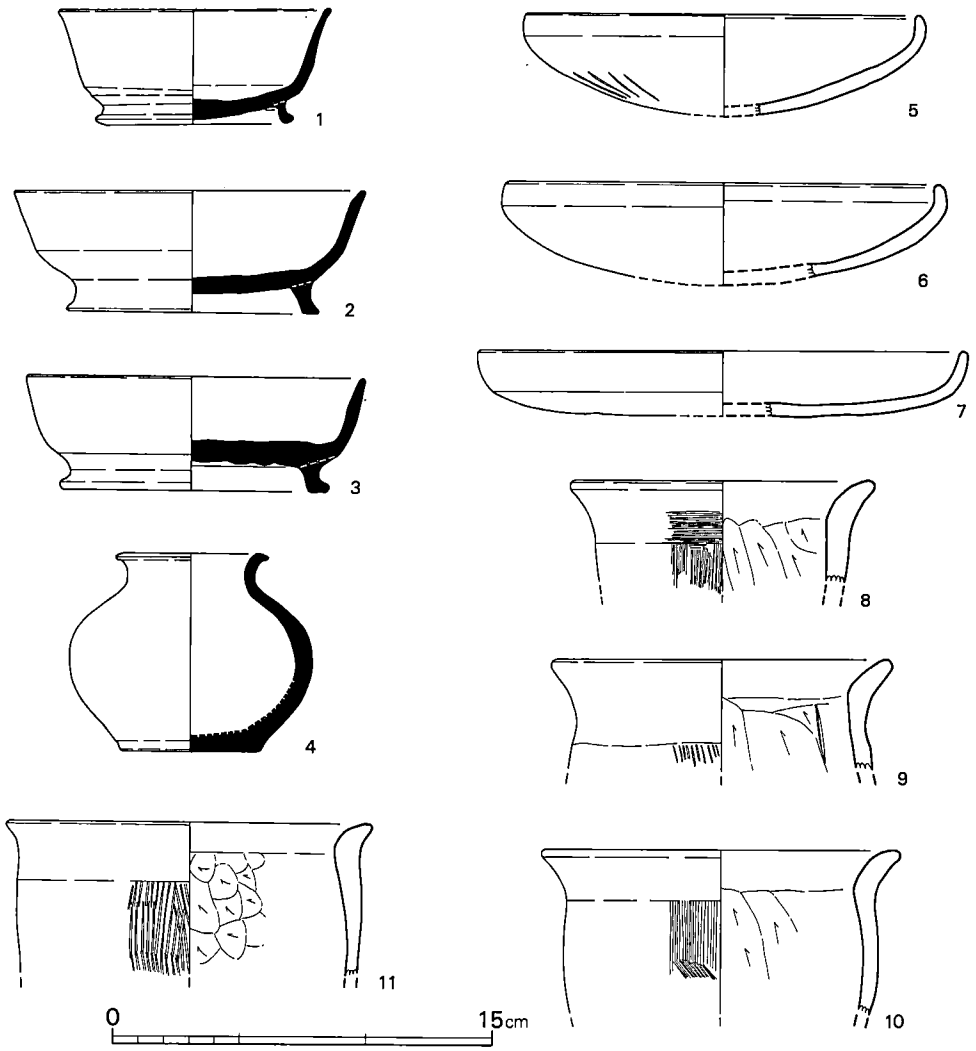
坏（1～3）　1は口径10.8cm、器高4.5cm、底径7.8cmの高台付坏である。器肉は薄く、底部から体部にかけ丸味を持って立上り、口唇部がわずかに外反する。高台は底部外周より内側に納め、外向きの足疋形状の低いもので



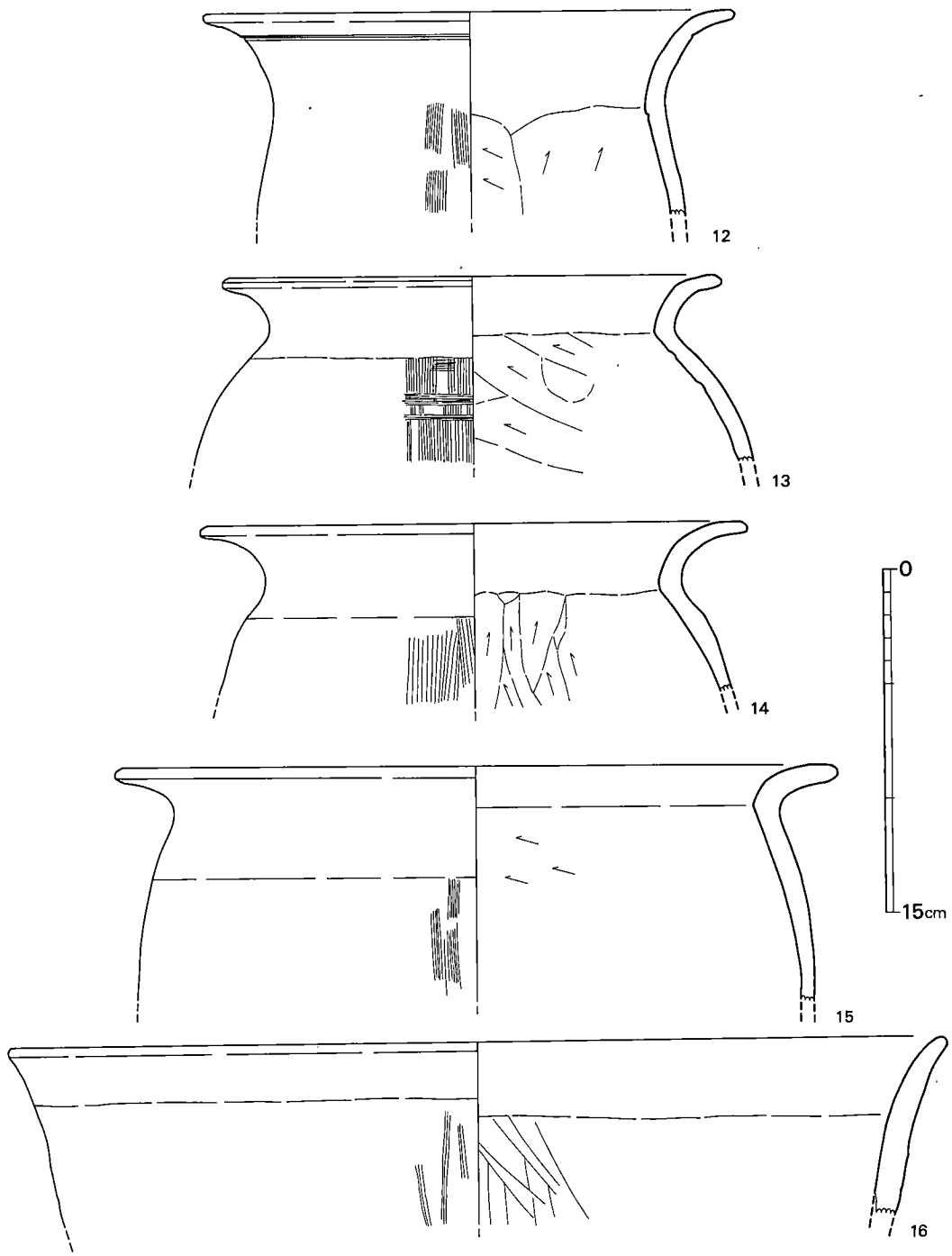
第 58 図　4号土壙実測図(1/60)

ある。2・3は口径13.8cm、13.4cm、器高4.7cm、4.5cmと類似した器形をなす。ただ、体部から口縁部にかけて2は外反するのに対し、3は直立する。また両者共に足疋形状の高台を付しており、2は著しく外反するのに、3は外向に屈曲する。2・3共に外底はヘラ切り離しのままである。

壺（4） 復原口径6.0cm、器高7.9cm、底径5.4cmの小壺である。体部から口縁部にかけS字状に立上り、口唇部は下り気味に外反する。体部の張りが強いため頸部がしまって見える。外底はケズリ調整。内・外体部はロクロ挽きの横ナデである。全体に灰色で胎土は精製。



第 59 図 4号土壙出土土器実測図①(1/3)



第 60 図　4 号土壙出土土器実測図②(1/3)

土師器

坏（5・6）　底部から体部にかけては丸底風になるが、5のように底がやや尖り気味になるのもある。口縁端部は緩やかに内彎する。5は復原口径15.8cm、器高4.1cmで、外底の一部に簾状痕が残っている。6は復原口径17.2cm、器高4.0cmで摩滅が著しい。内面口縁部に緩やかな稜が入る。

皿（7）　復原口径19.4cm、器高2.6cmの精撰された皿である。口縁部・体部は底部から外反しつつ立上るが、その境は明瞭でない。内底はナデ、外底は丁寧にヘラケズリ調整である。淡茶色で焼成はやや軟質である。

甕（8～16）　全体の形状、口縁形態などから大きく三分類でき、8～11は小型甕で、その法量からA・Bに細分可能である。また12～16は大型甕で、C～Eのタイプに分けられる。

A（8）は復原口径12.0cmで、体部から口縁部にかけて器肉が肥厚し、口唇端部はゆるく外反する。口縁部は横方向にハケ目の調整が施され、内体部は下→上のナデである。外体部は黒色で煤が一部付着している。

B（9～11）Aより口径が大きくなり、13.4～14.4cmを測る。体部は緩やかにわずかな丸味をもって立上るが、口縁が「く」字状に屈曲するもの（9）や、大きなカーブで外反するもの（10）、口縁内が肥厚しゆるく外反する（11）ものがある。各々胎土には砂粒を含み、焼成良好である。

C（12～14）復原口径が22.0～24.2cmである。12は口縁が弓形状をもって外方に大きく外反するため、稜が認められず、したがって体部の張りが小さく直線的である。口縁部に浅い1条の沈線を見る。13・14は口縁が「く」字状に強く外反し、内面に明瞭な稜をもつ、このため、肩部および体部は強い胴張りとなる。13は外体部に煤が付着している。

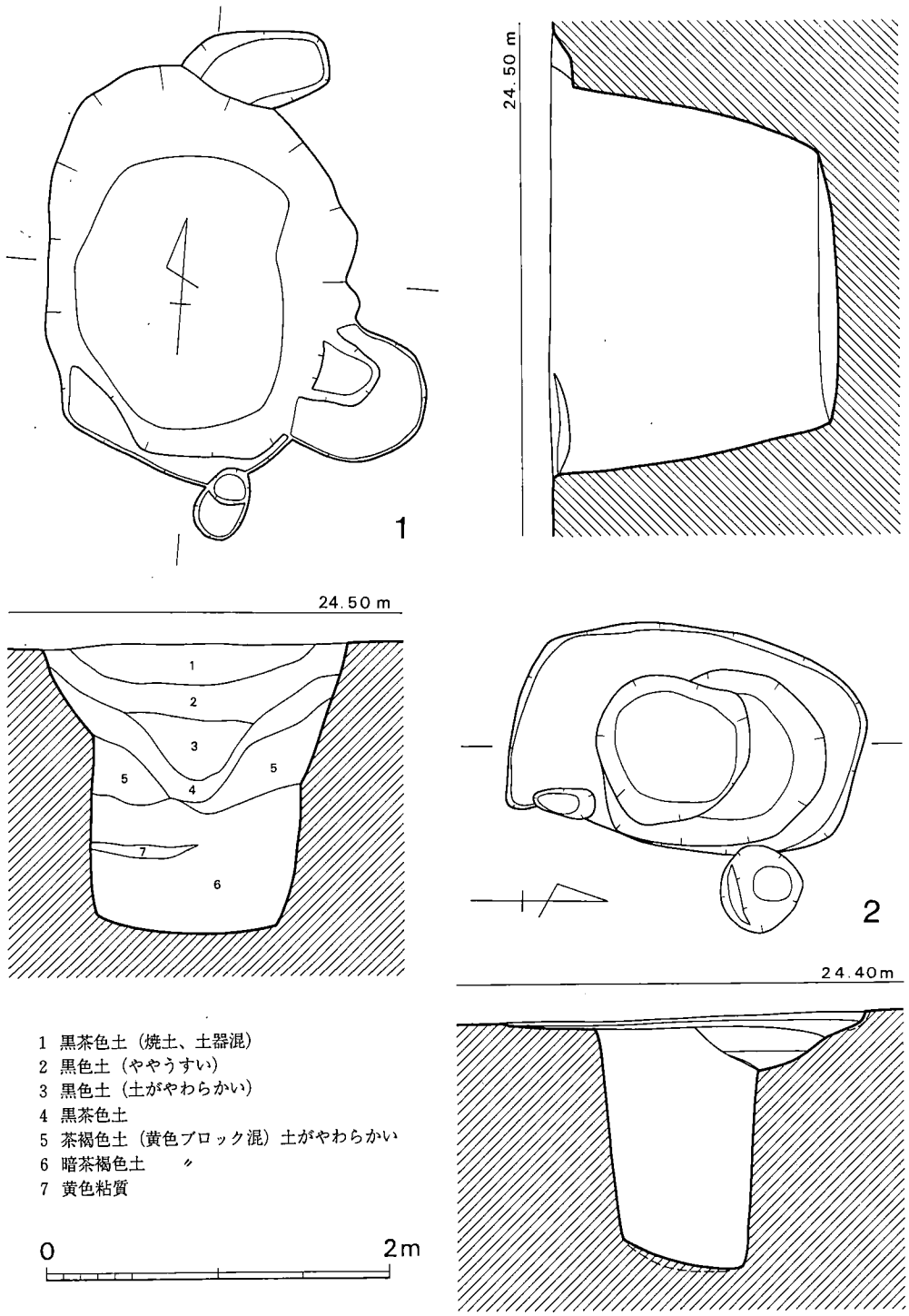
D（15）復原口径が31.9cmと大きく、口縁は強く外反する。外体部は細いハケ目、内面は斜め方向のケズリ調整を施す。胎土は粗製で砂粒の量が目立つ。

E（16）復原口径41.2cmで、口縁は緩く外反する。全形を知ることが出来ないため、鉢形ないし鍋形になるか判断に躊躇する。胎土には雲母片が含有され、焼成は硬質である。外体部はハケ目、内面は斜方向にケズリ調整を施す。（高橋）

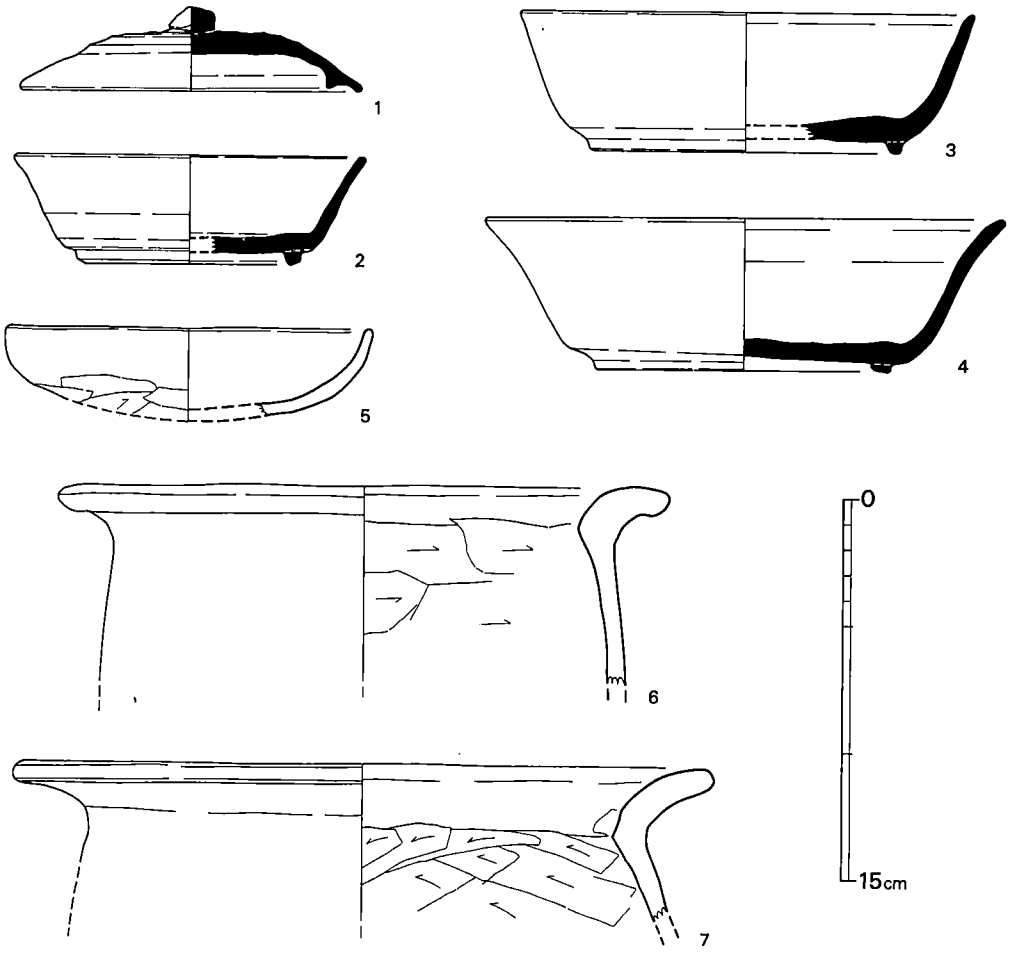
6．井戸

1号井戸（図版23、第61図）

A地区の東端部にあって、住居跡群からは若干離れた位置にある。掘形は南北に長い楕円形のプランを呈し、長径2.4m、短径約1.8mを測る。遺構検出面から底面（湧水層に達する箇所）までの深さ約1.7mを測る。井戸埋土は大別すると下層から暗茶褐色土、茶褐色土、黒茶



第 61 図　1・2号井戸実測図(1/40)



第 62 図　1 号井戸出土土器実測図(1/3)

色土、黒色土（2層に分かれる）となり、下層の暗茶褐色土には黄色粘土が混在していた。断面を見ると検出面から約50～70cmまでは摺鉢状に斜めに掘られているが、それより下は真直ぐである。井戸枠を組んだ形跡がないため、おそらく素掘りの井戸であろう。埋土中から若干の遺物が出土した。

出土土器（図版28－4、第62図）

須恵器

蓋（1）　1は浅い返りのある坏蓋で、口径13.2cm、器高3.3cmを測る。天井部を回転へ

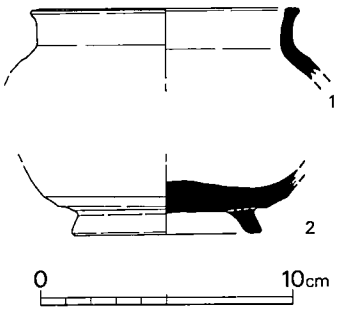
ラケズリし、径1.8cmのつまみを有す。暗灰色を呈し、焼成は堅緻である。

坏（2～4）　2は坏身、3・4は大型の坏身である。2は復原口径13.7cm、4は20.2cmで体部と内底部の境が明瞭であり、高台が脆弱となる。3は体部の丸味が顕著にみられ、体部下位を回転ヘラケズリ調整している。各々胎土は精撰され、焼成は堅緻である。

土師器

坏（5）　体部から底部にかけ丸味をもつ形態を有し、口唇部は内彎気味である。復原口径14.1cm。底部はケズリ調整を行っている。

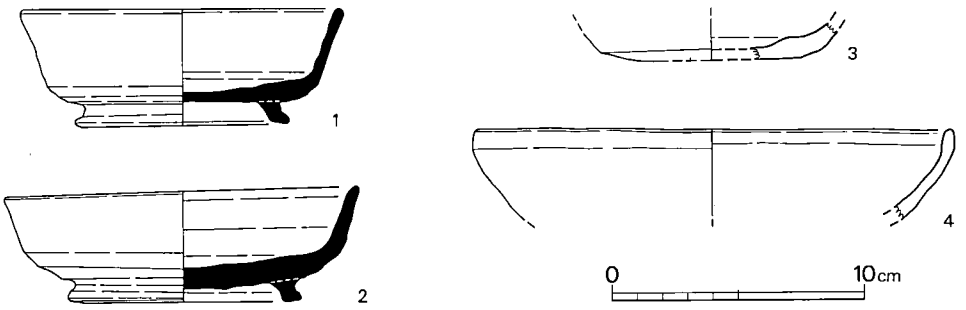
甕（6・7）　6は復原口径24.0cm。口縁部を弓状に外反する。内面は横方向のケズリ調整を行っており、煤が付着している。7は口縁を「く」字状に外反させ、丁寧にナデ調整を施している。復原口径27.5cmを測る。



第 63 図　2号井戸出土土器実測図(1/3)

2号井戸（第61図）

1号井戸から約8m南東で検出した素掘りの井戸である。上層のプランは南北2.0m、東西1.3mの隅丸長円形を呈し、深さ約4cmという浅いものであったが、掘り進むにつれ、その中央部に直径約0.8mの掘形で、約1.5mの深さにほぼ垂直に掘られている井戸を検出した。湧水層の水出は激しくないにしても、水量が1号井戸に比較して多くみられた。また上面プランの掘形と井戸掘形プランの中間（井戸掘形の北側）に径約1.0mの円形落込みを検出した。この掘込みは検出した上層プラン面から井戸掘形まで降りる階段状をなしている。因に踏面約20cm、蹴上げ約10cmで、水を汲む時の足場ではないかと推考する。



第 64 図　2号溝出土土器実測図(1/3)

出土土器（第63図）

須恵器

壺（1）　1は復原口径9.7cmで、器肉が薄く、焼成は軟質である。外面頸部から体部にかけて灰を被っている。広口小壺であろう。

坏（2）　高台付坏で、高台は低く外開きする。底径7.5cmを測る。暗灰色を呈し、胎土は砂粒が少なく、精製された土器である。（高橋）

7．溝

溝

住居跡群の東側に6mの間隔で平行する2本の溝を検出した。各溝の上位幅60～70cm、底面幅30～40cm、深さ30cm前後を測る。地形は全体的に東に向かって低くなっており、2本の溝にはさまれた部分及び東側には、全く遺溝は検出されていない。集落の東側を限る境界又は道であった可能性がある。

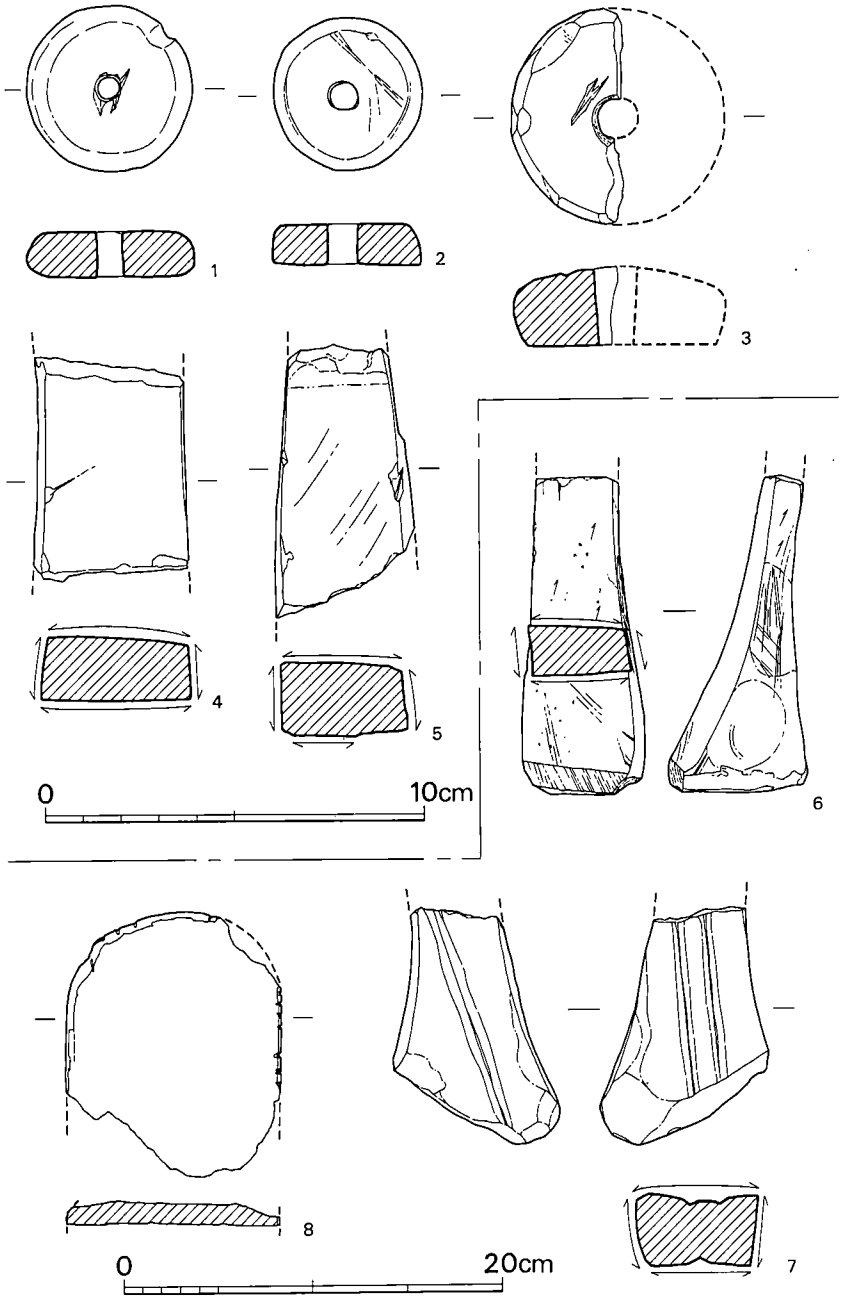
2号溝出土土器（図版28－5、第64図）

須恵器

坏（1・2）　ともに平底に近い底部で、高台はやや内側に寄って外開きにつけられ、端部が若干跳上がる。内外面とも回転ナデを施すが、底部、口縁の屈曲部にヘラケズリが残る。1は口径12.8cm、器高4.7cmを測る。2は口径14.1cm、器高4.3cmを測る。この他に紡錘車が1点出土している。（木村）

8．その他の遺構

A地区の東半にあって、1号井戸の南側、2号井戸の西側に検出した4本柱建物である。柱掘形は径35～40cm前後の円形を呈し、深さは30～50cmである。柱間は東西の北列2.5m、南列3.0mで、南北東列2.75m、西列2.7mを測る。この柱間寸法では1間×1間の掘立柱建物とするには東西列の柱間に約50cm前後の差を生じ、北列が挟まった状況となる。また住居跡の主柱穴と考えた場合、これと同等の柱間寸法をもつ例に、3号住居跡、2号住居跡等があげられる。このことから数値上、住居跡の主柱穴と考えた方が妥当かと思われる。床面、周壁等は掘削されたものであろう。（高橋）



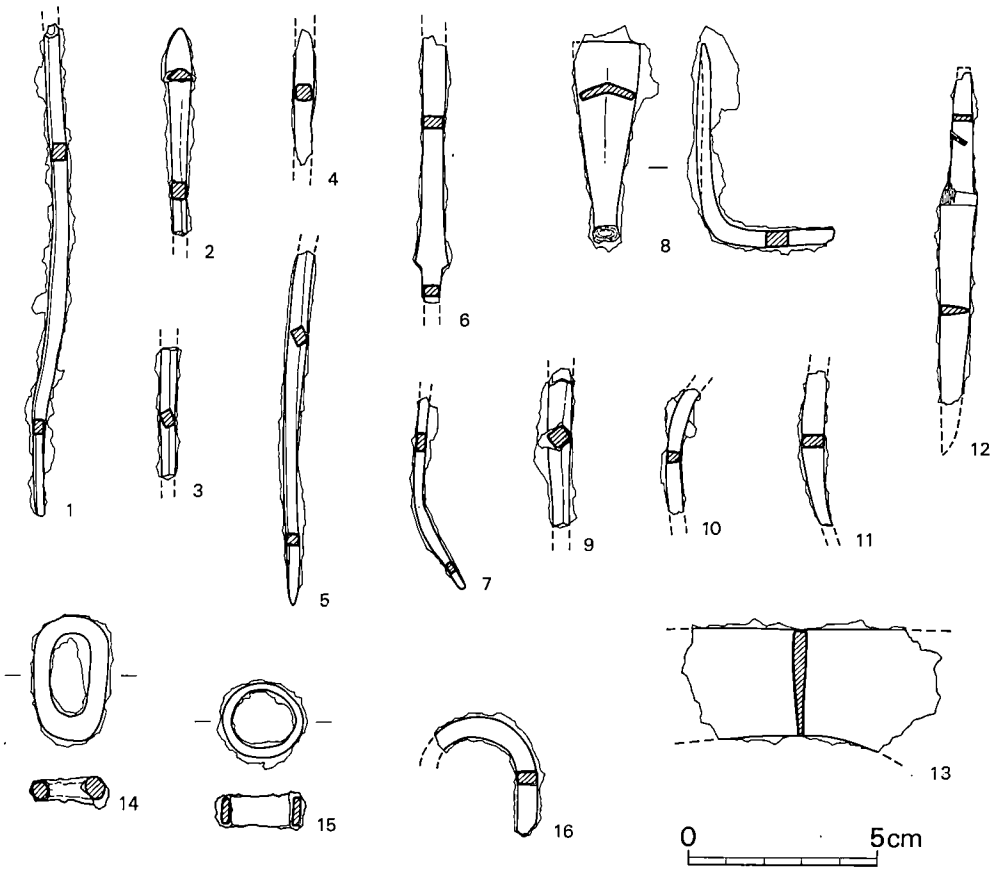
第 65 図　石製品実測図(1/2、1/4)

石製品（図版29、第65図）

紡錘車（1～3）　1は径4.4cm、厚さ1.2cm、孔口径0.6cm、重量41.15gの滑石製。両面平坦で、周囲断面はカマボコ形をなす。1号溝の出土。2は径3.9cm、厚さ1.1cm、孔口径0.8cm、重量33.05g。両面平坦で、周囲断面はやや台形に近い。滑石製で、土壙4出土。3は径5.6cm、厚さ2.0cm、孔口径1.1cm、重量53.04gで、孔部分での破損品である。一面は平坦であるが他方はカマボコ形に盛り上がる。滑石製で、1号土壙の出土。

砥石（4～7）　6は4面とも砥ぎこまれ、一端は著しく磨り減っている。残存長16.5cm、一端の断面は5.5×6.5cmで本来の大きさを示し、他方は4×1.5cmで摩滅がはげしい。4・5は砥ぎ込まれた部分の破片であろう。7は6と同じ砥ぎ方をするが、一方にV字状、他方は半載円状のもので砥ぎ込まれている。4・7は砂岩製である。

不明石製品（8）　幅11.4cm、残存長14cmで、両面が全面剝離するが、一方は丸まり三方の周囲には面取り痕が残り、縦位の刻線が施されている。その間隔に規則性は認められない。(木村)



第 66 図　鉄製品実測図(1/2)

鉄製品（図版30－１、第66図）

鉄鏃（１～７・９）　１は先端部を欠く。身は断面方形を呈し、茎との区別は不明瞭である。全体的に錆化が著しい。４号住居跡床面出土である。２は先端部の破片であり、現存長5.5cmを測る。先端は断面三角形、身は断面方形を呈する。６号住居跡床面出土である。４は身の破片。５は先端部を欠く。６は先端と茎を欠く。７は茎部の破片であり、ともに10号住居跡出土である。９は身の破片。10・11も鏃身の一部であろう。９・10は11号住居跡床面、11は12号住居跡床面の出土である。

鉄鉇（８）　撥形を呈し、茎部でＬ字形に折れ曲がっている。先端での幅1.8cmを測る。11号住居跡の出土である。

刀子（12）　切先を欠き、現存長8.9cm、刃部最大幅9.0cmを測る。背は平坦である。茎部には木質が遺存している。16号住居跡埋土中の出土である。

鉄鎌（13）　刃部中央の破片で、幅2.8cm、厚さ0.3cmを測る。11号住居跡の出土である。

環状鉄器（14・15）　14は楕円形を呈し、長径3.3cm、短径2.0cm、厚さ0.4cmを測る。15は指輪状で、径2.1cm、幅0.7cm、厚さ2.0cmを測る。14は１号方形竪穴、15は１号住居跡埋土中の出土である。

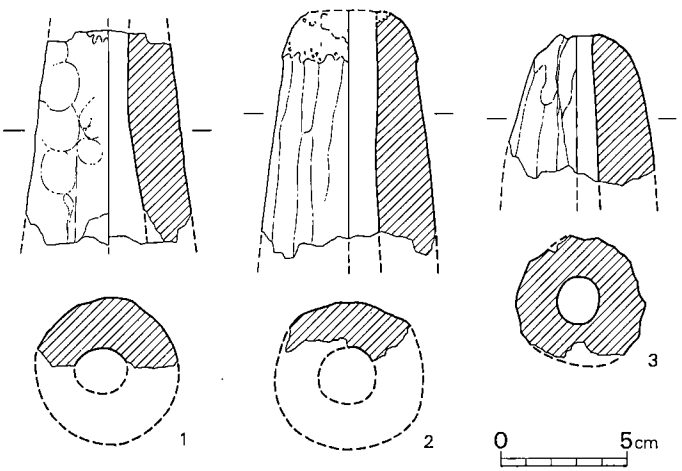
16は断面方形を呈し、円弧を描く。３号住居跡の出土である。

フイゴ（図版30－２、第67図）

１～３はフイゴの羽口破片である。１は先端部と基部を欠き、現存長8.5cmを測る。外面には指頭圧痕がみられ、部分的に鉄滓が付着する。胎土に砂粒を多く含み、色調は暗灰色を呈する。

２は先端部の破片であり、現存長9.8cmを測る。先端には鉄滓が付着し、灰色を呈する。外面はヘラケズリされ、胎土に砂粒を多く含む。３は先端部の破片であり、現存長6.1cm、最大外径5.8cm、内径1.7cmを測る。先端には鉄滓が付着し、灰色を呈する。胎土に砂粒を多く含む。

１は３号、２は７号、３は10号の各住居跡の床面出土である。（小田）



第 67 図　フイゴ羽口実測図(1/3)

Ⅳ まとめ

1．竪穴式住居跡の変遷

前章では、個々の住居跡の時期にはふれなかったので、ここでは住居跡の平面形・カマドの形状等を踏まえた上で、小郡前伏遺跡の竪穴式住居跡の変遷について考察したい。

（1）住居跡の形態

小郡前伏遺跡の竪穴式住居跡の平面形には、方形と長方形の二者があり、ここで注目されるのが住居跡の規模（床面積）と柱配置の関係であり、3類に大別できる。

Ⅰ類……床面積が20m^{2}前後で、床面の中央寄りに柱を4本方形に配置している住居跡。
（3・5～8・12・14号）

Ⅱ類……床面積が12～14m^{2}で、コーナー部に柱を4本方形に配置している住居跡。
（1・2・13号）

Ⅲ類……床面積が10m^{2}未満で、柱は竪穴内に存在しない住居跡。（10・11号）

（2）カマドについて

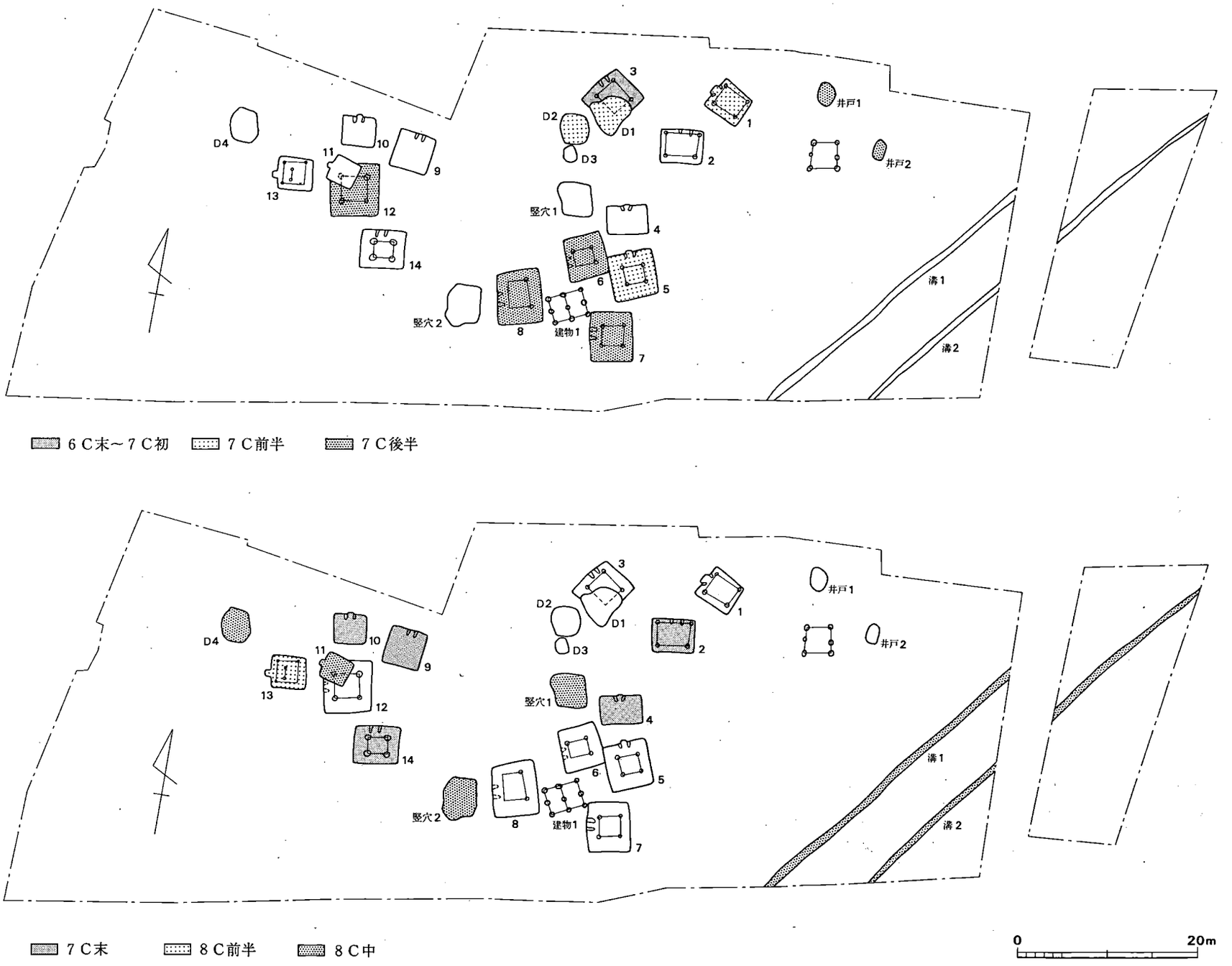
カマドには作り付け式と突出式のものがある。Ⅰ類は作り付け式のカマドを北壁（5・14号）、北西壁（3号）、西壁（7・8？・12？号）に付設している。また、5号住居跡のカマドは作り付け式としたが、住居壁を僅かばかり掘込んで袖部を接合しており、両者の中間的形態を呈する。

Ⅱ類は作り付け式と突出式の両者を北壁（2号）、北西壁（1号）、西壁（13号）に付設している。

Ⅲ類は突出式のカマドを北壁（10号）、北西壁（11号）に付設している。

ここで注目されるのが5・7・10号住居跡にみられるカマド横のピットである。何れも住居壁を抉って掘込んでおり、中には炭・焼土・灰が詰まっていた。通常、カマドは日々使用されるものであるから、灰さらえも頻繁に行う必要がある。カマド横ピットはその在り方からして、灰を一時的に貯めておくための穴かと推察する。

ただ、カマド横ピットを持たない住居跡が大半を占めており、その有無は何に起因するかは今後の課題としたい。



第 68 図　小郡前伏遺跡住居跡変遷模式図(1/600)

（3）住居跡の時期

次に、出土遺物の面から個々の住居跡の時期をみることとする。

3号住居跡の屋内土壙からは須恵器が出土しており、坏蓋（1）の口唇部は丸く、天井部はドーム状を呈する。また、坏身（2）は受部の立上りが高く、外面にヘラケズリを施すことから6世紀末～7世紀初頭に比定できよう。5号住居跡出土の坏身（1～3）は、器高が低く、受部の立上りも低いことから3号住居跡出土の坏身よりも後出し、7世紀前半代と考えられる。1号住居跡出土の坏身（1・2）も5号住居跡出土のそれと同時期であろう。

8号住居跡出土の坏蓋（1）は、口縁部内面にかえりを有し、天井部に擬宝珠つまみを付していることから7世紀後半における。カマドは攪乱を受けている西壁側に付設していたものと考えられ、西壁側にカマドを付設する住居跡に7号があり、同時期におけよう。また、11号住居跡出土の坏身（1）・坏蓋（2）は、12号住居跡の出土とした方が妥当であり、これは当初11号住居跡のプランをうまくつかめなかったことによる。12号住居跡のカマドは、7・8号同様攪乱を受けている西壁側に付設していたものと考えられる。

14号住居跡の坏蓋（1）は、口縁部内面にかえりを有し、8号住居跡出土の坏蓋と同形状を呈する。住居形態からいくと、7・8号に比してやや小ぶりであり、カマドが北壁側に付設されることから7・8・12号住居跡より若干後出するものであろう。2・4・9号住居跡は出土土器が乏しく時期判別に苦慮するが、作り付け式のカマドを北壁側に付設していること、規模がやや小ぶりであることから14号住居跡と同時期におけよう。

11・13号住居跡は床面積が10m^{2}前後で、突出式のカマドを西壁側に付設しており、11号住居跡は7世紀後半の12号住居跡と切合い関係にあることから8世紀代に下るものと考えられる。

以上、個々の住居跡の時期についてふれたが、時期的にはⅠ→Ⅱ→Ⅲ類への変遷をたどるようであり、カマドは作り付け式から突出式に変化するようである。

最後に、Ⅲ類とした住居跡に関して、武田光正氏は「竪穴部を立野遺跡の主柱間エリアに比定できて土間的機能を果たしていたとも推察される。そして住居規模も当遺跡の中・大型と同じ程に考えられる(註1)。」との興味ある考え方をされている。また、青森県弥栄平遺跡17号住居跡(註2)は、床面積22m^{2}程を測り、竪穴外に周堤を付設している。竪穴内において柱は検出されていないが、周堤部に存在した可能性もあり、「超小型無主柱穴住居(註3)」もその可能性が考えられることを指摘して終わりにしたい。（小田）

2．おわりに

前項で、主に竪穴式住居跡についての問題点とその時期についてふれた。そこにはまだ多くの問題点があり、今回検出した14軒の住居跡と他の遺構を含めた集落構成もそれらの一つである。方形竪穴、土壙の性格についてはよく判らなかったが、竪穴式住居跡と何らかの関係が存在するのではないかという推測から整理を進めてきたが、相対的な関係を見い出すには至っていない。

住居跡と他遺構を時期的に類別すると次のようになる。

	住居跡	他の遺構	時期
Ⅰ	1・3・5	1・2号土壙，1号堀立柱建物(?)	6C末～7C前半
Ⅱ	2・4・7・8・9・12・14		7C中～後半
Ⅲ	10・11・13	1・2号方形竪穴，4号土壙，1・2号溝	8C前半～中

1号土壙からは多量の土器が出土しており、Ⅰ期における廃棄穴としての性格が考えられる。1号掘立柱建物は、Ⅱ期とした7・8号住居跡と接近しているのでそれと併存した可能性は低く、Ⅰ期かⅢ期の何れかということになり、方向性からみてⅠ期とした方が妥当かと思われる。

方形竪穴、土壙については、その性格を知る上で平面・土層の観察はもちろん、細部に至るチェックを試みた。その結果、出土土器及び埋土の堆積状況も隣接する住居跡と差異は見られない。こうした状況は、住居跡（数軒を一グループとした単位）に伴って方形竪穴、土壙等がセットとして存在した可能性が考えられる。

さらに、住居跡と方形竪穴、土壙から比較的多くの鉄製品、鉄滓、フイゴの羽口が出土している。これらのことを勘案すると、今回検出した住居は『鍛治』を職業とする住居兼作業場的性格を窺うことができる。つまり、鍛治を共同労働とする集落の色彩が濃いように思える。しかし、住居から出土した鉄製品の数は1点が殆どで（稀に2～3点出土した住居跡もある）、資料の絶対数が少ない現状では、検討対象とするには類例の増加と検討の時間が必要である。

井戸については、日常生活の拠所としての共同井戸とみるべきであろう。また、道跡状遺構が検出されたことは、今回の調査の大きな視点でもある。

最近の目まぐるしい発掘調査により、古墳時代から歴史時代における住居跡、特に考古学上における集落の問題が少なからず提起されつつある。この九州横断道建設用地内の遺跡でも同じことであり、立野遺跡(註4)、宮原遺跡(註5)、塔の上遺跡(註6)、薬師堂東遺跡(註7)、中道遺跡(註8)、上の原遺跡(註9)等で夥しい数の住居跡が調査され、資料が蓄積しつつある。これらの竪穴式住居跡、掘立柱建物等

の問題点を抽出してみても、立地条件、規模、配置、構造、内部施設のあり方等、諸々の問題が起因し、それらを丹念に分類・検討しつつ報告がなされている。

しかしながら、最近の研究成果の一端を覗く時、古代人が生活した居住空間、及び人の行為、換言すれば、古代人の考え方には立ち入っていないのが実状である。こうした現状を直視し、歴史時代における集落を究明していかなければならないが、今ここに提示された個々の遺構を詳細かつ論的に表現するには、資料不足と不勉強も加わって充分に対処できない点が多い。以後、これらの問題点を加味し、後の報告に譲ることとしたい。

最後に、本報告をまとめるにあたって、福岡県文化課甘木発掘調査事務所の皆々様に御協力頂いたことを感謝したい。(高橋)

註　1　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―8―　福岡県教育委員会　1986

註　2　弥栄平(4)(5)遺跡発掘調査報告書　青森県教育委員会　1986

註　3　註1文献に、大型住居……床面積25m^{2}以上、中型住居……床面積15～25m^2、小型住居……床面積15m^{2}以下と大別しており、「超小型無主柱穴住居」は床面積が15m^{2}以下で、竪穴内に主柱穴が存在しない住居跡をさす。

註　4　註1に同じ。

註　5　福岡県教育委員会が1981～83年度の3年間に渡って調査を行ない、現在整理中である。

註　6　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―9―　福岡県教育委員会　1987

註　7　福岡県教育委員会が1984～85年度にかけて調査を行ない、現在整理中である。

註　8　福岡県教育委員会が1985年度に発掘調査を実施。

註　9　福岡県教育委員会が1986年度に発掘調査を実施。

図　　版

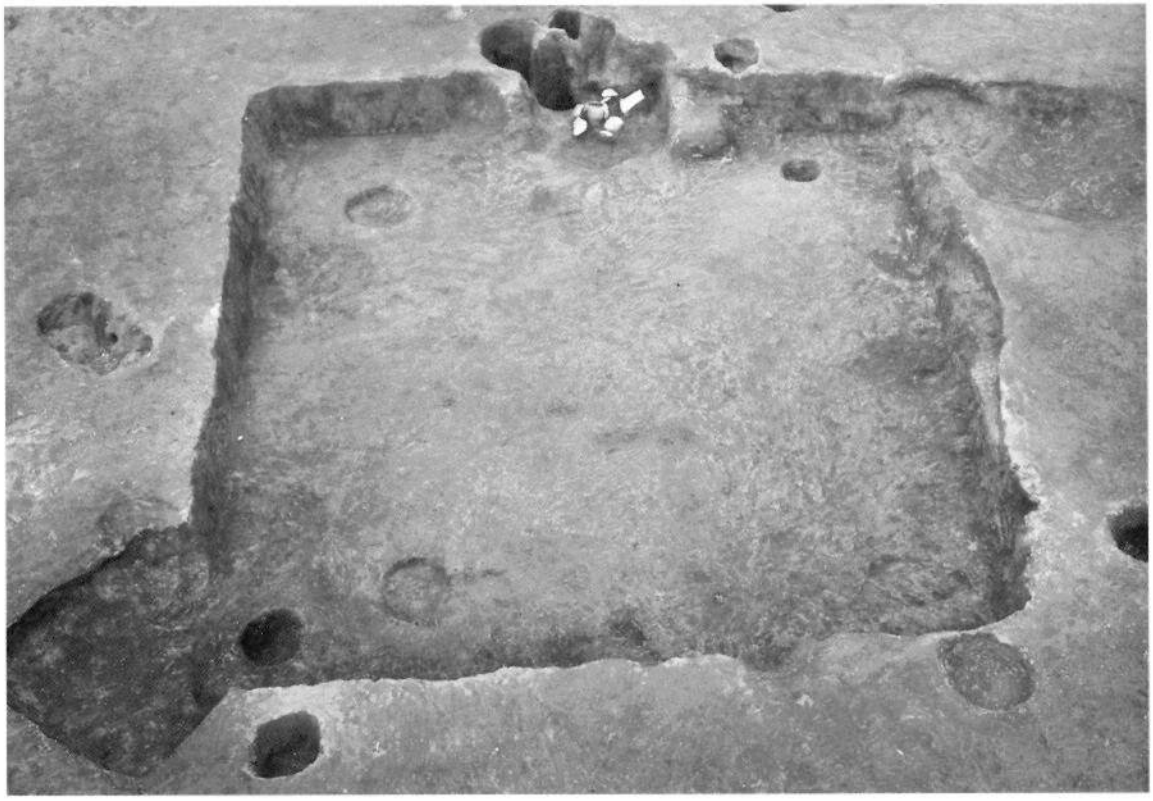
小郡前伏遺跡周辺航空写真（南西上空から）

1　前伏遺跡全景（東から）

2　前伏遺跡全景（西から）

1 住居跡群（東から）

2 住居跡群（西から）

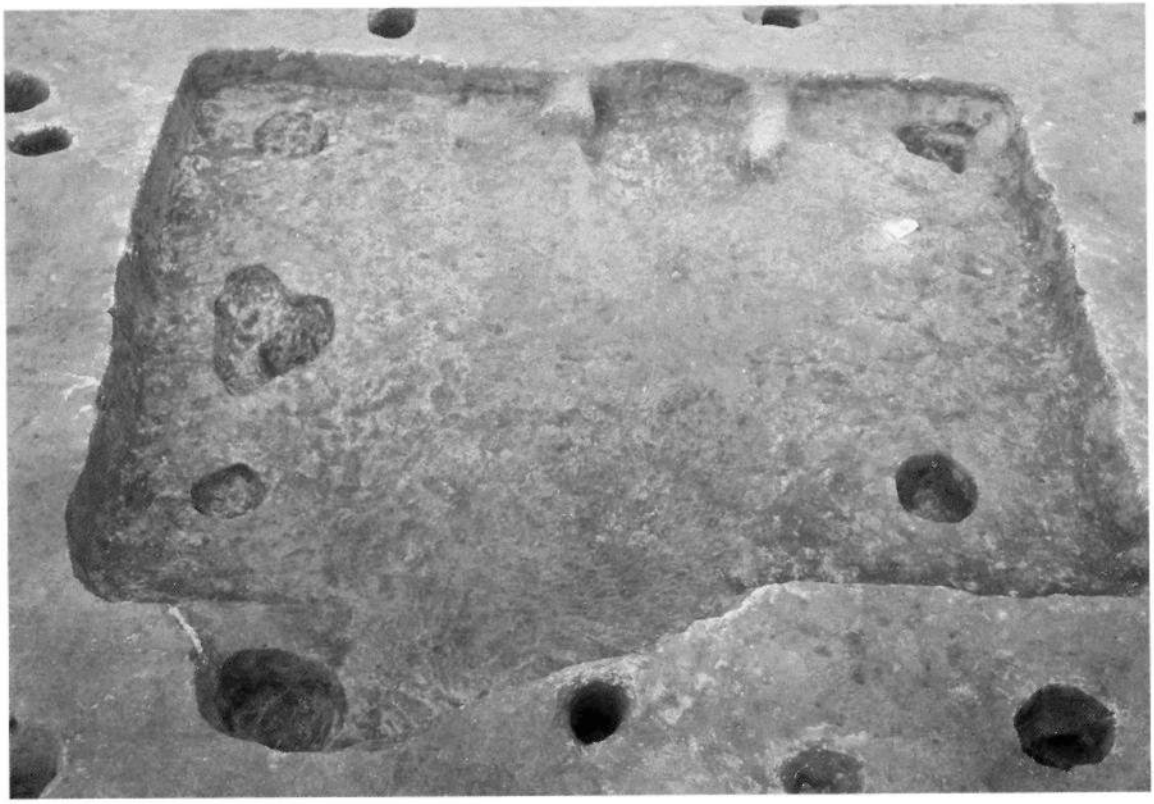


1　1号住居跡（南から）

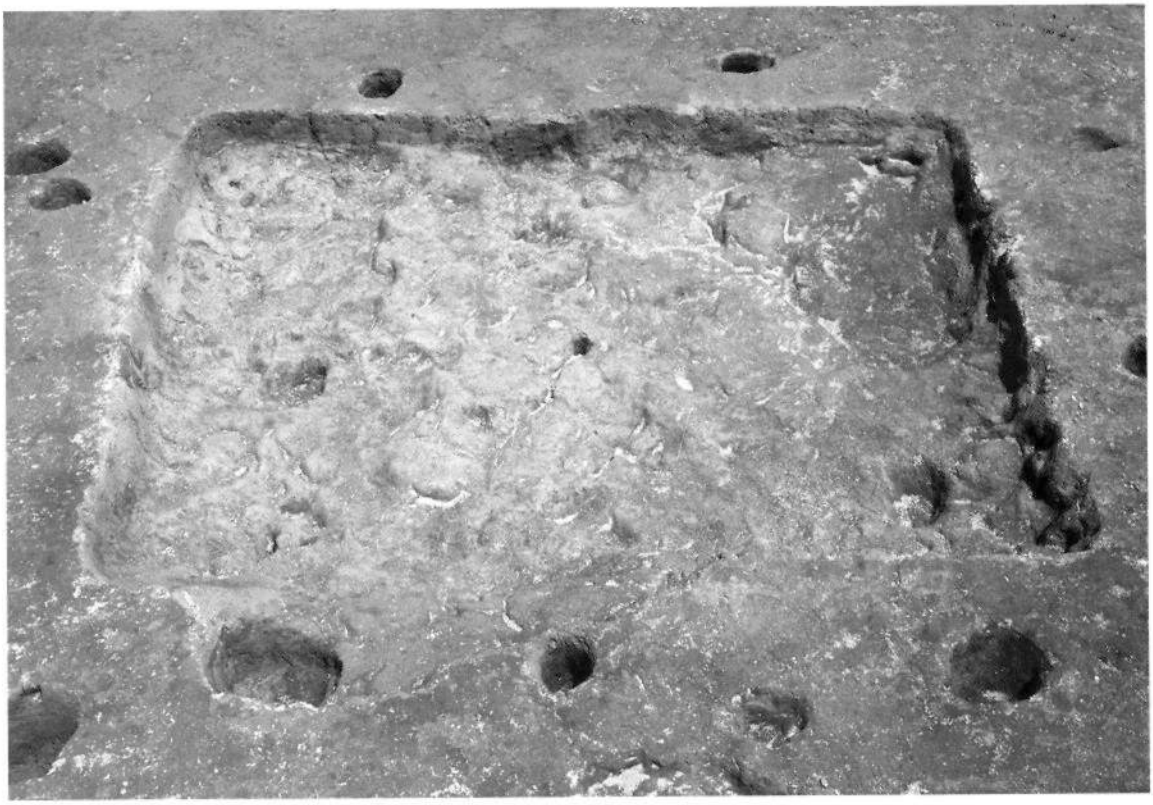
2　1号住居跡貼床下部（南から）

1　1号住居跡カマド

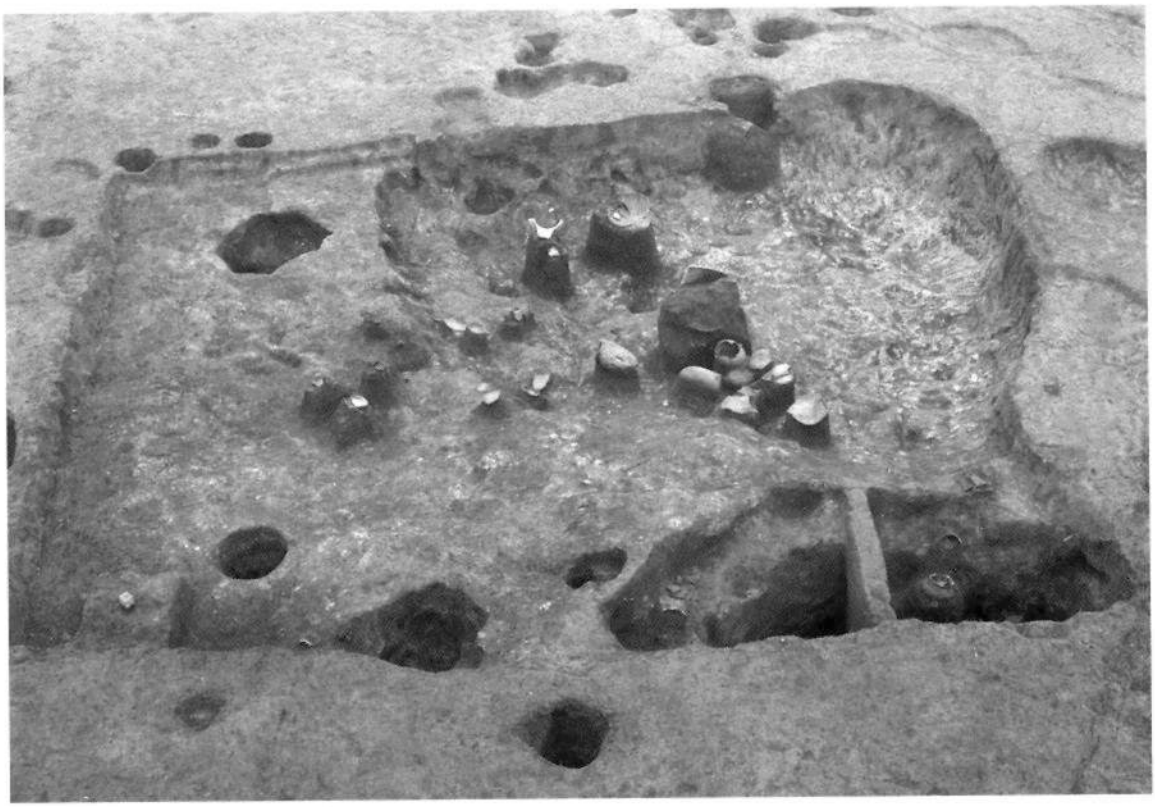
2　2号住居跡カマド



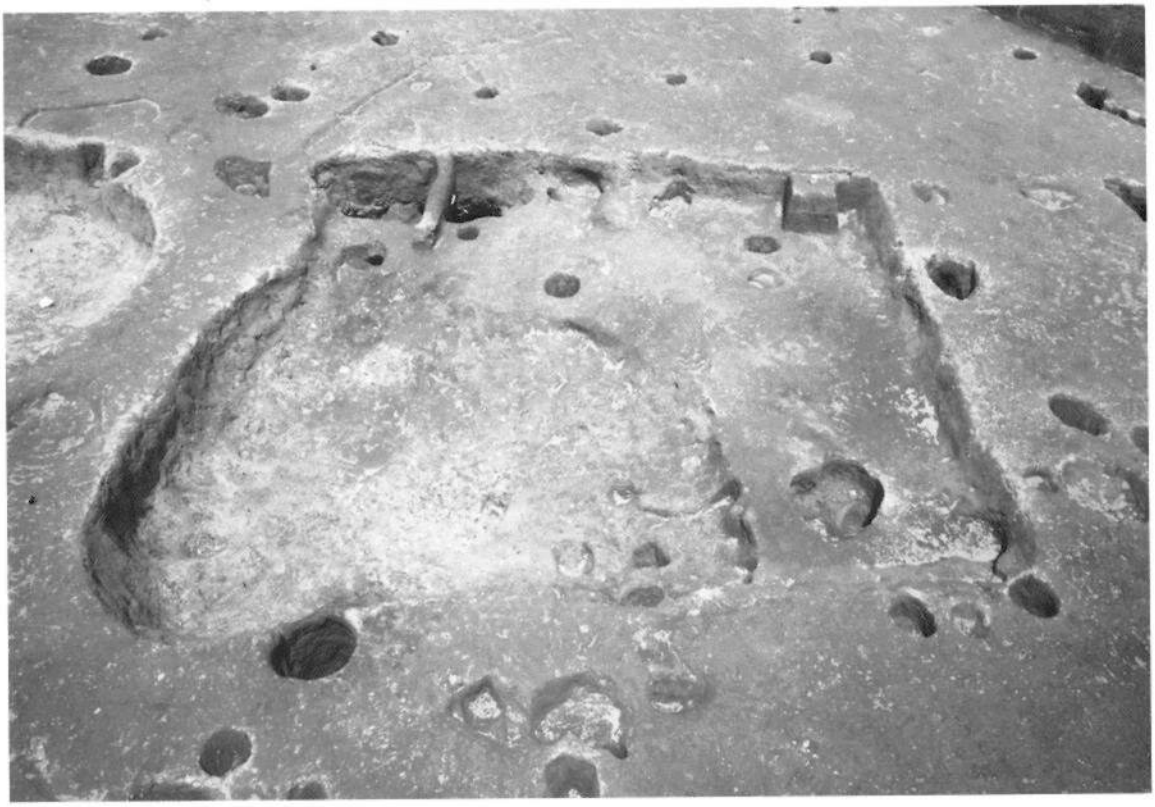
1　2号住居跡（南から）



2　2号住居跡貼床下部（南から）



1　3 号住居跡，1 号土壙遺物出土状況（北から）



2　3 号住居跡貼床下部，1 号土壙完掘後（南から）

1　4 号住居跡（南から）

2　4 号住居跡カマド

1　5 号住居跡（南から）

2　5 号住居跡カマド

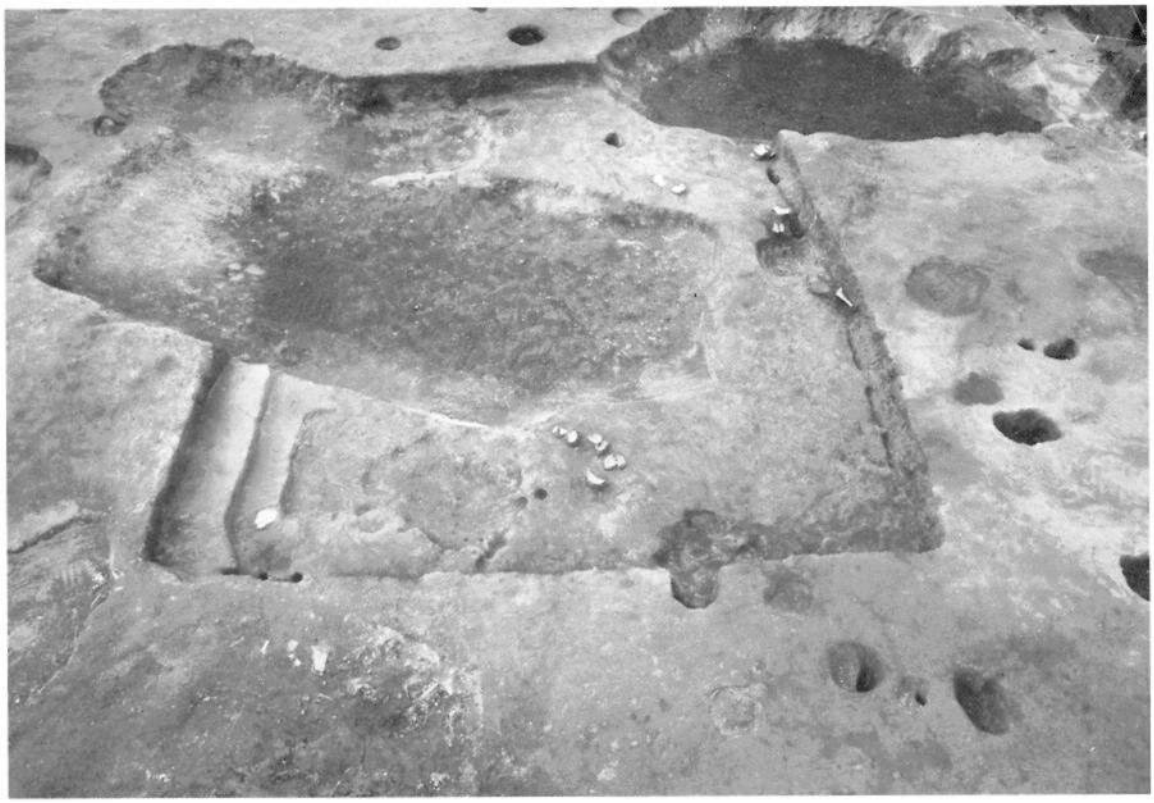
1　4～8号住居跡（東から）

2　6号住居跡（手前は5号住居跡カマド）

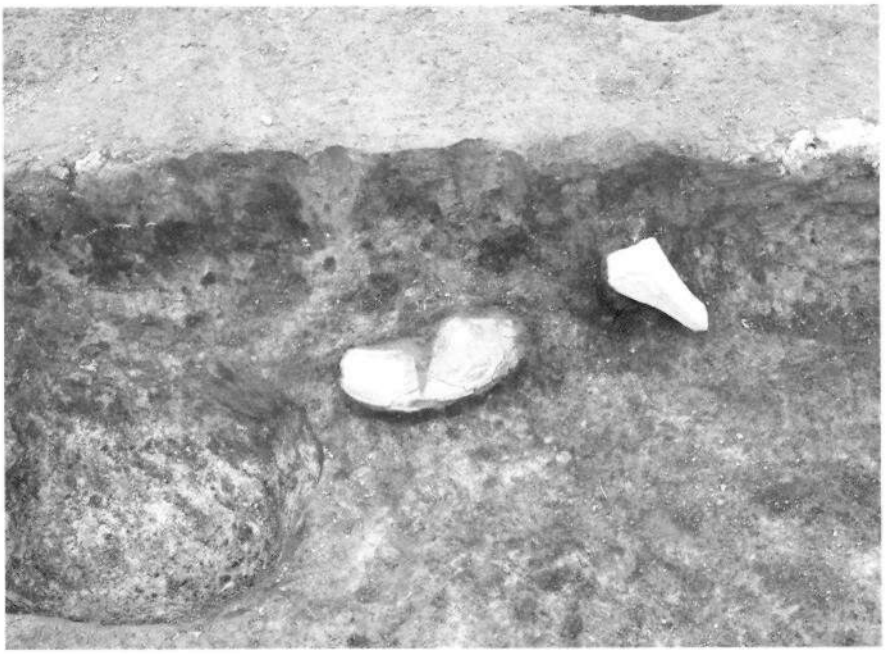
1　7号住居跡（南か

2　7号住居跡貼床下

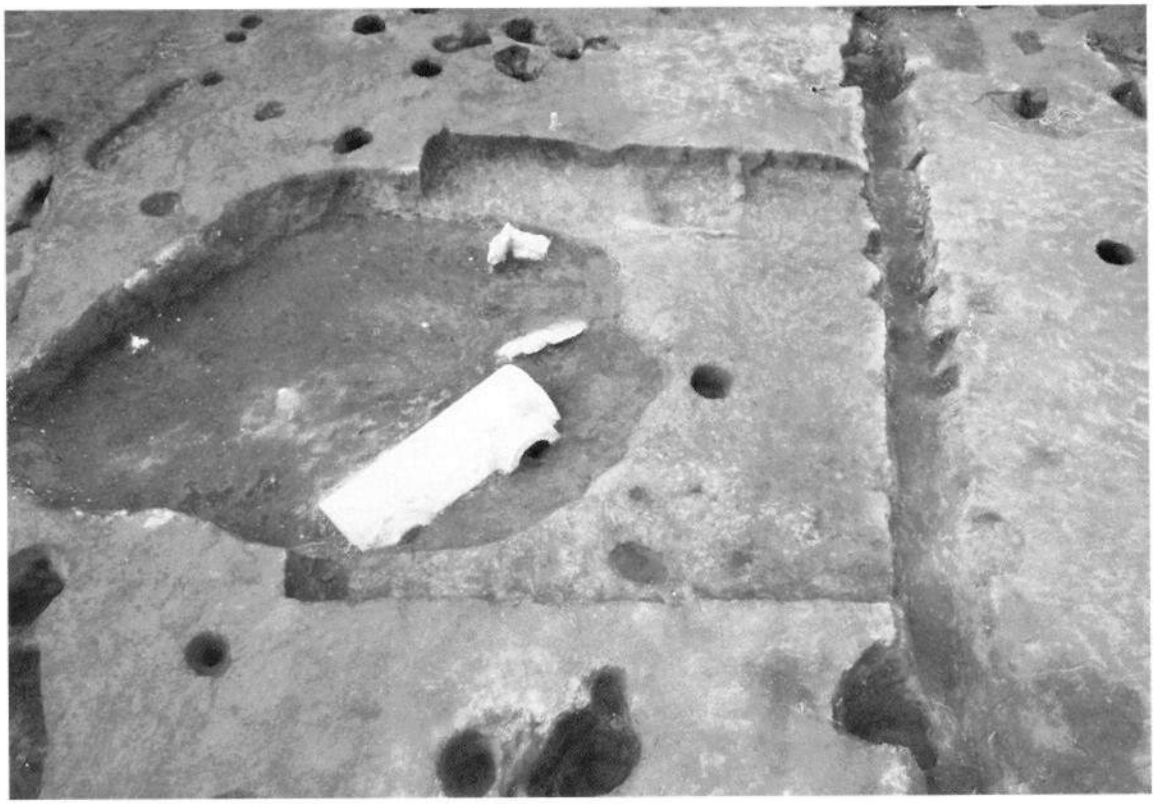
3　7号住居跡カマド



1　8号住居跡（南から）

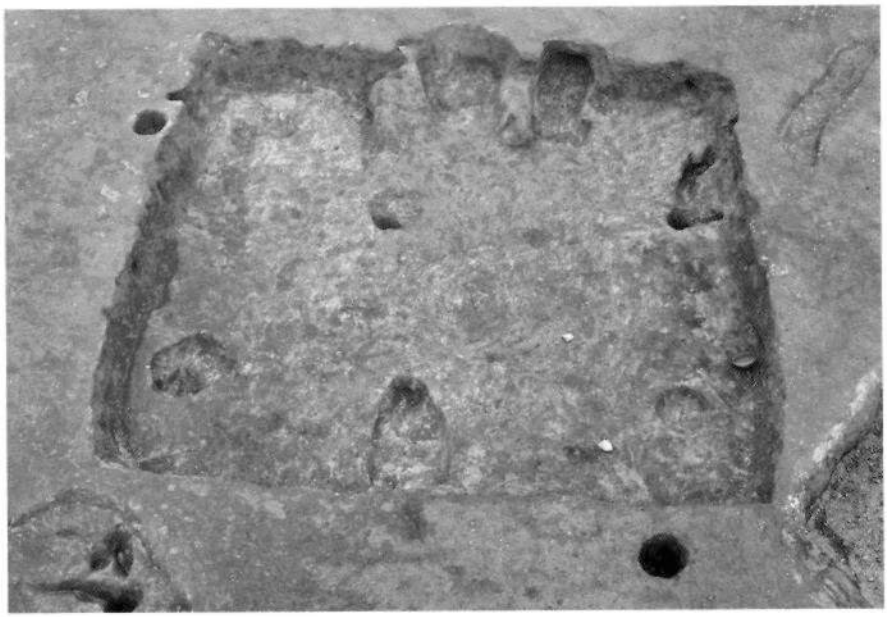


2　8号住居跡遺物出土状況



1　9号住居跡（南から）

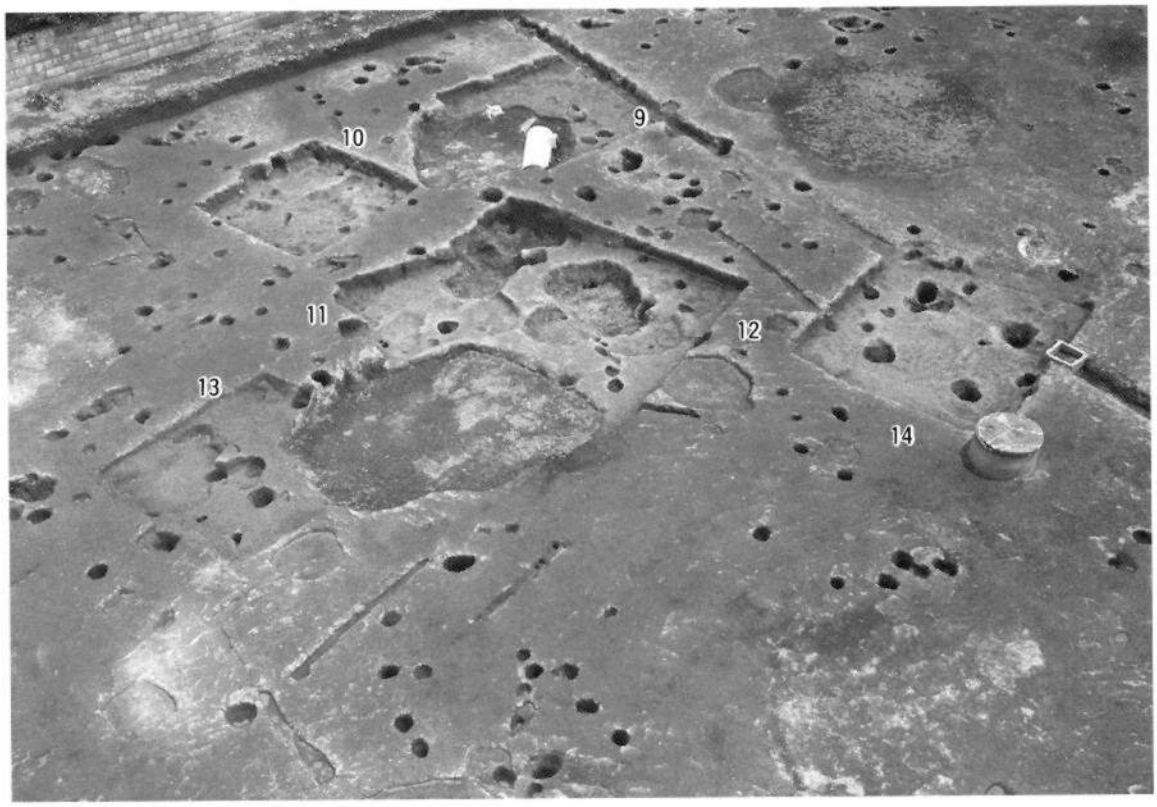
2　9号住居跡カマド（南から）



1　10号住居跡（南から）

2　10号住居跡貼床下部

3　10号住居跡カマド



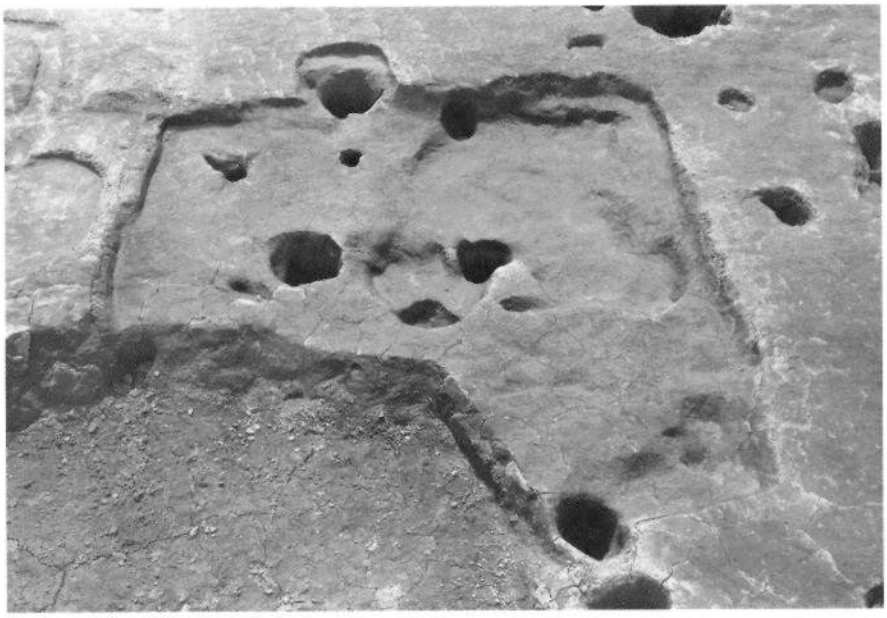
1　9～14号住居跡（西から）

2　11・12号住居跡（南から）

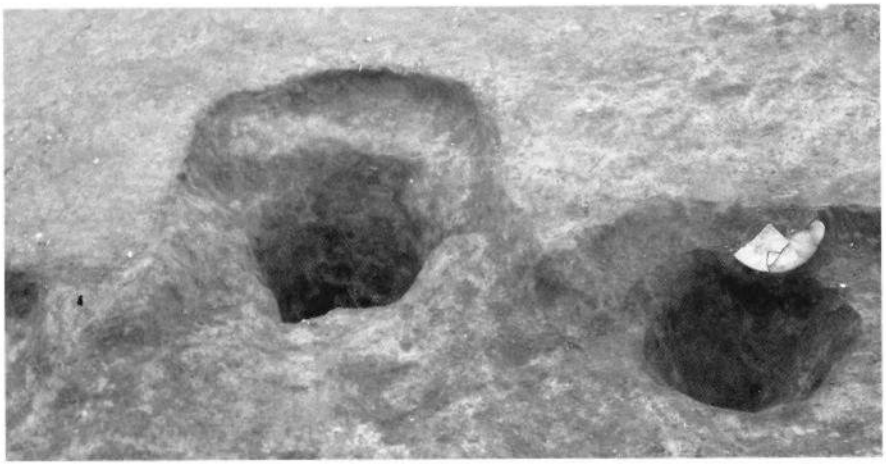
1　11・12号住居跡貼床下部（東から）

2　11号住居跡カマド（東から）

1　13号住居跡（東から）



2　13号住居跡貼床下部



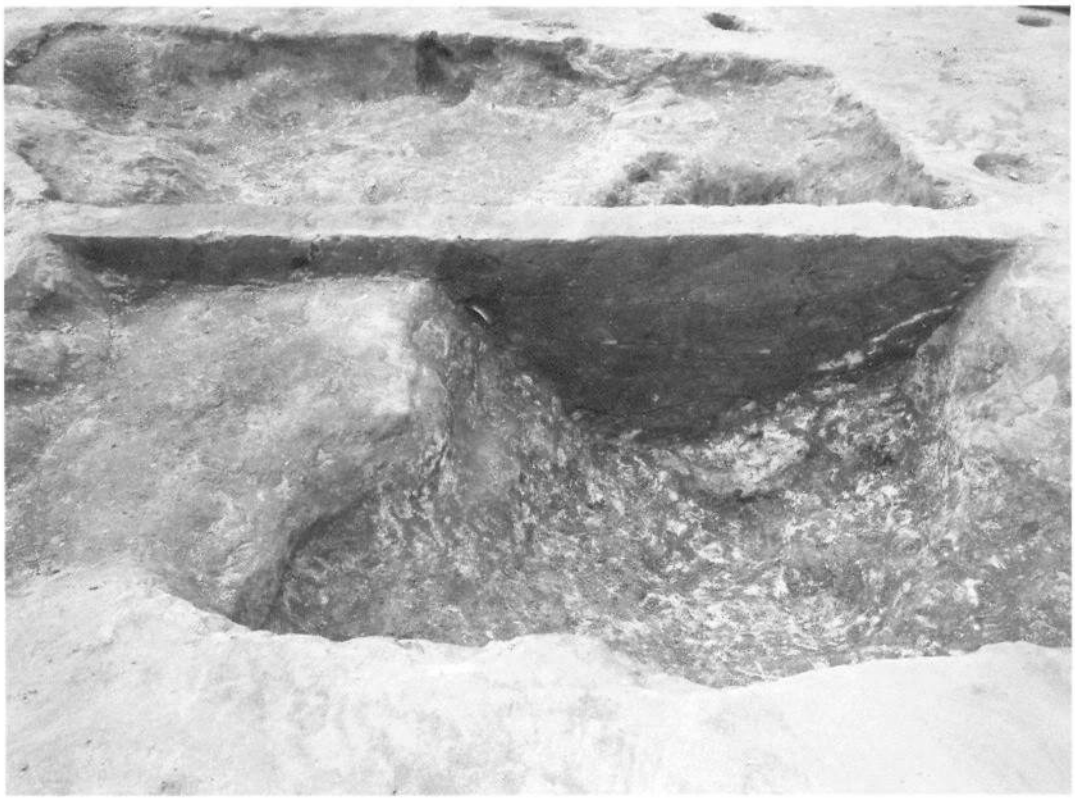
3　13号住居跡カマド

1　14号住居跡（南から）

2　14号住居跡貼床下部（南から）

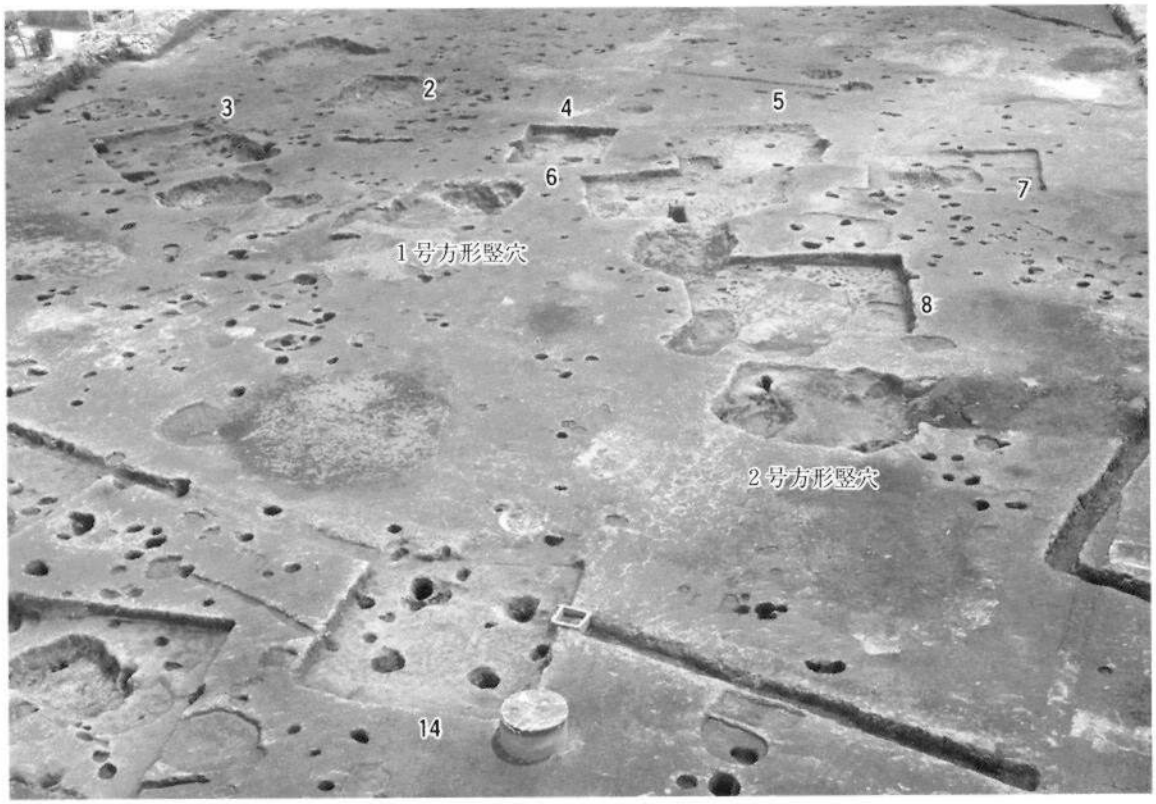
1　14号住居跡カマド（南から）

2　カマド土層断面

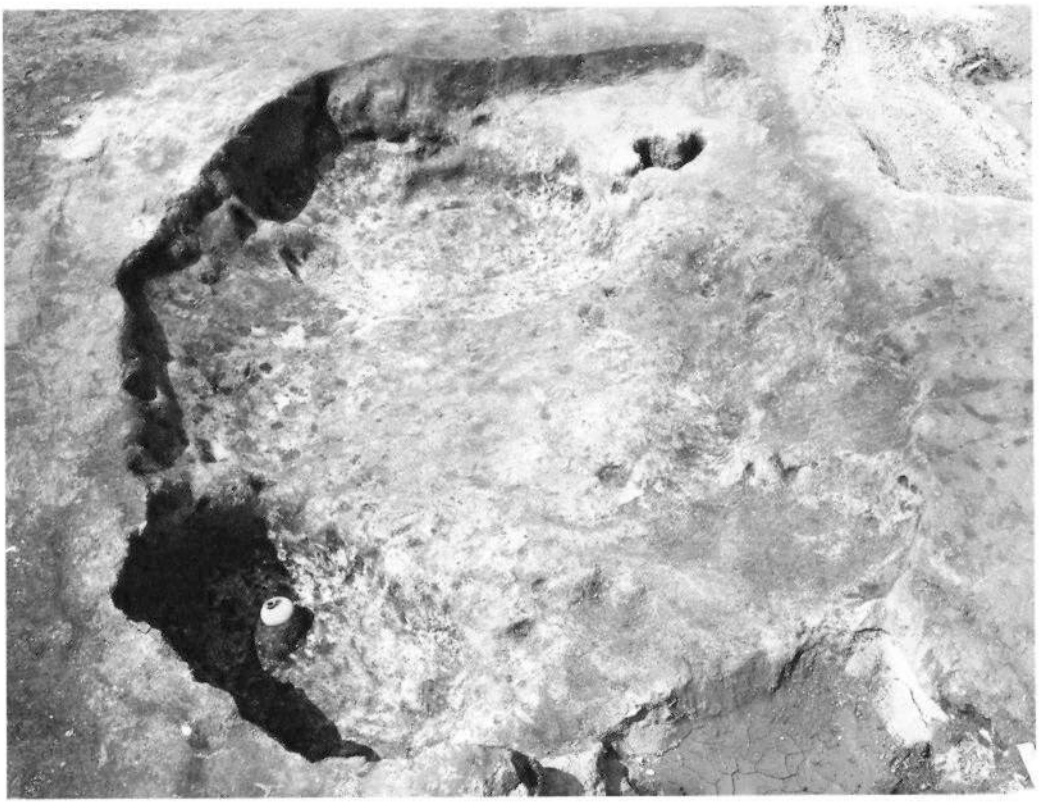


1　1号方形竪穴土層断面（南から）

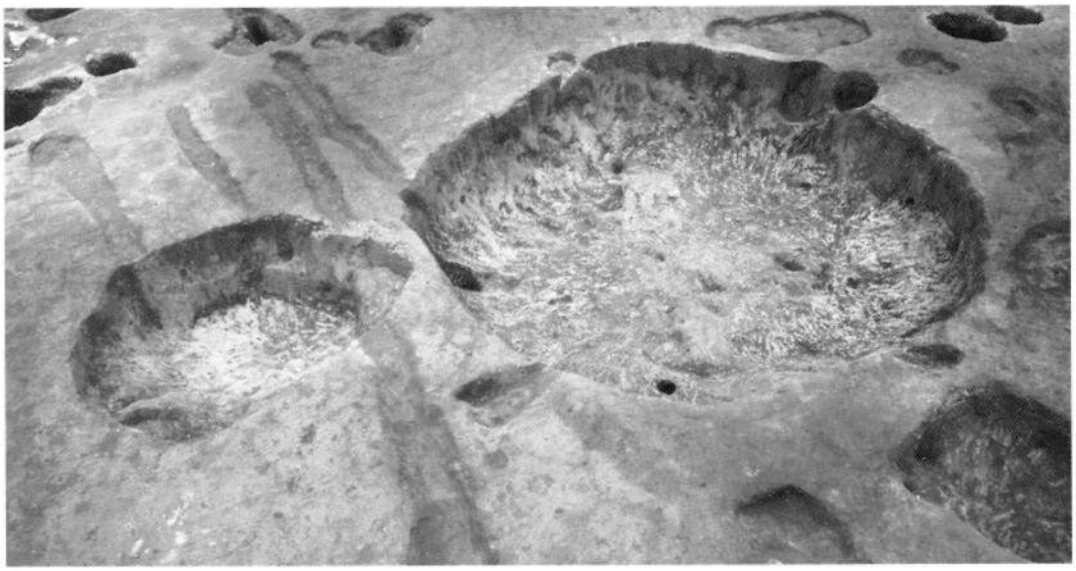
2　1号方形竪穴（東から）



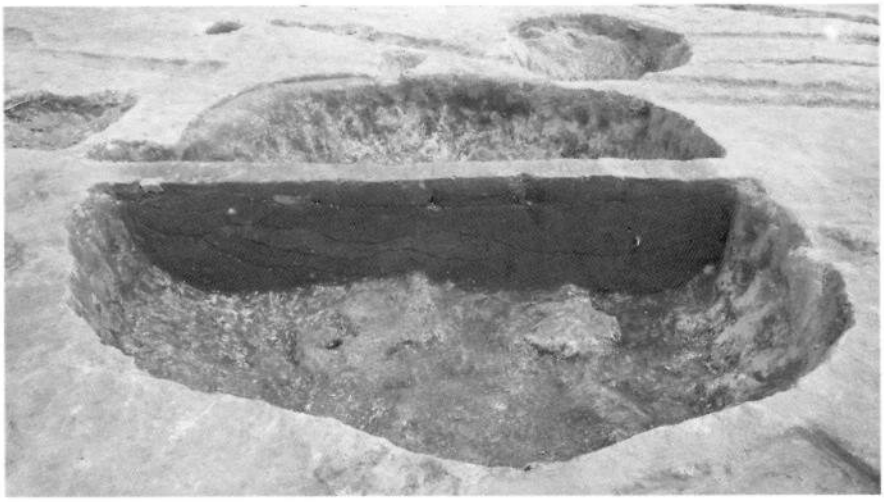
1　住居跡群及び1・2号方形竪穴



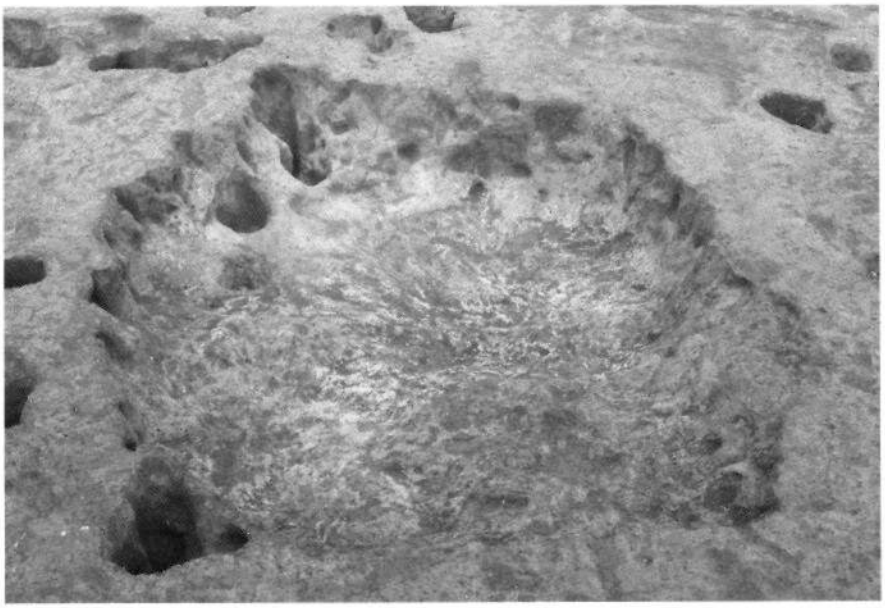
2　2号方形竪穴



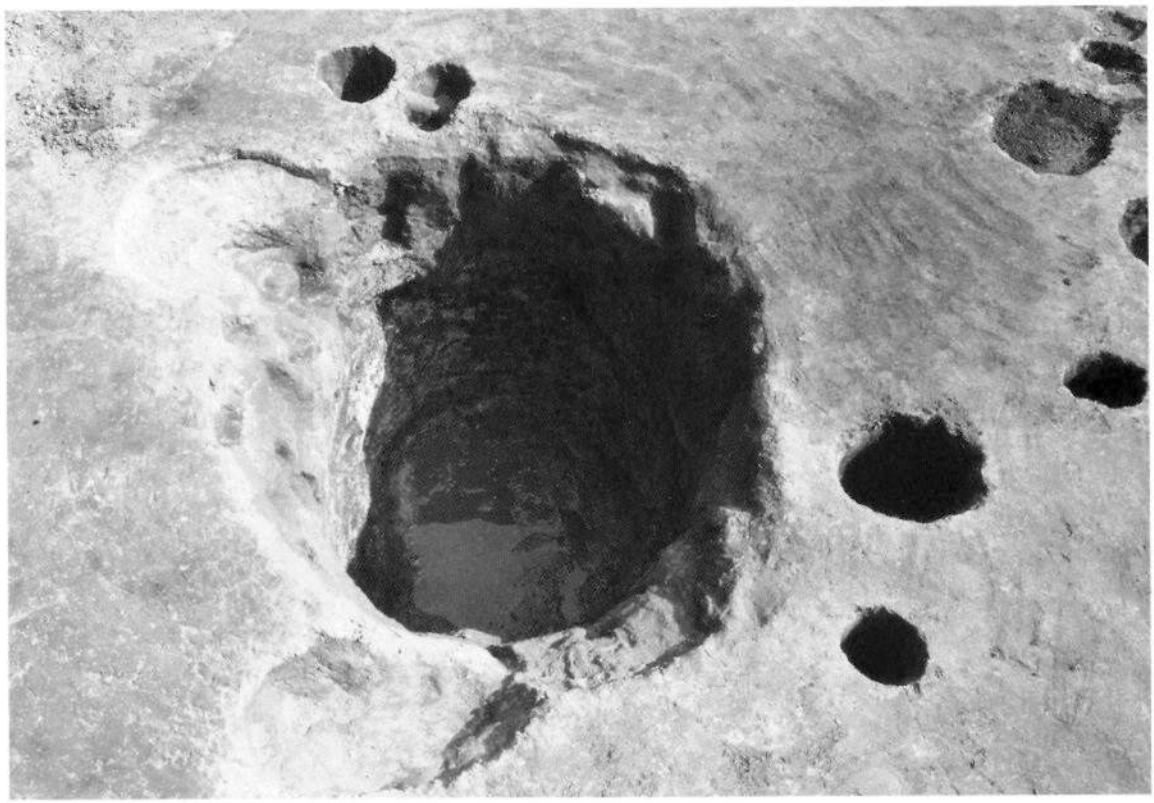
1　2・3号土壙（東から）



2　3号土壙土層断面

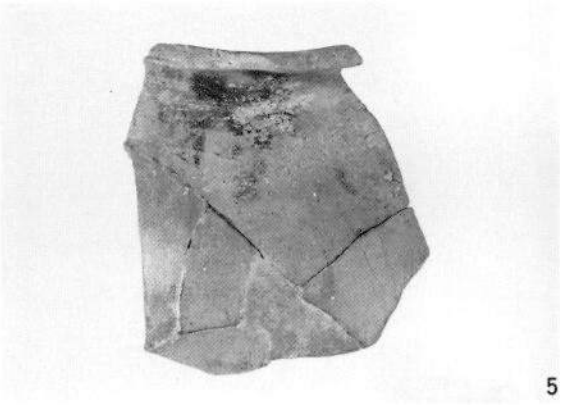


3　4号土壙（東から）

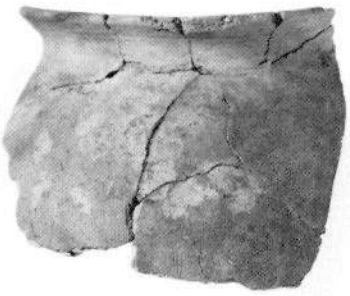


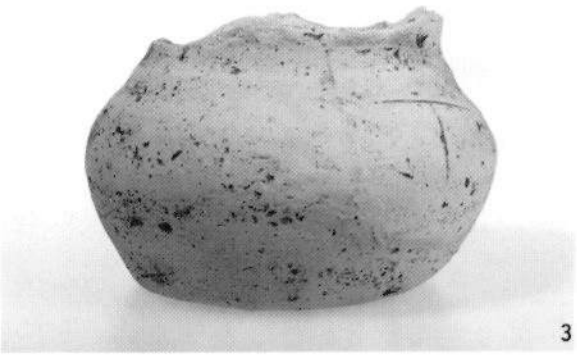
1　1号井戸（北から）

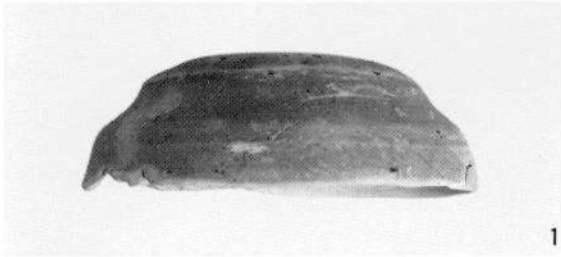
2　1号井戸土層断面（北から）

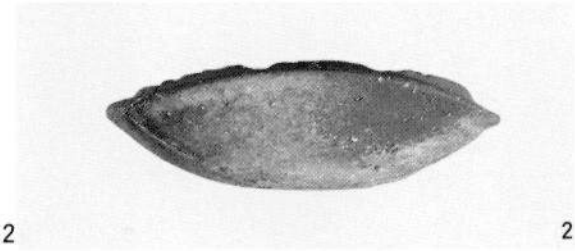

5

6


5


3


1


2

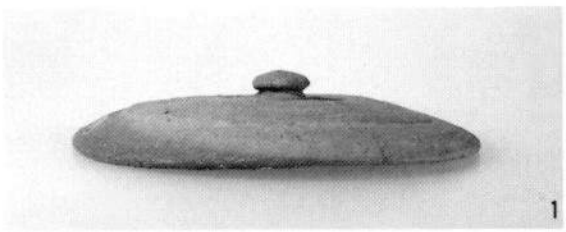
2

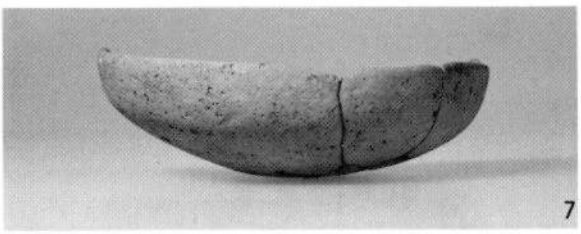
4

1

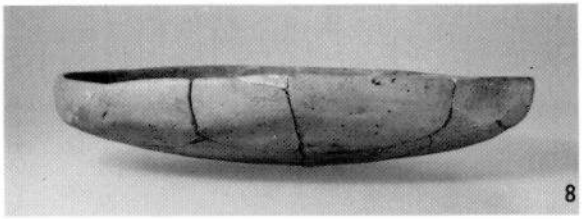
9 3

1　1号住居跡出土土器　　2　3号住居跡、屋内土壙出土土器
3　5号住居跡出土土器　　4　6号住居跡出土土器


1


7

3


8

1

2

6

2

3

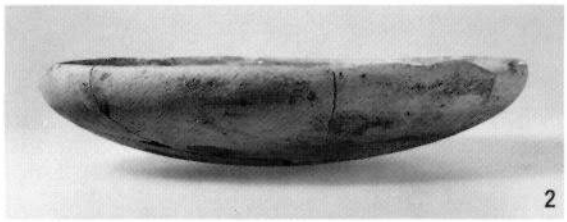
8

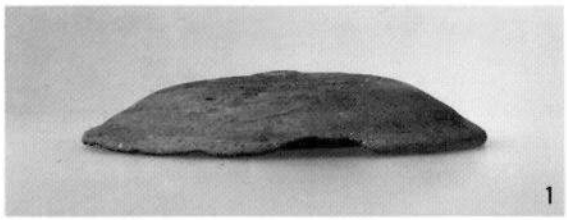
6

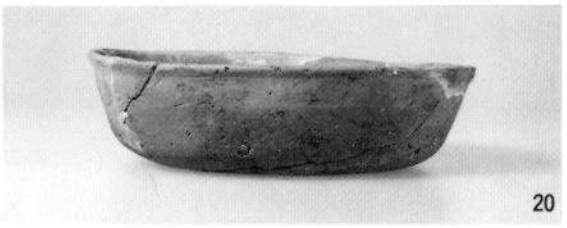
10

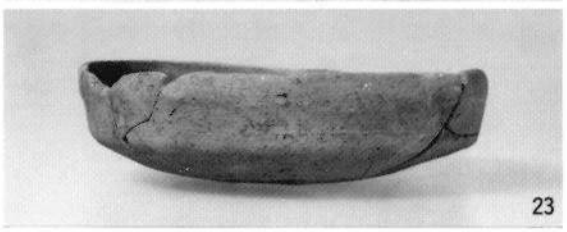
3

1　8号住居跡出土土器　　2　11号住居跡出土土器
3　12号住居跡出土土器

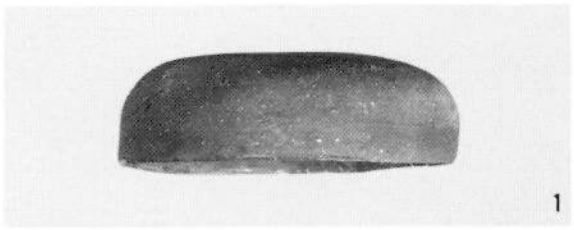


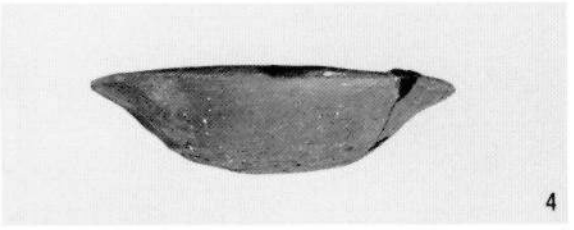


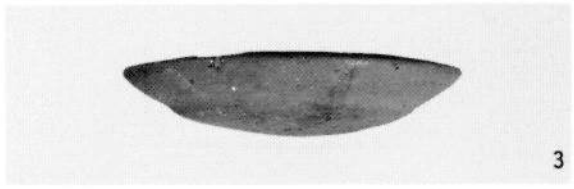


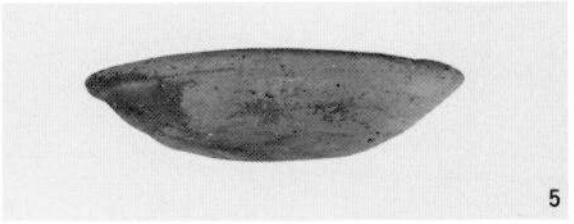


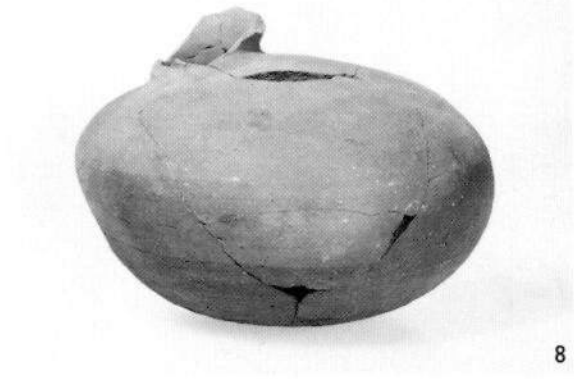
1　13号住居跡出土土器　　2　14号住居跡出土土器　　3　2号方形竪穴出土土器

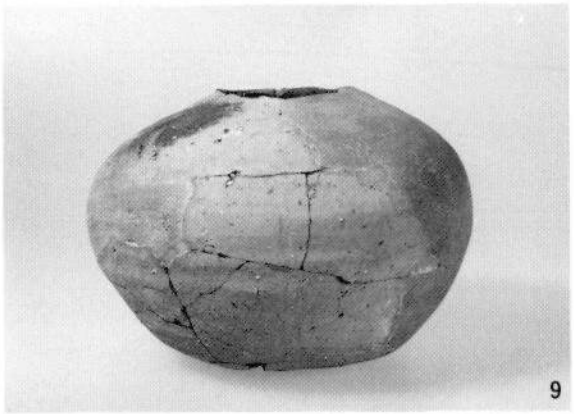

1


4


3

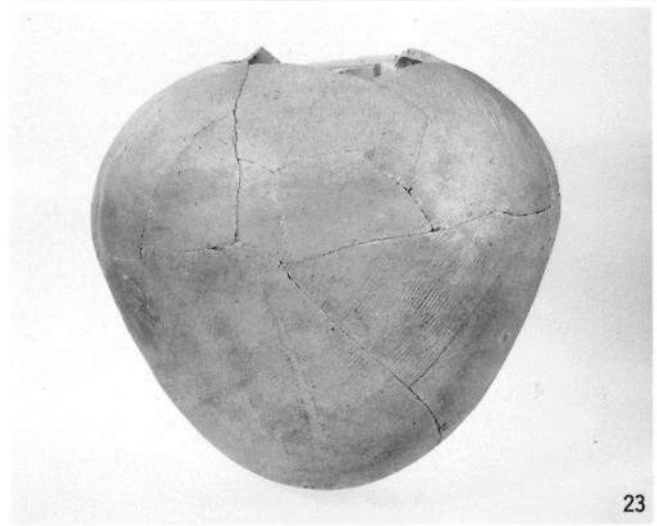

5


8


9

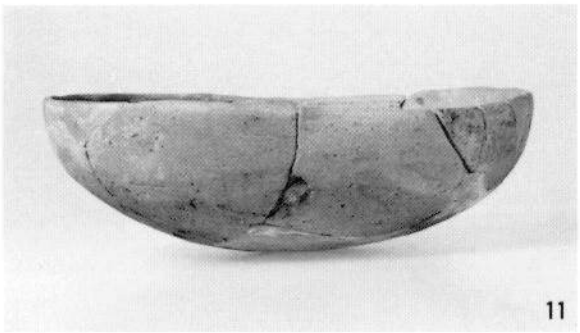
7

15

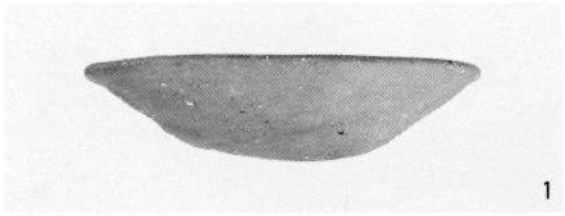

23

13

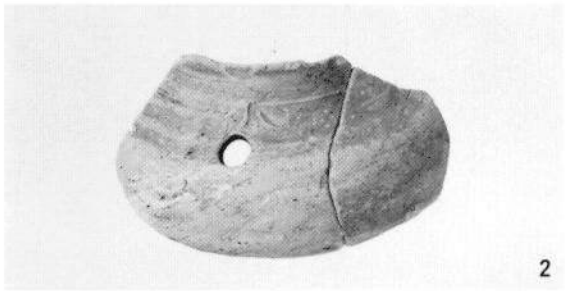
1号土壙出土土器①

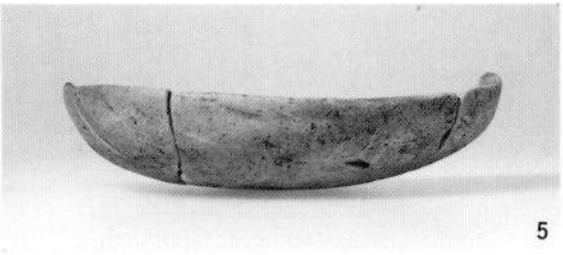

1 11

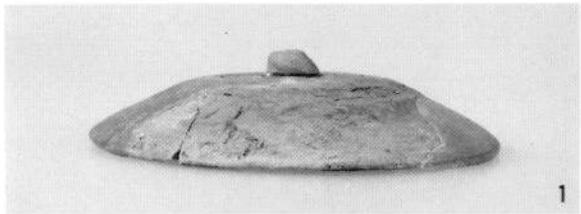
22


1

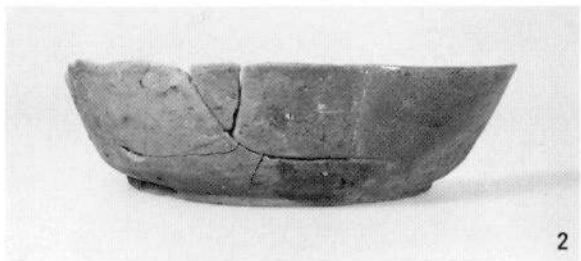
3 3

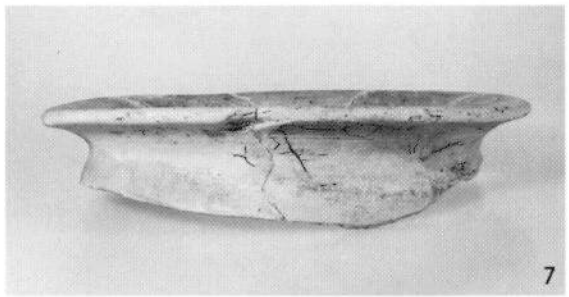

2 2

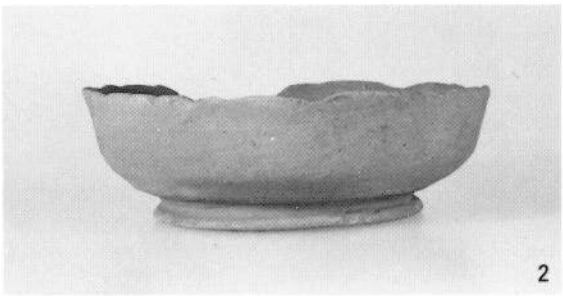

5


1

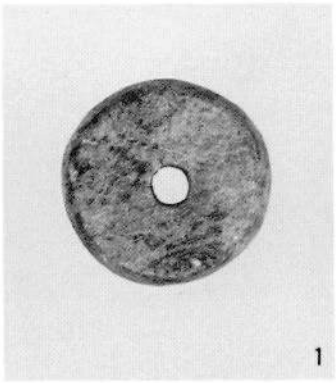
6


2

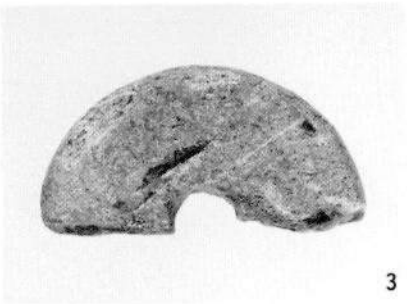

4 7

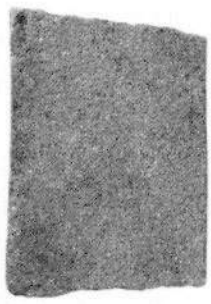

2 5

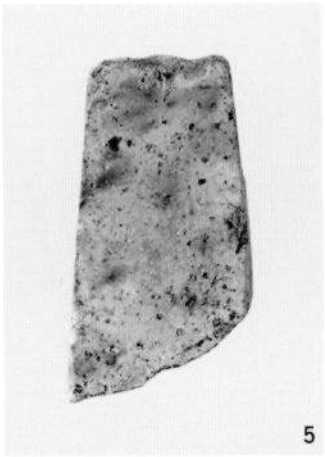
1 1号土壙出土土器②　2 2号土壙出土土器　3 4号土壙出土土器
4 1号井戸出土土器　5 2号溝出土土器


1

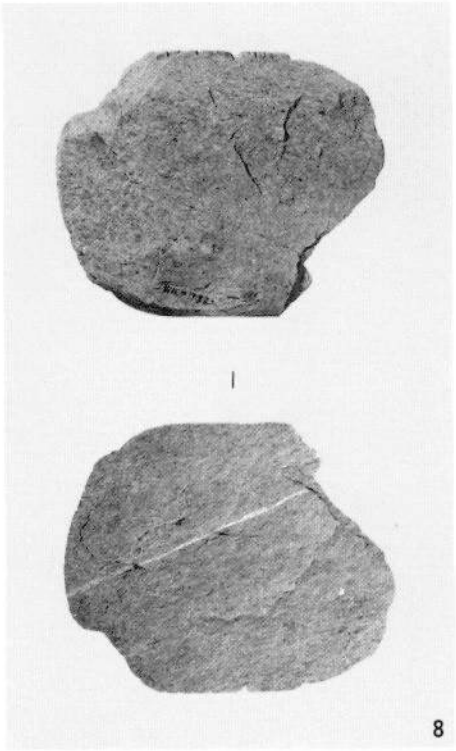
2

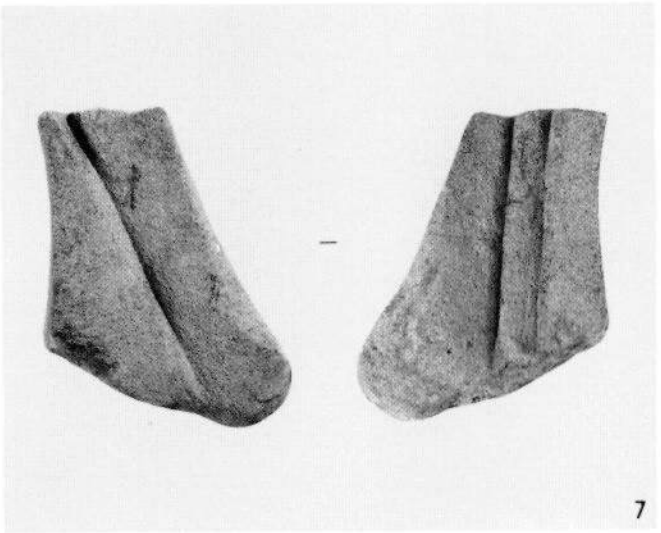

3


4

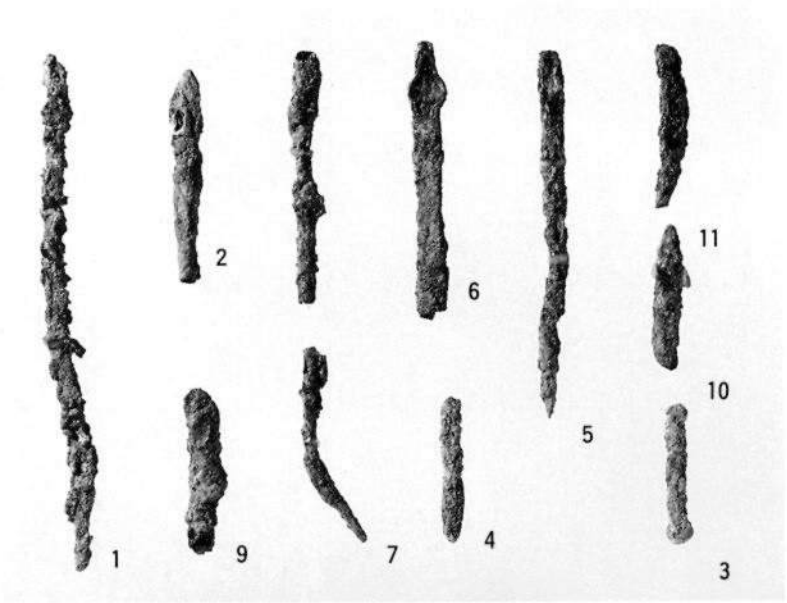

5

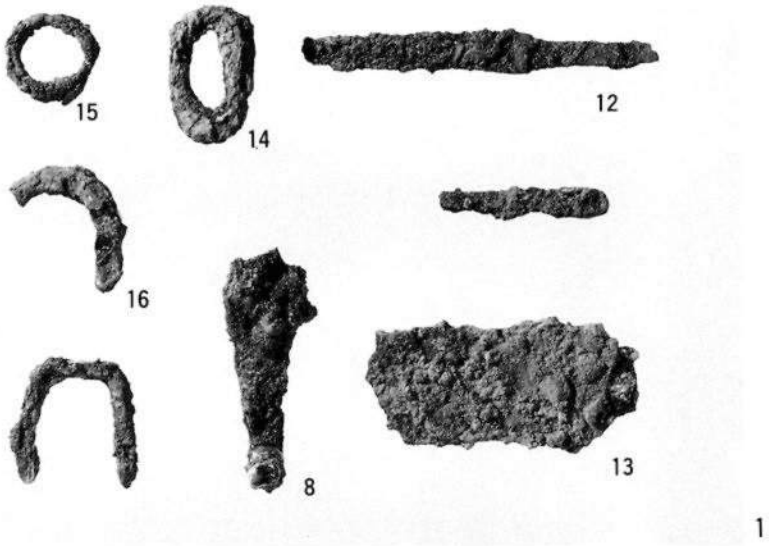
6


8

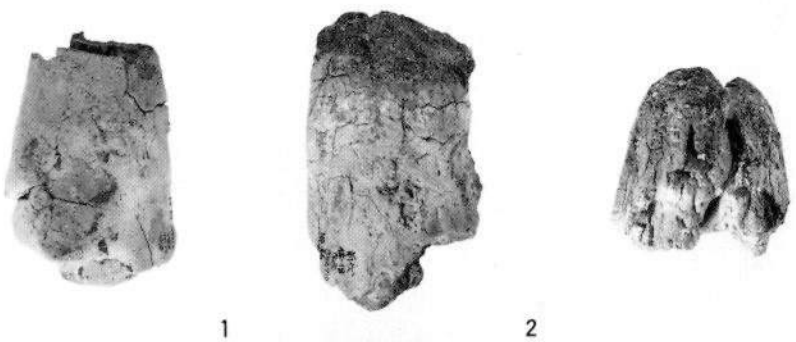

7

住居跡他出土石製品





1



2

1　住居跡他出土鉄製品　　2　フイゴ羽口

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード ２１３３０５１
登録年度 ６２	登録番号 1

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 —11—

昭和62年7月13日

発行　福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷　隆文堂印刷株式会社

北九州市門司区畑田町1—1

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—11—

小郡市所在前伏遺跡の調査

付　図

付　図　小郡前伏遺跡構配置図(1/300)